研究報告書 2011年3月

都市生活者意識調査 2010

分析編

―― 社会転換期の都市生活者の意識と行動――

公益財団法人 ハイライフ研究所

都市生活者意識調査2010 分析編

都市生活者意識調査 2010

分析編

―― 社会転換期の都市生活者の意識と行動 ――

研究体制

高津伸司　公益財団法人 ハイライフ研究所代表理事
広井良典　千葉大学教授
立澤芳男　マーケットプレイスオフィス代表
丹野俊明　株式会社 行動科学研究所代表
水嶋　敦　自由学園講師
高津春樹　公益財団法人 ハイライフ研究所専務理事
萩原宏人　公益財団法人 ハイライフ研究所事務局長
上野昭彦　公益財団法人 ハイライフ研究所主任研究員

目　次

第１章　本研究の目的

１．公益財団法人ハイライフ研究所の研究展開と本調査の位置づけ　1

２．本調査の視点と調査概要　2

（１）調査企画上の視点　2
（２）調査内容の編成　4
（３）調査設計上の留意点　4
（４）調査概要　5

第２章　都市生活者の生活意識と実態

１．経済環境の影響が大きい生活意識と実態　7

（１）暮らし向きの悪化　7
（２）「遊び・余暇」「健康・美容」への高まる関心と不満　10
（３）ストレスを感じている現役・子育て世代　14
（４）収入の増減が消費意欲に直結　16
（５）お得感を追求する買い物行動　17

２．厳しい家計の実態　23

（１）減収が現役世代を直撃　23
（２）ゆとりのない家計収支　26
（３）将来に備えて貯蓄　34

３．ワークライフ・バランスと家庭生活　41

（１）仕事・家庭・余暇のバランスと余暇への欲求拡大　41
（２）子ども中心の家庭生活　44
（３）子どもには高等教育を受けさせたい　49

第３章　都市生活者のコミュニティと社会意識

１．世代で異なる人づきあいとコミュニティ意識　51

（１）世代で異なる人づきあい　51
（２）年代で異なる大切な人、関係を深めたい人、よりどころ　56
（３）重視される地域のつきあい　61

２．地域コミュニティに対する意識と実態　63

（１）高齢者、子育て世代ほど必要度が高い地域の人々との交流　63
（２）地域の交流は日々の暮らしに必要なもの　67

３．社会意識と実態　70

（１）社会に対する不満と不平等感　70

（２）望まれる社会福祉の充実 76
（３）近未来社会と不安 78
（４）環境意識の高まり 82

４．都市生活者と老後 85
（１）「老後」を意識しはじめる５０代 85
（２）老後は旅行を楽しんだり、のんびりと過ごしたい 86
（３）男女で異なる「老後に一緒に住む予定の人」 87
（４）老後のために健康維持と家族関係に配慮 88

第４章　都市生活者の価値観と情報行動

１．都市生活者の価値観 89
（１）物の豊かさから人・心の豊かさへ 89
（２）幸福感得点は７０点 93
（３）趣味・友人・家族に喜びや生きがいを感じる 94

２．世界に誇れること 96

３．情報行動 98
（１）インターネット利用の普及 98
（２）関心のある情報分野 103

第５章　まとめ

１．個人の生活と家庭、コミュニティ、社会の関係 104
（１）都市生活を捉える構図 104
（２）現状理解と今後の方向性考察の道筋 106

２．現状の理解　－調査結果から見えてきたこと 107
（１）デフレ経済が生活意識と家計に及ぼす影響 107
（２）家庭生活と子育て意識 110
（３）ワークライフ・バランス 111
（４）コミュニティの必要性と現状 113
（５）社会に対する意識 115

３．都市生活を捉える視座 118
（１）変化の兆しとしての価値観 118
（２）社会問題の影響の大きさ 120
（３）浮上する“コミュニティ” 123
（４）今後の都市生活者研究の方向性 125

第１章　本研究の目的

１．公益財団法人ハイライフ研究所の研究展開と本調査の位置づけ

公益財団法人ハイライフ研究所では創設以来、「都市生活者のよりよい生活の実現」を目的に都市生活研究を行ってきている。

「都市生活」とは、高度に産業化した社会での現代のライフスタイルとして定義される。戦後のわが国の経済の発展と高度化により、都市機能の整備と豊かな生活の実現という２つの側面で都市化が同時進行し、人々のライフスタイルを変化させてきた。

当財団の都市生活研究の目下の展開は、次の２つのテーマに基づいて推進している。（図表 1－１）

◆都市自体の魅力創造研究

都市自体の価値や魅力の増幅を目指す、都市の魅力の発見と育て方開発、都市生活支援の有り様研究等である。

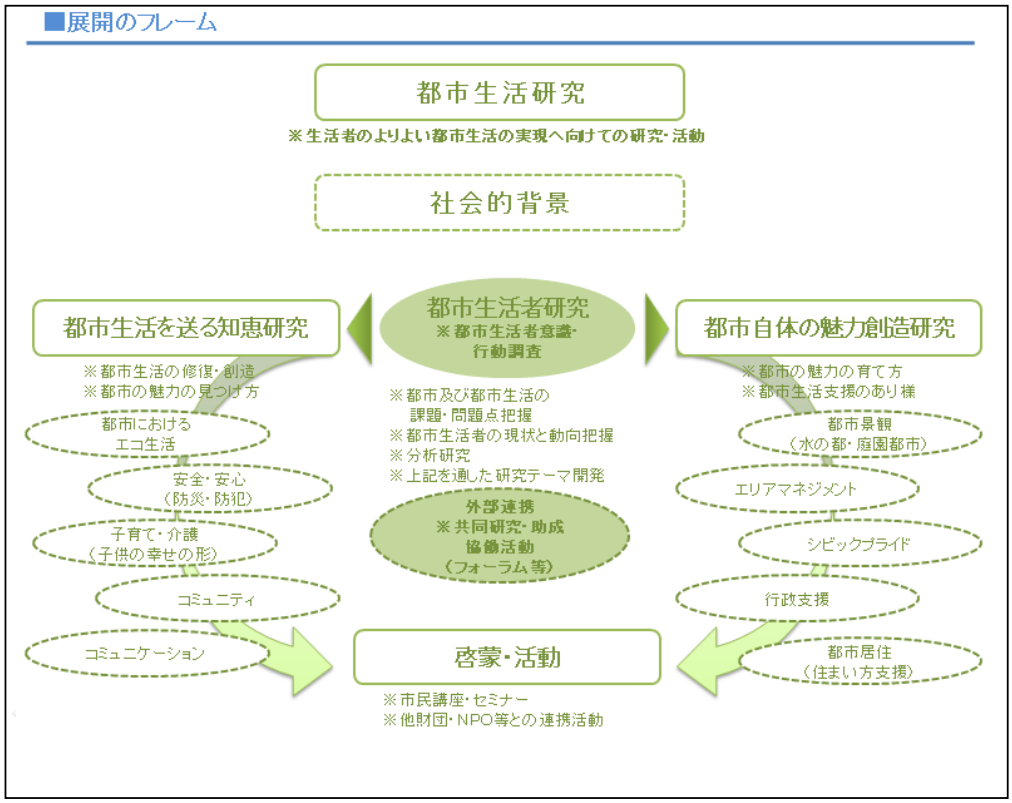
◆都市生活を送る知恵研究

都市生活を豊かにする生活行動の知恵の発見と創造を目指す、都市生活の問題点の修復と社会変化に対応した新しい暮らし方の開発や都市の新しい魅力の見つけ方研究などである。

都市生活研究は、都市生活者自身に関する研究を基礎にする必要がある。都市生活及び生活者のニーズと現状、そして将来動向を把握することで、その後の展開の土台をより確かなものにすることができる。「都市生活者意識調査 2010」は、まさにこのための基礎研究として取り組むものである。

本調査は、都市生活研究の展開となる「都市自体の魅力創造研究」と「都市生活を送る知恵研究」の２つのテーマの基本的な視座の獲得を目指すものといえる。

図表 1-１：都市生活研究展開のフレーム



２．本調査の視点と調査概要

（１）調査企画上の視点

本調査は、変わりゆく経済・社会、コミュニティ、家族環境にあって、都市生活者がどのような考えをもち行動しているのか、今後どのようにしていきたいのかを把握するためのものである。さらに、「よりよい都市生活の実現」に向けてどのような課題認識をもっているのかを浮き彫りにすることも視野においている。

なお、調査の企画に当たって、都市生活者の価値観や行動に大きな影響をもたらしていると考えられる次のインパクトに関しては充分に留意した。

◆産業社会の進展と都市生活

効率化、高速化、高密度化を目指す産業社会は、格差の拡大やワークライフ・バランスのゆがみなど、都市生活者にさまざまなストレスをもたらしがちであ

る。一方で、都市生活者サイドでもこれに対抗するかのようにスローライフや地域文脈の尊重など、生活意識の転換を始めつつあるように感じられる。

◆経済変動と都市生活

2008年9月の金融破綻により先進国の経済は大きく後退し、なかでも日本は強烈なデフレスパイラルに見舞われることになった。産業界が円高への対応に追われるなかで、都市生活者の家計へのインパクトは極めて大きなものがあったと推察される。本調査の実施は2010年秋。デフレ経済の影響が、都市生活者の行動と意識に如実に立ち現われる時期であると考えられる。

◆ＩＣＴの浸透と都市生活

インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジーの進展は、日常の生活に組み込まれ、既存ビジネスの新陳代謝を加速し、都市の風景さえも変えつつある。

◆高齢化と都市生活

先進国のなかで最も進行スピードがハイピッチなわが国の高齢化。世界に誇り得る日本の長寿社会であるが､国家財政の逼迫､若い世代の負荷の増大など、負の側面で捉えられることが多い。長生きがリスクとして認識されつつある社会の到来が危惧される。また、生活防衛として消費の抑制に傾くことも懸念される。

◆コミュニティと都市生活

社会の影の部分をすくい取るかのように、高齢者の生活支援、子育て支援、障害者支援に対して市民の自発的な活動が立ち上がってきている。これまで、地域の治安や安全に重きを置いたコミュニティ活動から、都市生活の安心やうるおいを補完するコミュニティ活動への広がりが窺える。「コミュニティ」の役割がますます高まっていく気配がある。

◆持続可能な社会と都市生活

持続可能性な社会とは「有限であることを認識」し、経済・社会、そして家庭生活の営みにまで立ち返って考えること。環境、資源、エネルギー、リサイクルなどへの意識の高まりとともに、持続可能な社会の希求は、いまや世界の共通語になってきている。

（２）調査内容の編成

都市生活者の意識と実態の把握は、広く次の領域で編成した。

① 生活全般における意識・行動
② 生活分野別の意識・行動
（衣、食、住、消費行動、健康・美容、仕事・家庭など）
③ コミュニティ意識と実態
④ 老後に対する意識と行動
⑤ 社会意識と実態
⑥ 収入・資産
⑦ 価値観

（３）調査設計上の留意点

◆性年代別分析に耐える標本構成

当然のことながら世代別の意識が異なることが予想されるため、都市生活者全体を見ながら、性年代別で捉えていく。これによって、世代別の意識と課題をより鮮明に浮き彫りにすることができると考えている。このため、調査は 10 代から高齢者まで幅広い層を対象にして分析できるようにしておくことが望ましい。本調査では老若男女をバランスよく配分し、東京、大阪で全体 1,800 サンプルの構成としている。

◆意識の変化と深さを測定

本来、都市生活者の実態と意識動向は、長期にわたり調査を継続し時系列で眺めるなかで、より明瞭に浮かび上がってくる。

今回の調査は、第１回の初回調査である。そこで、重要な設問に関しては時間的推移と、関心、実態、意向の質的動態を把握するよう配慮した。

時間的推移とは、例えば「2～3 年前と比べて・・・」「数年後は・・・」という設問で現在時点を補完した。質的動態は、例えば「関心の程度」「現状の関わり程度」「ありたい姿」の３つの位相で把握を試みた。

これによって、都市生活者の今後の行動のベクトルを見出すことに努めた。

（４）調査概要

① 調査対象；　東京 30km 圏内、大阪 20km 圏内に居住する満 13 歳～74 歳の一般男女

② 標本数（有効回収数）：　1,800

〔内　訳〕		計	東京	大阪
TOTAL		1,800	1,125	675
男　性		906	574	332
女　性		894	551	343
男	13～19 歳	72	43	29
	20 代	155	102	53
	30 代	192	125	67
	40 代	143	95	48
	50 代	158	98	60
	60 代	137	82	55
	70～74 歳	49	29	20
女	13～19 歳	68	41	27
	20 代	148	94	54
	30 代	186	118	68
	40 代	136	86	50
	50 代	156	94	62
	60 代	145	85	60
	70～74 歳	55	33	22

③ 標本抽出法；　エリアサンプリング法

④ 調査方法；　留置法（訪問して調査票配布 → 対象者記入 → 訪問回収）

⑤ 調査時期；　2010 年 10 月 1 日（金）～10 月 18 日（月）

⑥ 調査研究体制：

調査研究機関　公益財団法人ハイライフ研究所
調査研究幹事　高津伸司　公益財団法人ハイライフ研究所代表理事
調査実施担当　㈱行動科学研究所
調査研究担当　広井良典　千葉大学教授
立澤芳男　マーケットプレイスオフィス代表
丹野俊明　㈱行動科学研究所代表
水嶋　敦　自由学園講師
高津春樹　公益財団法人ハイライフ研究所専務理事
萩原宏人　公益財団法人ハイライフ研究所事務局長
上野昭彦　公益財団法人ハイライフ研究所主任研究員

第２章　都市生活者の生活意識と実態

本章では、「都市生活者意識調査 2010」の結果から、生活意識と実態を概括する。

まず、暮らし向きと消費の実態を明らかにした後に、家計の実態、ワークライフ・バランスと家庭生活について明らかにする。

調査結果から明らかになったことは、都市生活者が一定の豊かさを享受しながらも 2008 年 9 月のリーマンショック以降の経済環境の悪化の影響を受け、厳しい生活を余儀なくされている実態である。

１．経済環境の影響が大きい生活意識と実態

（１）暮らし向きの悪化

都市生活者は、現在の生活満足度と生活水準の程度をどのように認識しているだろうか。現在の生活満足度について満足から不満の 4 段階で質問したところ、次のようになった。

◇全体のほぼ 4 人中 3 人（74.2%）が現在の生活に満足している。
（「満足」17.8%、「やや満足」56.4%）

◇相対的に満足度が高くないのは、男女 30 代～50 代にかけての現役世代、もしくは子育て世代である。

◇高齢者は、男女を問わず相対的に満足度は高い。

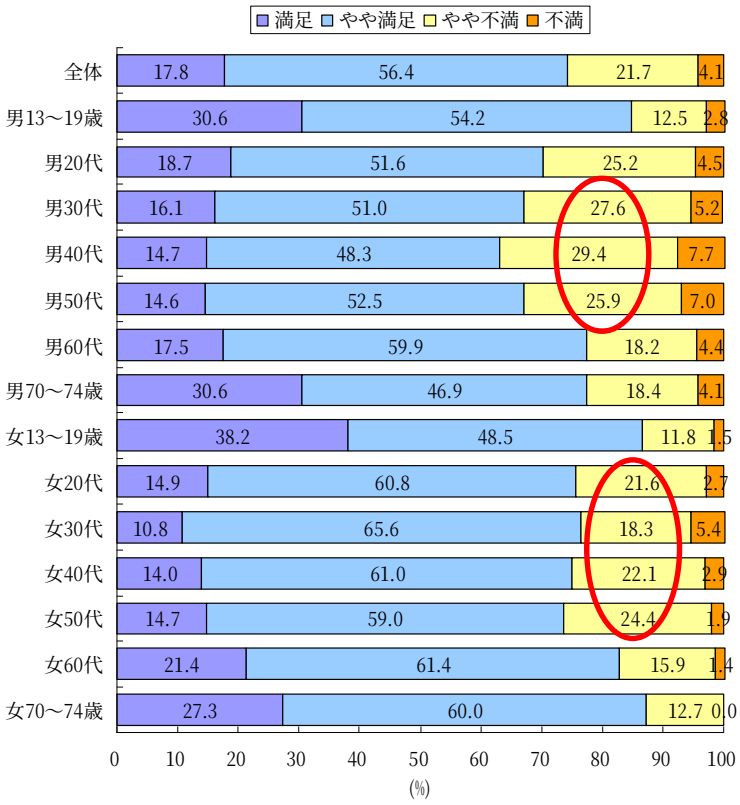
次に、現在の生活水準について 5 段階で回答してもらった。

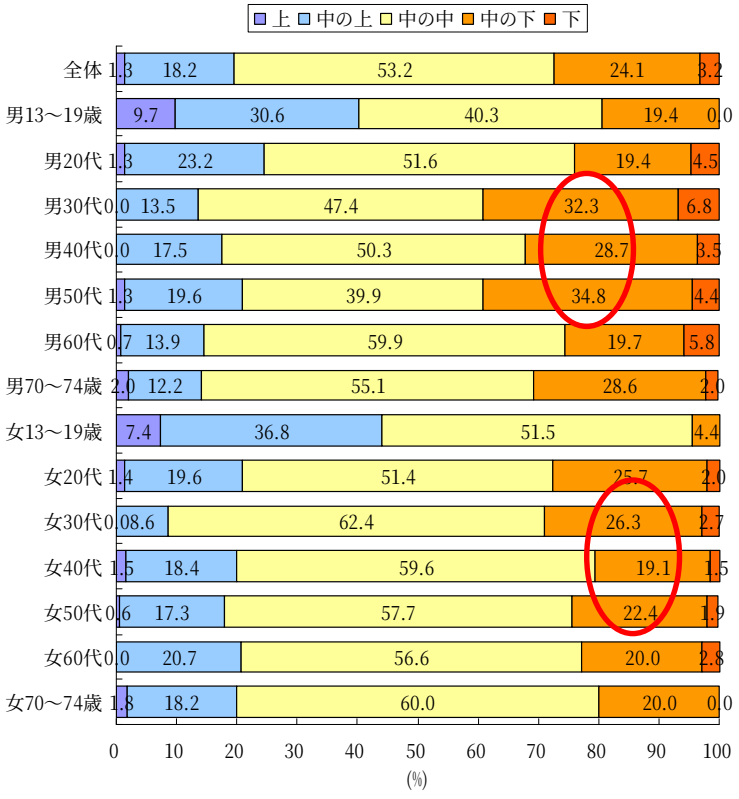
◇全体では、「中の中」が過半数（53.2%）を占め、「中の下」が 24.1%であった。

◇「中の下」の割合が高くなるのは、男女 30 代～50 代にかけてで、とりわけ男性での割合が多い。

現在の生活意識は、一定の満足度と中流意識を中心としながらも、現役世代、子育て世代では、中流意識が揺らいでいる。

図表 2-1：現在の生活満足度と生活水準



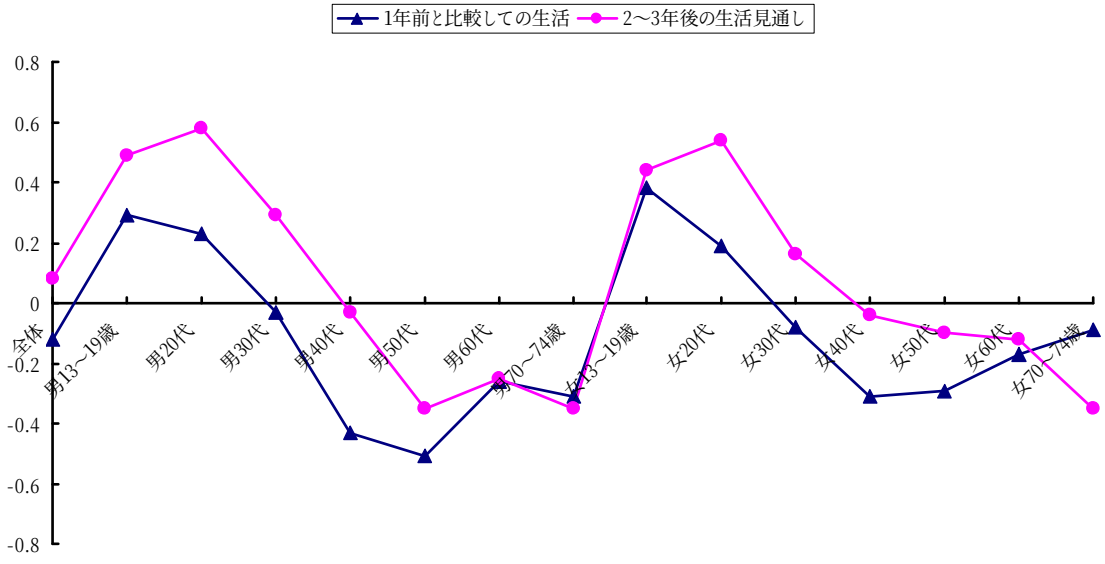


暮らし向きについて、「1 年前と比較しての生活」と「2～3 年後の生活見通し」の 2 つの質問に対して 5 段階で尋ねた。図表 2－2 は回答を加重平均したもので、この結果、以下のことが明らかになった。

◇全体では、1 年前と比較しての生活は、悪化している。
◇とりわけ、男女とも 30 代を境に上の年代での生活の悪化が顕著である。
◇なかでも男女 40 代・50 代の生活の悪化が際立っている。
◇2～3 年後の生活見通しは、全体では改善期待がある。
◇男女とも 50 代までが改善期待を持っている。60 歳以上は、改善期待を持っていない。
◇しかし、男女 40 代・50 代はこれまでに比べて改善期待があるとはいえ、未だ悲観的な見方にとどまっている。

男女 40 代・50 代の生活の悪化は、日本経済の建て直しに当たって、現役中高年への賃金・雇用調整圧力の影響と理解できる。彼らは、先行きの見通しについても、経済の不透明さから、大幅な改善が見込めないと認識しているようだ。今回の調査から、経済環境の影響が生活意識に直結していることが浮かび上がった。

図表 2-2：1 年前と比較しての生活・2～3 年後の生活見通し



注：値はそれぞれの質問についての 5 段階の回答を加重平均し、中央を「0」にして示した。

（２）「遊び・余暇」「健康・美容」への高まる関心と不満

生活分野別の興味関心度は、次のようになっている。（図表 2-3 参照）

◇全体では、「遊び・余暇」への関心が最も高く、衣・食・住を上回る。「遊び・余暇」に次いで高いのは「食」で、「健康・美容」「人づきあい」がこれに続く。
◇「遊び・余暇」は若年層で高く、「健康・美容」は高齢層で高い。
◇「仕事・学業」は、やはり男性 20 代～50 代の現役世代で高い。
◇「食」は、女性全般と男性 50 代以上で高い。

衣食住といった生活の基本分野への関心よりも、これ以外の「遊び・余暇」や「健康・美容」への関心が高まっている。特に、高齢者における「健康・美容」への関心の高まりが顕著である。

図表 2-3：興味関心の高い生活分野

	1位	2位	3位
全 体	遊び･余暇 (3.24)	食 (3.18)	健康･美容 (3.06)
男13～19歳	遊び･余暇 (3.38)	人づきあい (3.24)	仕事･学業 (3.11)
男20代	遊び･余暇 (3.46)	仕事･学業 (3.25)	人づきあい (3.12)
男30代	遊び･余暇 (3.26)	食 (3.07)	仕事･学業 (3.05)
男40代	遊び･余暇 (3.24)	仕事･学業 (3.22)	食 (3.08)
男50代	食／仕事･学業 (3.09)		遊び･余暇 (3.04)
男60代	健康･美容 (3.07)	食 (3.01)	遊び･余暇 (2.96)
男70～74歳	健康･美容 (3.20)	食 (3.10)	人づきあい (2.96)
女13～19歳	遊び･余暇 (3.72)	衣 (3.50)	人づきあい (3.40)
女20代	遊び･余暇 (3.59)	衣 (3.44)	食 (3.38)
女30代	遊び･余暇 (3.35)	食 (3.34)	健康･美容 (3.33)
女40代	健康･美容 (3.30)	食 (3.26)	住 (3.17)
女50代	健康･美容 (3.29)	食 (3.26)	遊び･余暇 (3.16)
女60代	健康･美容 (3.28)	食 (3.26)	遊び･余暇 (3.07)
女70～74歳	食 (3.35)	健康･美容 (3.31)	買物･消費 (3.15)

注：カッコ内は4段階回答の加重平均値。4段階回答の加重平均は、「興味関心がある」＝4、「やや興味関心がある」＝3、「あまり興味関心がない」＝2、「興味関心はない」＝1で算出した。

次に、生活分野別の興味関心度と満足度のギャップをみた。図表 2-4 の上の表は、全体での比較、下の表は性・年代別に満足から興味関心度を差し引いて、不満の度合を示したものである。

図表 2-4：生活分野別興味関心度と満足度のギャップ

■ 興味関心･満足の程度：全体 （4段階回答を加重平均）

	衣	食	住	買物･消費	仕事･学業	遊び･余暇	健康･美容	人づきあい	学び･学習
興味関心の程度	2.89	3.18	2.90	2.93	2.97	3.24	3.06	3.03	2.83
満足の程度	2.89	3.11	2.88	2.77	2.61	2.75	2.70	2.97	2.69
満足-興味関心	0.00	-0.07	-0.02	-0.16	-0.36	-0.49	-0.36	-0.06	-0.14

■ 満足度－興味関心度 （4段階回答を加重平均）

	衣	食	住	買物･消費	仕事･学業	遊び･余暇	健康･美容	人づきあい	学び･学習
全 体	0.00	-0.07	-0.02	-0.16	-0.36	-0.49	-0.36	-0.06	-0.14
男13～19歳	-0.21	***0.27***	***0.33***	-0.16	-0.29	-0.45	0.25	-0.16	-0.07
男20代	-0.14	0.05	0.13	-0.33	-0.76	-0.76	0.18	-0.20	-0.17
男30代	***0.33***	0.01	0.09	0.08	-0.45	-0.54	0.04	0.09	-0.17
男40代	***0.45***	0.05	0.16	0.03	-0.72	-0.58	-0.07	0.13	-0.01
男50代	***0.53***	-0.09	-0.04	0.14	-0.69	-0.52	-0.36	-0.05	-0.19
男60代	***0.56***	0.10	0.20	***0.47***	-0.10	-0.14	-0.33	0.11	0.11
男70～74歳	***0.47***	0.19	0.20	***0.31***	0.25	-0.02	-0.14	0.08	0.09
女13～19歳	-0.74	0.03	0.22	-0.58	-0.13	-0.82	-0.44	-0.37	-0.22
女20代	-0.51	-0.21	-0.03	-0.57	-0.57	-0.75	-0.67	-0.25	-0.17
女30代	-0.55	-0.28	-0.36	-0.63	-0.48	-0.57	-0.70	-0.20	-0.28
女40代	-0.37	-0.29	-0.46	-0.46	-0.54	-0.57	-0.88	-0.13	-0.38
女50代	-0.16	-0.25	-0.36	-0.27	-0.20	-0.41	-0.62	-0.04	-0.17
女60代	0.19	-0.07	-0.02	-0.03	***0.33***	-0.22	-0.49	0.07	-0.06
女70～74歳	0.08	-0.02	***0.30***	-0.08	***0.45***	-0.11	-0.60	0.02	0.02

斜体 ＞0.25 ⇒満足
＜-0.25 ⇒不満

注：4段階回答の加重平均は、「興味関心がある/満足」＝4、「やや興味関心がある/やや満足」＝3、「あまり興味関心がない/やや不満」＝2. 「興味関心はない/不満」＝1で算出した。

この結果から、次のことを読み取ることができる。

◇「遊び・余暇」は興味関心が最も高い生活分野であるが、満足度は低く、大きなギャップがある。このギャップは、男女とも 50 代までの層で大きいが、60 代以上の高齢者では小さい。

◇「健康・美容」は、高齢者と女性で興味関心が高いが満足度が低い。

◇「仕事・学業」は、男性 50 代までと女性 20 代～40 代の現役世代で満足度が低い。

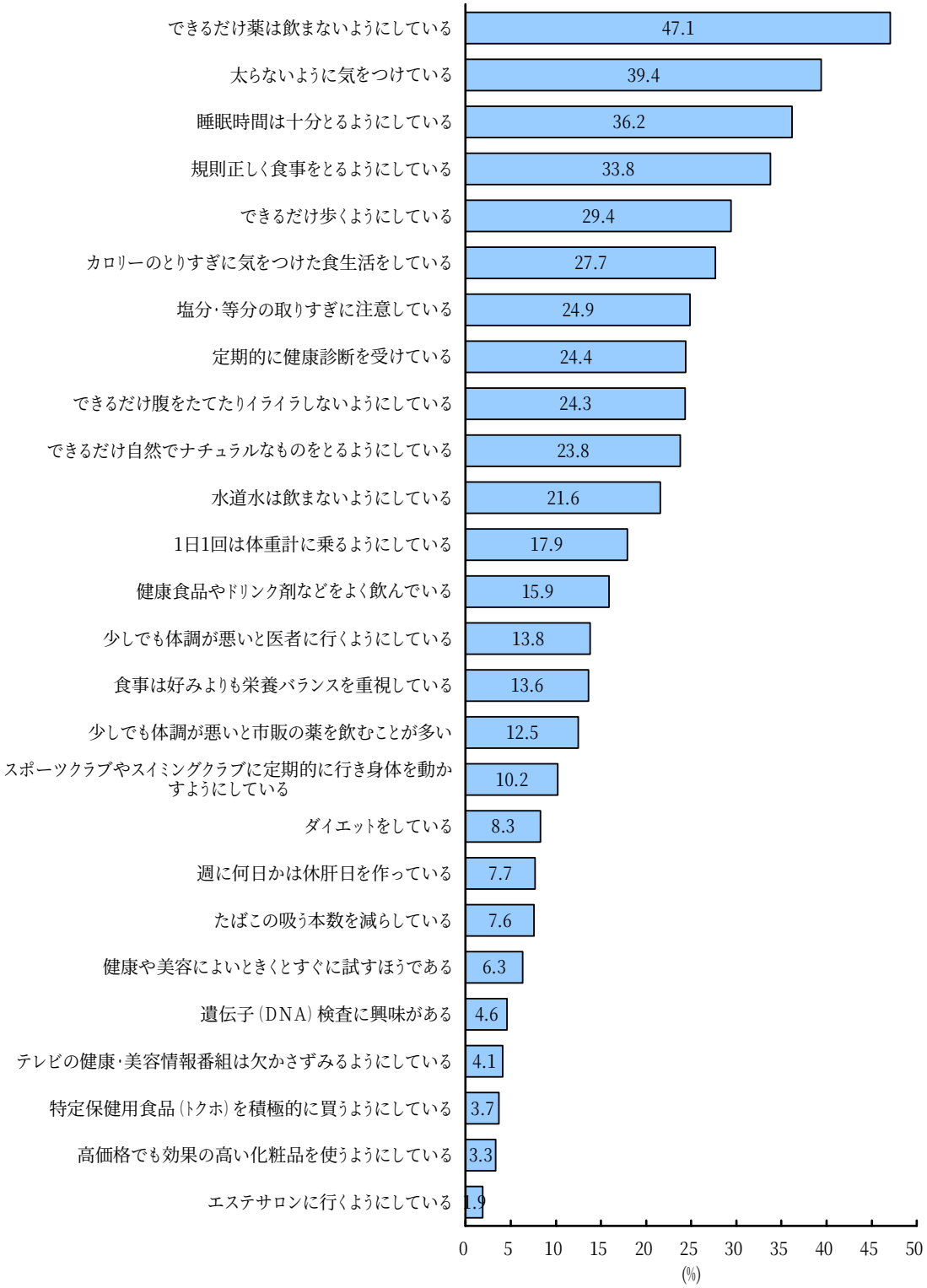
◇「食」は、「遊び・余暇」「健康・美容」に次いで興味関心が高い。「食」についての興味関心度と満足度のギャップはほとんどない。

◇女性層では若い層ほど、「買物・消費」や「衣」「住」に対する満足度が低い。「衣」については、男性は 30 代以上で満足が興味関心を上回った。

以上の結果から、都市生活者が、興味関心の高い分野での満足が低く、生活ウォンツが未だ満たされていない状況にあることがわかる。この傾向は、とりわけ女性で高い。男性の不満が「遊び・余暇」と「仕事・学業」に限られるのに対して、女性の不満は、「遊び・余暇」だけでなく、「健康・美容」「買物・消費」「衣」「住」など幅広い分野にわたっている。女性の不満の大きさは需要が潜在的な状態にあり、経済的、時間的な環境が整えば、需要が顕在化する可能性が高いとみることもできる。高齢者は不満の度合が少なく、積極的な消費を期待できそうもない。

ところで、高齢者と女性で興味関心の高い「健康・美容」についての意識と実態はどのようなものか。図表 2-5 は、健康・美容についての意識と態度を示したものである。回答の上位は、「できるだけ薬は飲まない」「太らないように気をつけている」「睡眠時間は十分とる」「規則正しく食事をとる」「できるだけ歩くようにしている」「カロリーのとりすぎに気をつけた食生活」で、規則正しい生活が中心になっている。現代の都市生活者は、普段の生活の中で、食生活に気を使い、身体を動かすことを心がけており、健康食品や薬に依存したり、特別なものへの出費をするわけではない。

図表 2-5：「健康・美容」についての意識・態度（対象者全体　n＝1,800）

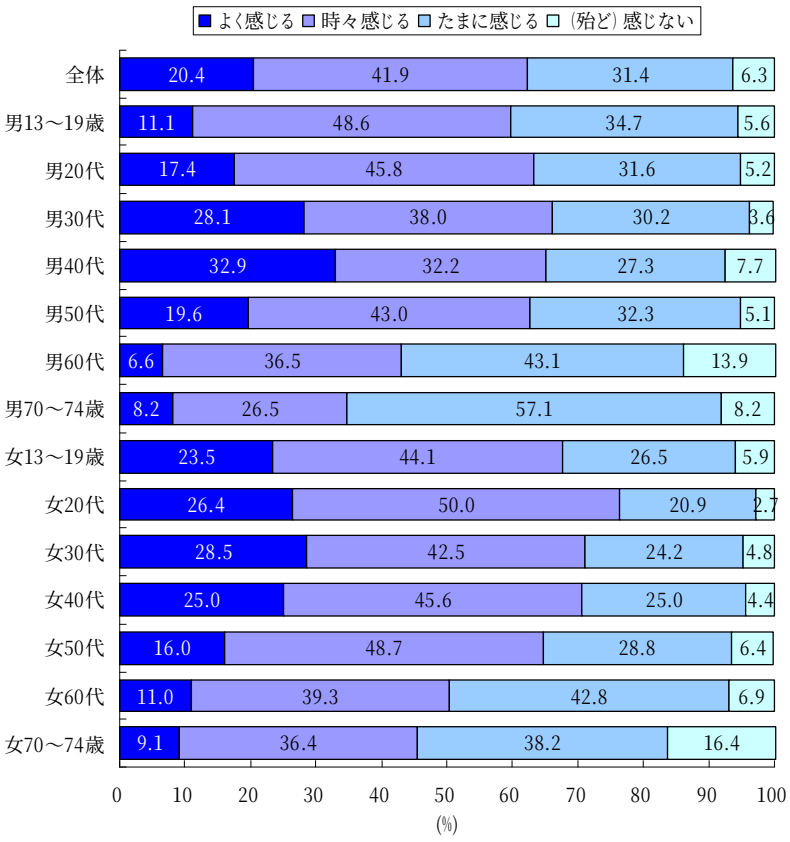


（３）ストレスを感じている現役・子育て世代

都市生活者は、日常生活でストレスをどの程度感じているのだろうか。

図表 2-6 は、性年代別にストレスを感じる程度を聴取したものである。男性は 20 代から増加し、40 代で最も多くなる。職場での責任や組織内での重圧がストレスの要因になっていると思われる。女性は 10 代～40 代までの世代で多く、人間関係や子育ての中でストレスを感じているようだ。

図表 2-6：ストレスを感じる程度



ストレスの原因や心配事は性年代で異なっている。性年代ごとに上位のものは、次のようになっている。（図表 2-7 参照）

◇男性は、50 代までが「仕事や学業のこと」が 1 番多く、「職場・学校・地域の人間関係」「景気や生活費、収入が減る」がこれに続く。

◇男 50 代になると、「仕事のこと」が最も多いものの、「老後や将来の不安」が 2 番目にあげられる。

◇男 60 代以降になると「自分の健康」が 1 番になる。

◇10 代～20 代までの女性では、「仕事・学業のこと」「人間関係」があげられている。女 30 代～40 代では「生活費」と「子どもの保育や教育」になり、女性は子育て期に移行するにつれて、子どもの教育と家計に頭を悩まされるようになる。

◇「老後や将来の不安」は、女性においても 50 代になると最も高くなり、この頃から老後について考え始めることがうかがわれる。60 代以降になると、男性と同様に「自分の健康」が最も高くなる。

現役世代は、学業、仕事、子育て、周囲との人間関係といった日常生活で直面していることを気にかけている。また、経済的不安感も大きい。リタイア世代は、自分の健康を気にかけている。このような年代別の心配事の結果から、老後を自分のこととして考え始めるのは、男女とも 50 代とみることができる。

図表 2-7：ストレスの原因や心配事

	1位	2位	3位
全 体	仕事や学業のこと(37.7%)	自分の健康(37.6%)	老後や将来の不安(35.2%)
男13～19歳	仕事や学業のこと(36.1%)	職場･学校･地域の人間関係(27.8%)	友人との人間関係(19.4%)
男20代	仕事や学業のこと(63.9%)	職場･学校･地域の人間関係(36.1%)	景気や生活費、収入が減る(24.5%)
男30代	仕事や学業のこと(60.4%)	職場･学校･地域の人間関係(38.0%)	景気や生活費、収入が減る(33.3%)
男40代	仕事や学業のこと(60.8%)	景気や生活費、収入が減る(45.5%)	職場･学校･地域の人間関係(34.3%)
男50代	仕事や学業のこと(56.3%)	老後や将来の不安(48.1%)	景気や生活費、収入が減る(47.5%)
男60代	自分の健康(56.2%)	老後や将来の不安(43.8%)	家族の健康や生活上の問題(38.7%)
男70～74歳	自分の健康(63.3%)	老後や将来の不安(49.0%)	家族の健康や生活上の問題(40.8%)
女13～19歳	仕事や学業のこと(48.5%)	友人との人間関係(45.6%)	職場･学校･地域の人間関係(44.1%)
女20代	仕事や学業のこと(46.6%)	職場･学校･地域の人間関係(35.8%)	自分の健康(29.7%)
女30代	景気や生活費、収入が減る(46.2%)	子どもの保育や教育(45.2%)	家族の健康や生活上の問題(41.4%)
女40代	子どもの保育や教育(51.5%)	景気や生活費、収入が減る(44.9%)	家族の健康や生活上の問題(39.0%)
女50代	老後や将来の不安(47.4%)	家族の健康や生活上の問題(46.2%)	自分の健康(43.6%)
女60代	自分の健康(56.6%)	老後や将来の不安(53.8%)	家族の健康や生活上の問題(44.1%)
女70～74歳	自分の健康(72.7%)	家族の健康や生活上の問題(56.4%)	老後や将来の不安(49.1%)

（４）収入の増減が消費意欲に直結

1 年前と比較してモノやレジャーにお金を使いたいという意欲については、男女とも若い層ほど消費意欲は強く、反対に高齢者ほど弱くなっている。高齢者の消費活力は、多くを期待し難い状況にある。

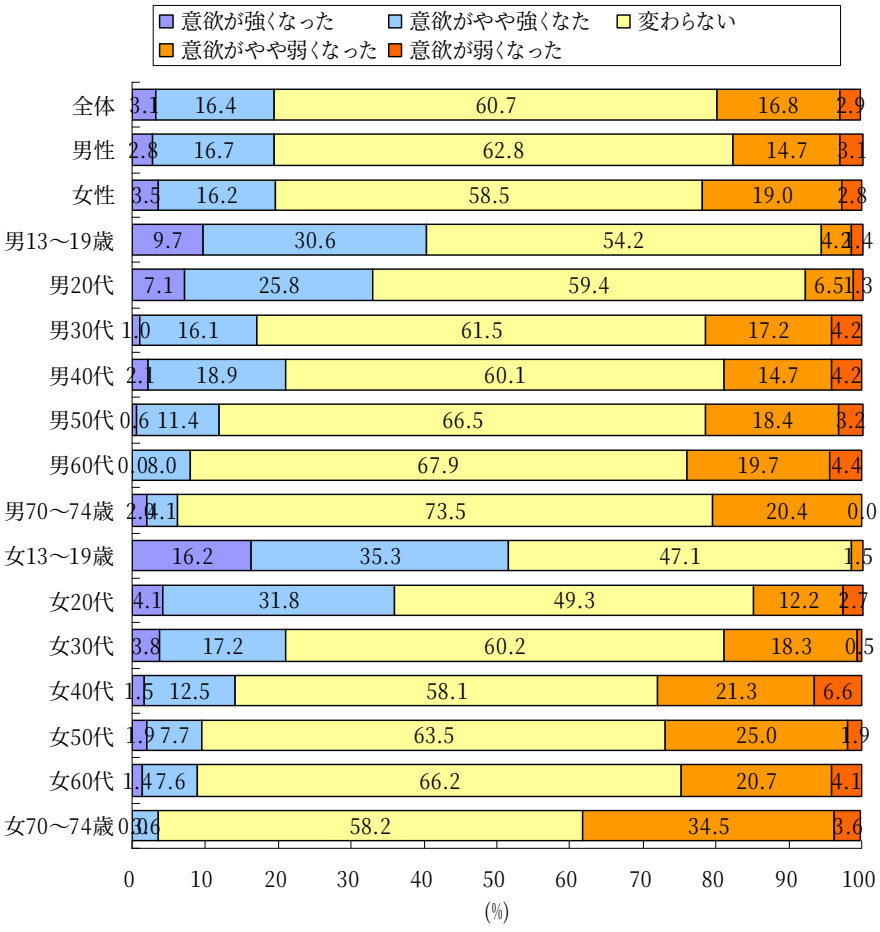
消費に及ぼす要因と消費意欲の因果関係は、次のようになっている。

◇ほとんどの層において「収入の増減」が 1 位になっている。

◇若年層は収入が増加する段階にあるので、収入の増加が消費意欲に直結するのは当然のことといえる。現役の中堅以降の世代は、経済環境の影響による収入減により消費意欲が減退していると考えられる。

◇子育て期にある 30 代～40 代は、「収入の増減」に次いで、「子供の教育費」をあげており、教育費の負担が重くのしかかっている。子ども手当ての支給は、このような状況の中で消費意欲の刺激策として打ち出された政策である。

図表 2-8：1 年前と比較しての消費意欲の変化



図表 2-9：消費に及ぼす要因

	1位	2位	3位
全 体	収入の増減 (55.9%)	景気･株価 (26.4%)	将来の生活 (25.2%)
男13～19歳	特に影響しているものはない (59.7%)	収入の増減 (16.7%)	インターネットの普及 (11.1%)
男20代	収入の増減 (53.5%)	特に影響しているものはない (26.5%)	将来の生活 (25.2%)
男30代	収入の増減 (56.8%)	景気･株価 (20.8%)	将来の生活 (19.8%)
男40代	収入の増減 (63.6%)	子どもの教育費 (44.1%)	景気･株価 (29.4%)
男50代	収入の増減 (65.2%)	景気･株価 (41.8%)	子どもの教育費 (29.1%)
男60代	収入の増減 (66.4%)	将来の生活 (42.3%)	景気･株価 (32.1%)
男70～74歳	収入の増減 (61.2%)	景気･株価 (40.8%)	将来の生活 (34.7%)
女13～19歳	特に影響しているものはない (51.5%)	収入の増減 (30.9%)	景気･株価／将来の生活 (11.8%)
女20代	収入の増減 (60.8%)	特に影響しているものはない (23.0%)	将来の生活 (20.3%)
女30代	収入の増減 (58.1%)	子どもの教育費 (36.6%)	景気･株価 (23.1%)
女40代	子どもの教育費 (64.0%)	収入の増減 (53.7%)	景気･株価 (31.6%)
女50代	収入の増減 (66.0%)	将来の生活 (32.7%)	景気･株価 (28.8%)
女60代	収入の増減 (45.5%)	将来の生活 (42.8%)	景気･株価 (33.8%)
女70～74歳	将来の生活 (49.1%)	収入の増減 (47.3%)	景気･株価 (32.7%)

（５）お得感を追求する買い物行動

実際の消費行動はどうか。図表 2-10 は、買い物行動についての回答結果である。男女差が大きいので、女性の結果を中心に特徴的な点をみていく。

◇通信販売での買い物経験は、全体で 2 人に 1 人（49.3%）、女性では 6 割以上（61.9%）にのぼる。一方、ネットスーパーの利用経験は、全体で 14.9%、女性でも 13.9%にとどまる。

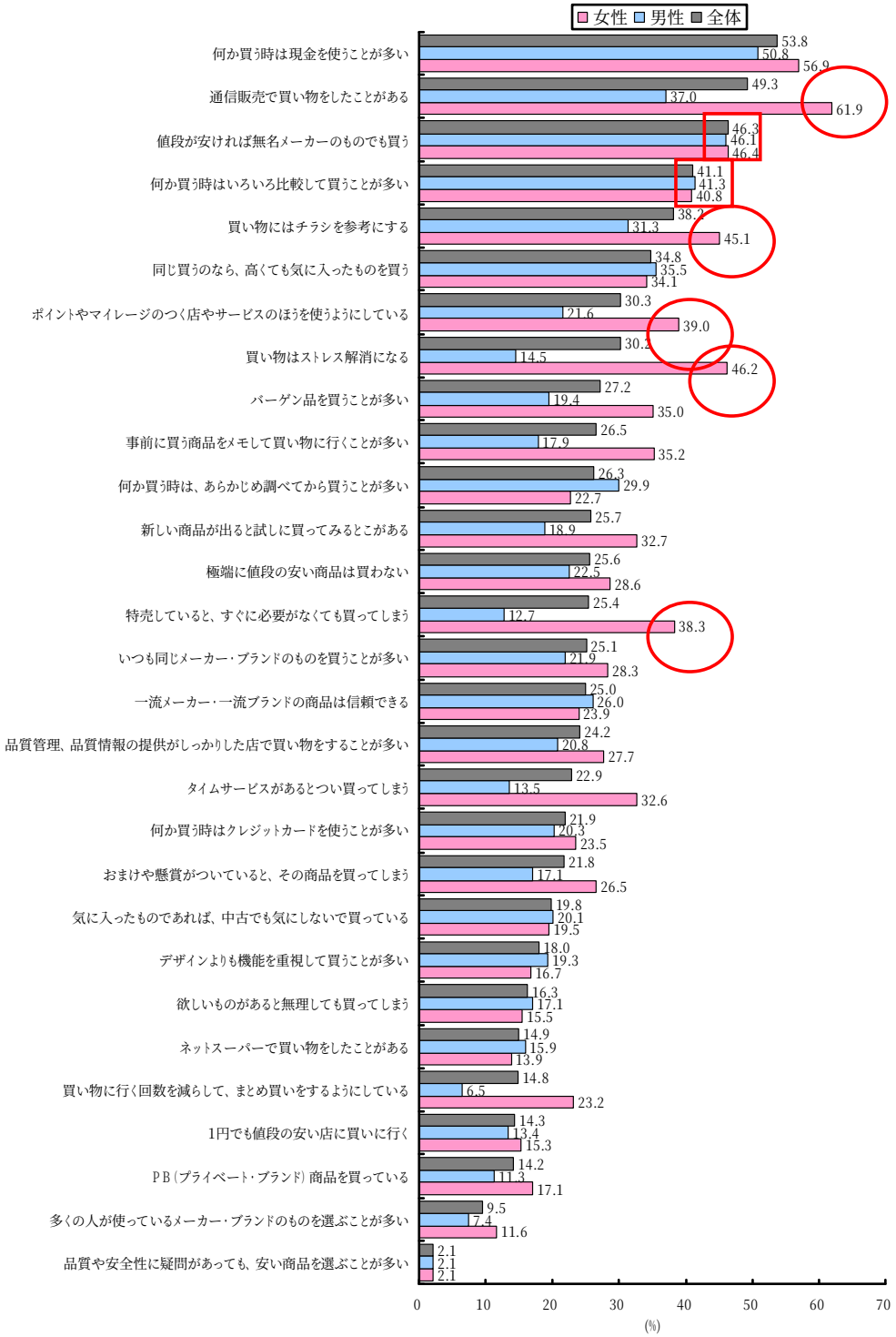
◇女性で高い項目は、「値段が安ければ無名メーカーのものでも買う」「買い物にはチラシを参考にする」「特売しているとすぐに必要がなくても買ってしまう」「バーゲン品を買うことが多い」など、価格に影響されることが多い。

◇「値段が安ければ無名メーカーのものでも買う」「何か買う時はいろいろ比較して買うことが多い」は男女とも高いが、「ＰＢ商品を買っている」は全体で 14.2%、女性でも 17.1%と少数派にとどまった。生活者は、価格を重視しながらも慎重に買い物をしているのである。

◇価格に対しては、「1 円でも値段の安い店に買いに行く」は全体で 14.3%、女性のみでも 15.3%にとどまる一方で、「ポイントやマイレージのつく店やサービスのほうを使うようにしている」は全体で 30.3%、女性で 39.0%になり、直接的な価格目当ての買い物よりも、ポイントやマイレージ特典を重視する傾向がみられる。

以上をみる限り、現代の都市生活者の買い物は、価格志向はあるものの、品質との兼ね合いを考慮しながら、ポイント特典を重視したお得感を追求するスマートな行動になっているとみることができる。

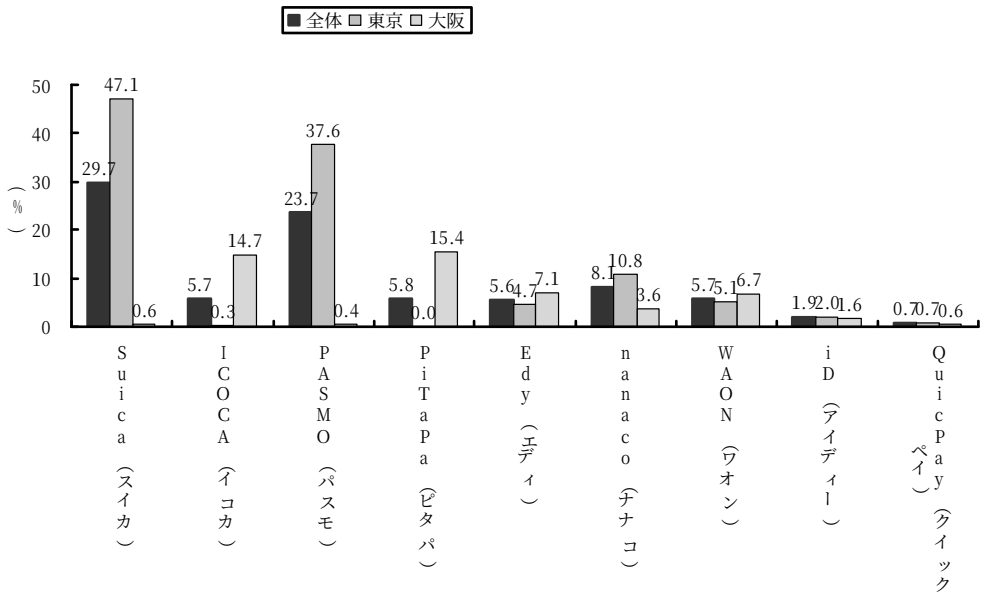
図表 2-10：買い物について



電子マネーの使用は多くの人々に所有されている鉄道系が高く、大手流通系が続く。

利用理由は、「小銭を用意しなくてもよい」「支払が短時間で済む」といった利便性をあげる人が多いが、「ポイントがたまる」も 4 人に 1 人程度あり、電子マネー利用のメリットになっている。

図表 2-11：普段使用している電子マネー



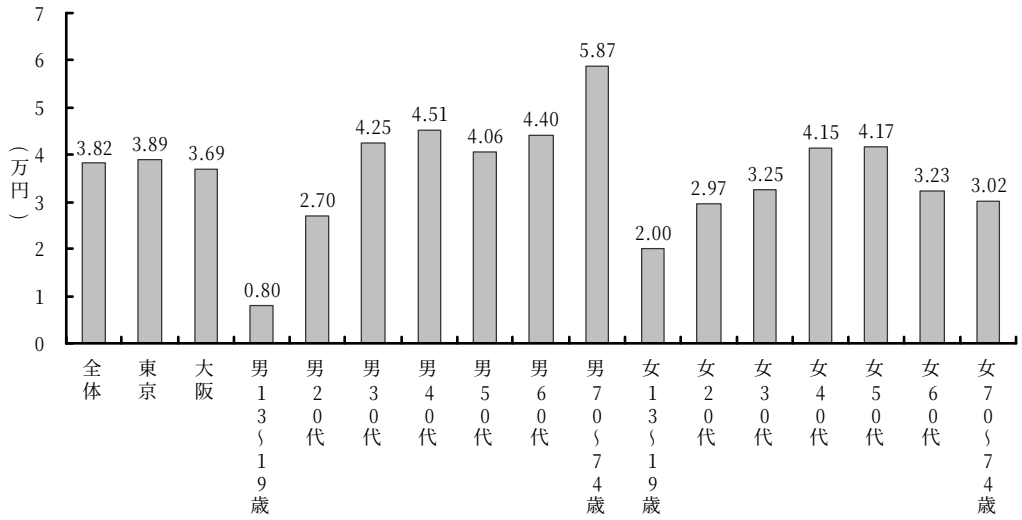
図表 2-12：電子マネー利用理由

(%)

	支払いが短時間で済む	小銭を用意しなくてもよい	ポイントがたまる	手持ちのお金を気にしないで支払いができる	オシャレだから
全 体	54.7	60.3	23.1	17.1	1.4
東 京	57.1	61.5	18.7	15.5	1.1
大 阪	46.4	56.4	38.4	22.8	2.4
男13～19歳	56.8	56.8	6.8	11.4	4.5
男20代	55.8	42.3	17.3	9.6	0.0
男30代	45.8	53.4	23.7	15.3	3.4
男40代	50.0	71.9	29.2	18.8	1.0
男50代	47.1	63.7	21.6	15.7	1.0
男60代	55.9	73.5	19.1	19.1	0.0
男70～74歳	64.0	64.0	4.0	40.0	8.0
女13～19歳	47.8	43.5	6.5	17.4	2.2
女20代	63.1	52.4	18.4	13.6	1.9
女30代	54.6	61.3	37.0	13.4	0.0
女40代	52.7	64.8	33.0	20.9	1.1
女50代	62.2	65.6	24.4	20.0	0.0
女60代	62.4	68.8	24.7	20.4	2.2
女70～74歳	56.5	69.6	21.7	34.8	0.0

クレジットカードは頻繁に利用されているわけではないが、月平均のクレジットカード支払額は、約 4 万円である。男性 30 代以上と女性 40 代・50 代は、4 万円を超える。

図表 2－13：月平均クレジットカード支払額



とはいえ、1 年前と比較しての消費行動の変化（図表 2-14）から見えてくるのは、買い控えと低価格志向の高まりである。

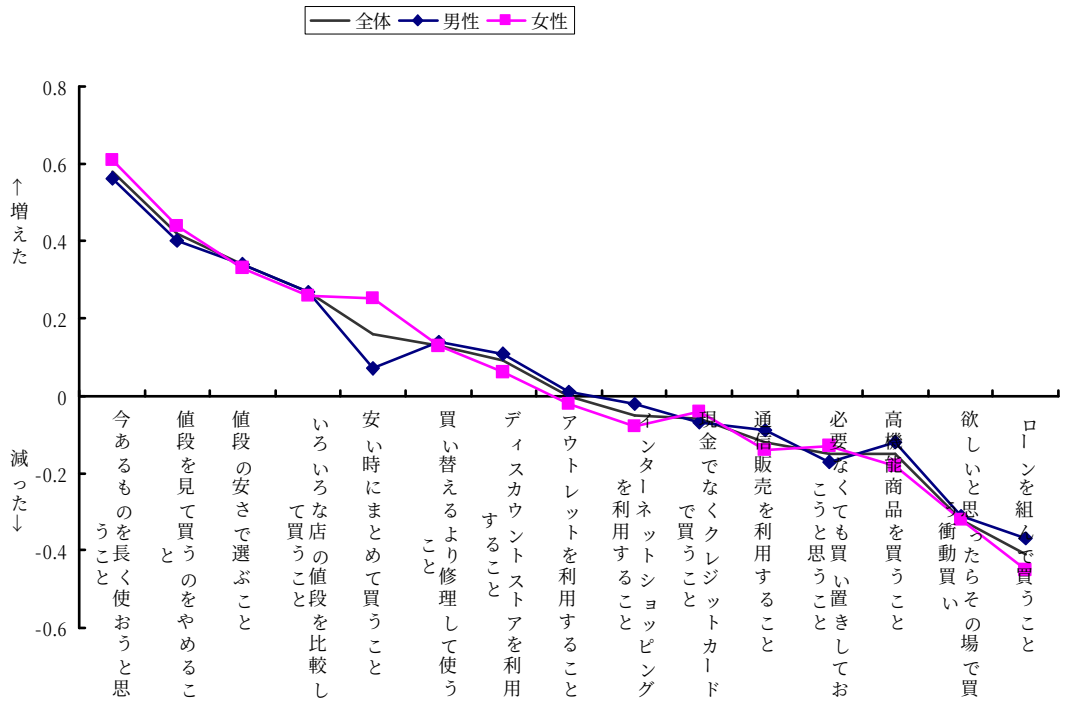
◇増えたものは、「今あるものを長く使おうと思うこと」「値段を見て買うのをやめること」「値段の安さで選ぶこと」「いろいろな店の値段を比較して買うこと」「安い時にまとめて買うこと」「買い替えるより修理して使うこと」「ディスカウントストアを利用すること」などで、買い物を控える、できるだけ安く買う傾向がみられる。

◇反対に減ったものは、「ローンを組んで買う」「衝動買い」「高機能商品の購入」などで、先行きが見えない中で、高価格品購入や衝動買いを控えている。

◇ここ数年大きく伸長してきた「通信販売」「インターネットショッピング」すら減少に転じている。

いずれも男女間での差はみられない。経済的な要因を背景とした消費の鈍化はどの層においても否定できない。

図表 2-14：1 年前と比較して増えたこと・減ったこと



注：値はそれぞれの質問についての「増えた」「やや増えた」「変わらない」「やや減った」「減った」の 5 段階の回答を加重平均し、中央を「0」にして増減を示した。

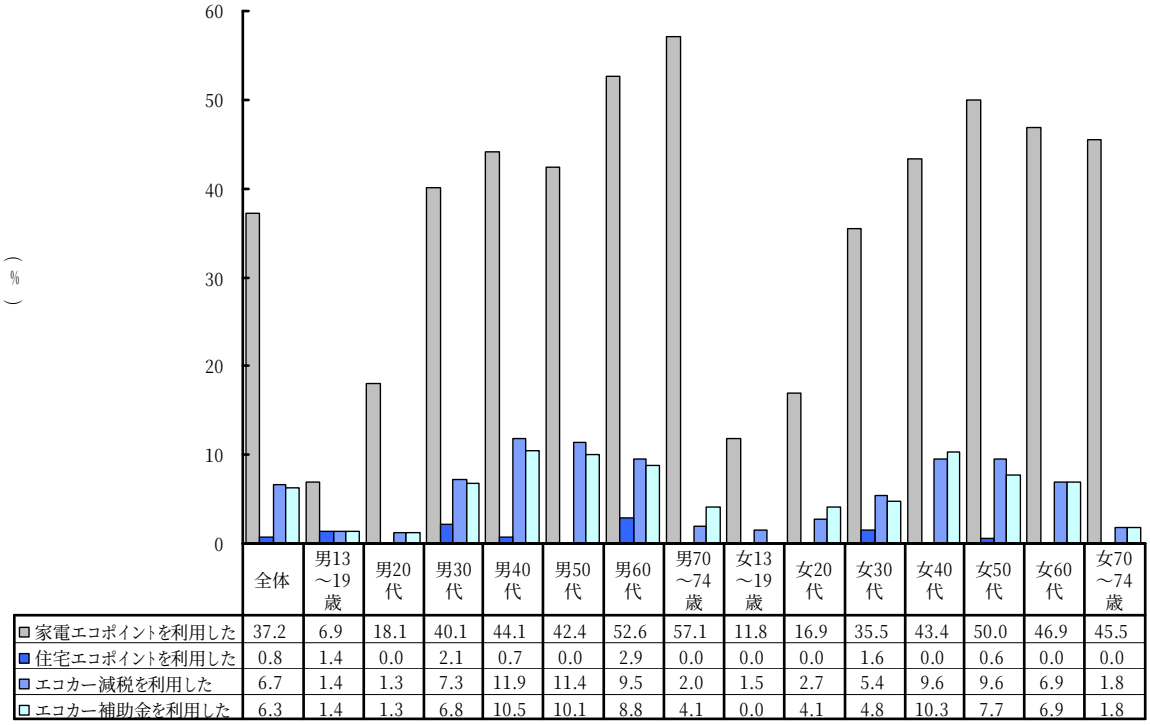
ところで、実際にエコポイントはどれくらい利用されたのだろうか。

◇家電エコポイントは、4 割近く（37.2%）の人が利用した。高齢層ほど利用した割合が高い。エコポイント利用者の約 3 割は、「エコポイントがなければ買わなかった」と回答しており、エコポイントが家電購入のきっかけになっている。この時期は、2011 年 7 月のテレビの完全デジタル化が 1 年以内に迫ってきた時期で、テレビの買い替えのための利用が多くを占めたとみられる。

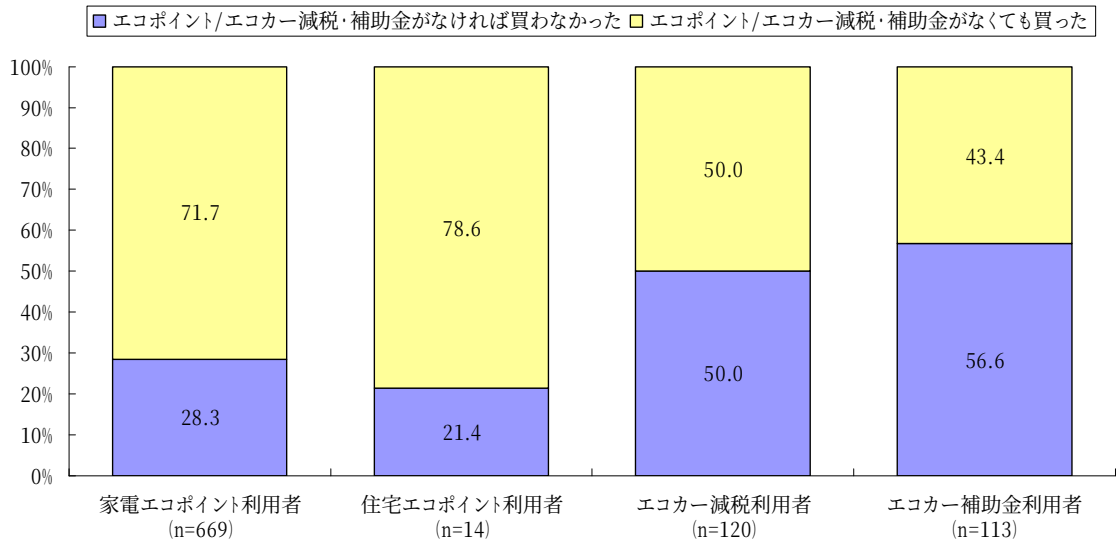
◇エコカー減税とエコカー補助金は、6%の人が利用した。家電エコポイントに比べると利用率は低いが、半数以上の人が「エコカー減税・補助金がなければ買わなかった」と回答しており、高額で直接的な値引き効果のある減税・補助金は、自家用車の購入促進に大きく寄与したことがうかがわれる。自動車メーカーの広告で車種ごとの金額が訴求されたことも後押ししたと考えられる。

需要刺激策として実施されたエコポイント、エコカー減税・補助金は、効果の内容に違いはあるものの、お得感を求める都市生活者の消費マインドを喚起するのに有効であったということができる。

図表 2-15：エコポイント利用状況



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
家電エコポイントを利用した	37.2	6.9	18.1	40.1	44.1	42.4	52.6	57.1	11.8	16.9	35.5	43.4	50.0	46.9	45.5
住宅エコポイントを利用した	0.8	1.4	0.0	2.1	0.7	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.6	0.0	0.0
エコカー減税を利用した	6.7	1.4	1.3	7.3	11.9	11.4	9.5	2.0	1.5	2.7	5.4	9.6	9.6	6.9	1.8
エコカー補助金を利用した	6.3	1.4	1.3	6.8	10.5	10.1	8.8	4.1	0.0	4.1	4.8	10.3	7.7	6.9	1.8



２．厳しい家計の実態

（１）減収が現役世代を直撃

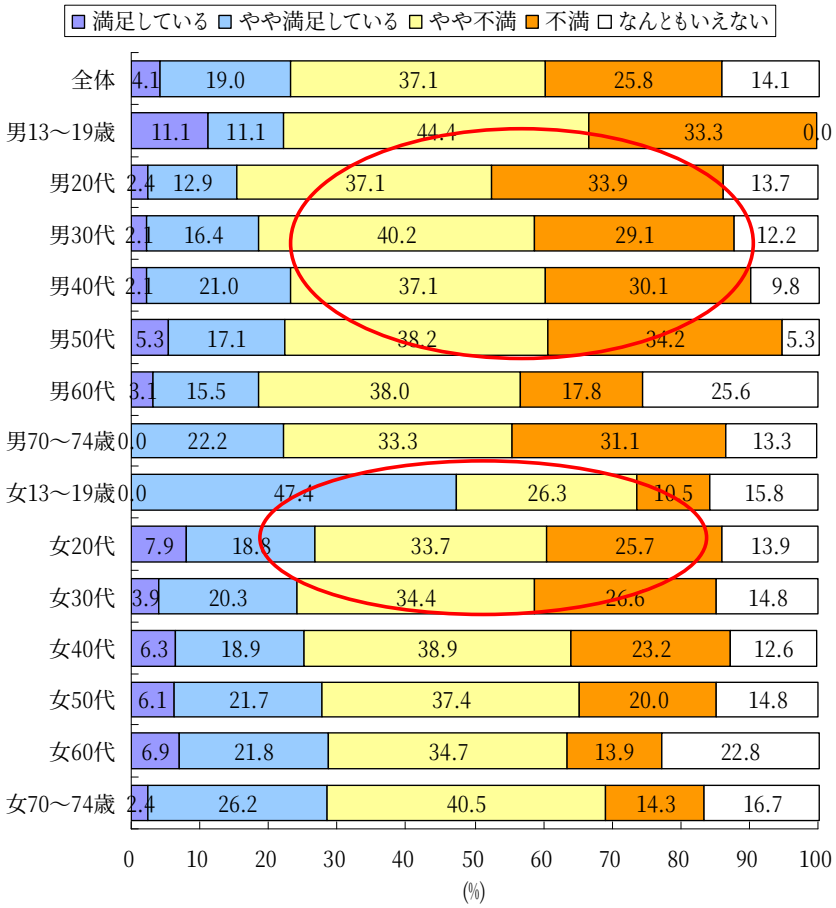
前節では、経済環境の変化が生活や消費に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。ここからは、実際の収入についてみていく。

まず、収入の満足度は、次のようになった。

◇全体では、満足（「満足している」＋「やや満足している」）23.1%、不満（「不満」＋「やや不満」）62.9%と、６割以上の人が不満を持っている。
◇男 20 代～50 代は、７割が不満を持っている。
◇女 20 代～40 代は、ほぼ６割の人が不満を持っている。
◇60 歳以上の男女は他の年代と同等だが、不満は減少する。

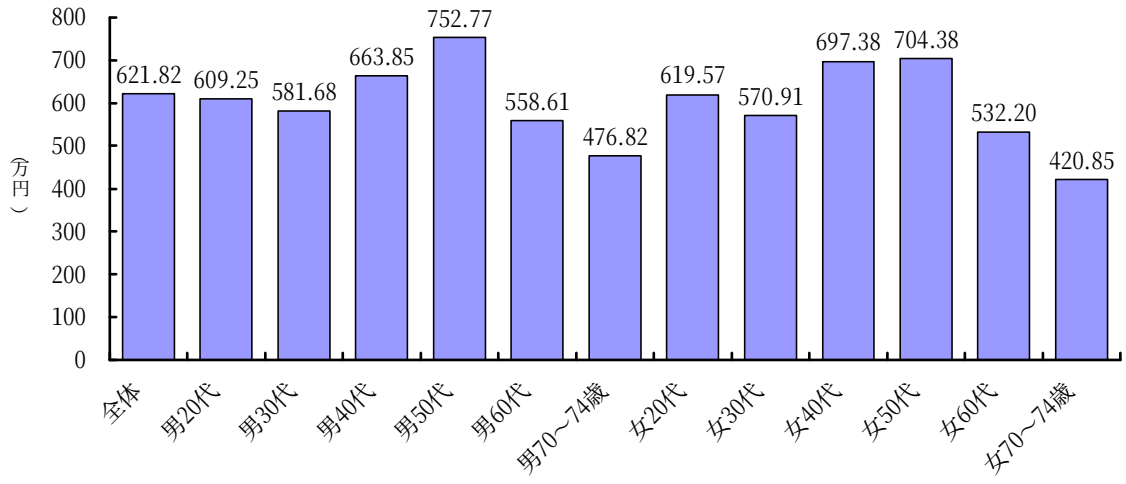
現役世代、子育て世代は、収入への不満が大きい。

図表 2-16：収入の満足度



日本型賃金体系は、基本的に年代が上がるに伴って年収も上昇する賃金モデルであるが、調査結果による世帯年収は、このようになっていない。調査結果によると、20 代～50 代の中で、30 代の世帯年収が最も低くなる。これは、20 代は共働き世帯で、30 代になると子育て期に入り、夫のみの収入に頼るという要因によるものと推察される。世帯年収の実態からみると、30 代は収入への不満だけでみえてこない厳しい現実にさらされていることがわかる。

図表 2－17：世帯年収（平均）

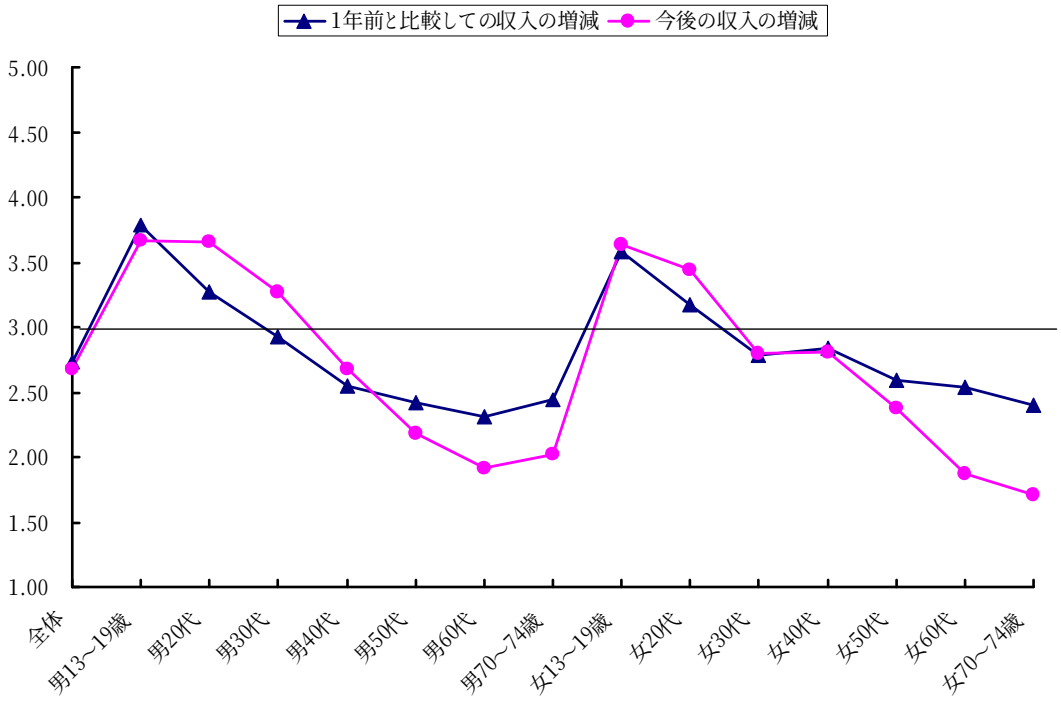


1 年前と比較しての収入の増減と今後の増減は、図表 2－18 のようになった。

◇収入が増加しているのは、男女とも 20 代までで、30 代以降は減少している。
◇男 40 代～50 代、女 50 代の減少幅は特に大きい。（60 歳以上の減少は引退によるもの）
◇今後の収入の増減についても、男女 40 代以上は 1 年前に比べて多少の改善期待はあるものの、増加までの期待には至っていない。

現役中高年の収入の減少と今後の悲観的な見方は、先に見た“暮らし向きの悪化”、“不透明な先行き感”と呼応している。収入の減少が、生活意識と消費生活に直結しているのである。

図表 2－18：1 年前と比較しての収入の増減と今後の増減



注：値はそれぞれの質問について最大 5、最小 1 のウエイトで加重平均したスコア。

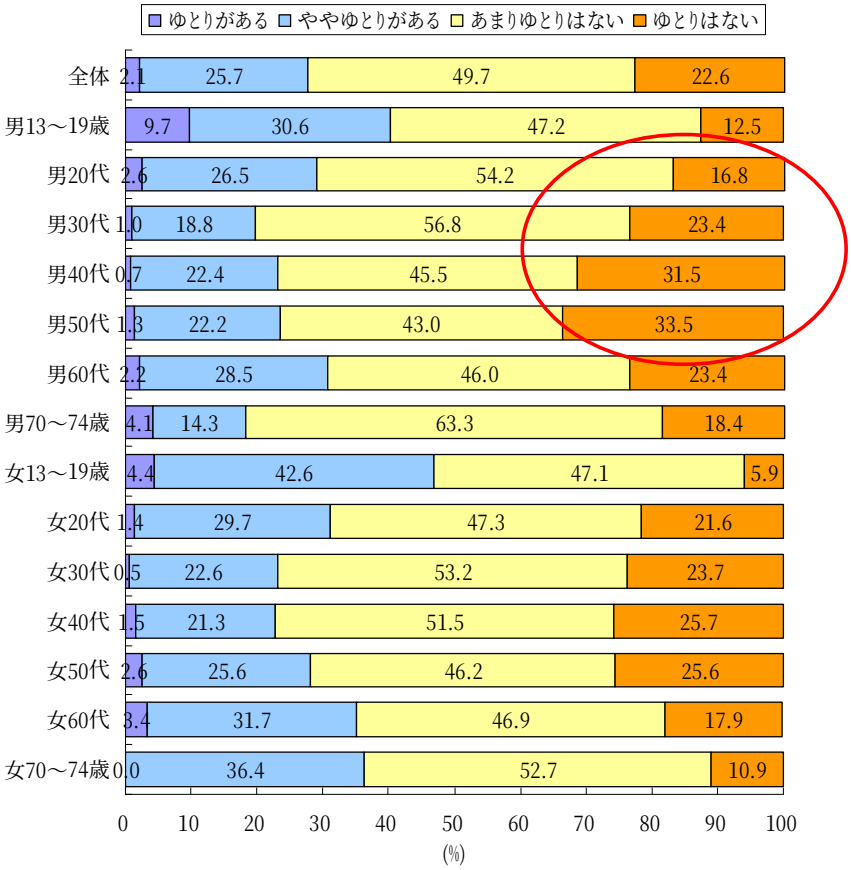
（２）ゆとりのない家計収支

経済的なゆとりがあるかという問いに対しても、収入への不満と同様に、ゆとりのなさを感じている人が多い。

◇全体では、ゆとりがある（「ゆとりがある」＋「ややゆとりがある」）27.8%、ゆとりがない（「ゆとりがない」＋「あまりゆとりがない」）72.3%で、7 割以上の人がゆとりのなさを感じている。
◇男性は、50 代にかけて年代が上がるほど“ゆとりのなさ”の程度が高まる。
◇女性は、30 代～40 代にかけて、“ゆとりのなさ”の程度が高まる。
◇男女 13～19 歳を除くと、女性 60 歳以上が、他の世代よりもゆとりを感じている。

ここでも指摘されることは、現役世代の経済的なゆとりのなさである。

図表 2－19：経済的なゆとり



図表 2－20：収入満足度、収入の増減、経済的なゆとり

（収入のある人のみ回答　n=1,392）

	収入満足度	1年前と比較しての収入の増減	今後の収入の増減	経済的なゆとり
全 体	2.39	2.73	2.68	2.43
男13～19歳	2.22	3.78	3.67	2.83
男20代	2.13	3.27	3.66	2.53
男30代	2.22	2.92	3.26	2.30
男40代	2.28	2.55	2.68	2.23
男50代	2.21	2.42	2.18	2.21
男60代	2.48	2.31	1.91	2.46
男70～74歳	2.27	2.44	2.02	2.39
女13～19歳	3.00	3.58	3.63	2.94
女20代	2.50	3.17	3.44	2.48
女30代	2.41	2.78	2.80	2.33
女40代	2.46	2.84	2.81	2.31
女50代	2.57	2.59	2.37	2.40
女60代	2.73	2.54	1.87	2.61
女70～74歳	2.62	2.40	1.71	2.67

注：値はそれぞれの質問について最大 5、最小 1 のウエイトで加重平均したスコア。

実際に収入と支出のバランスをみると、支出が収入を上回っている人が全体で 3 割近くにもなり、家計収支が逼迫している。

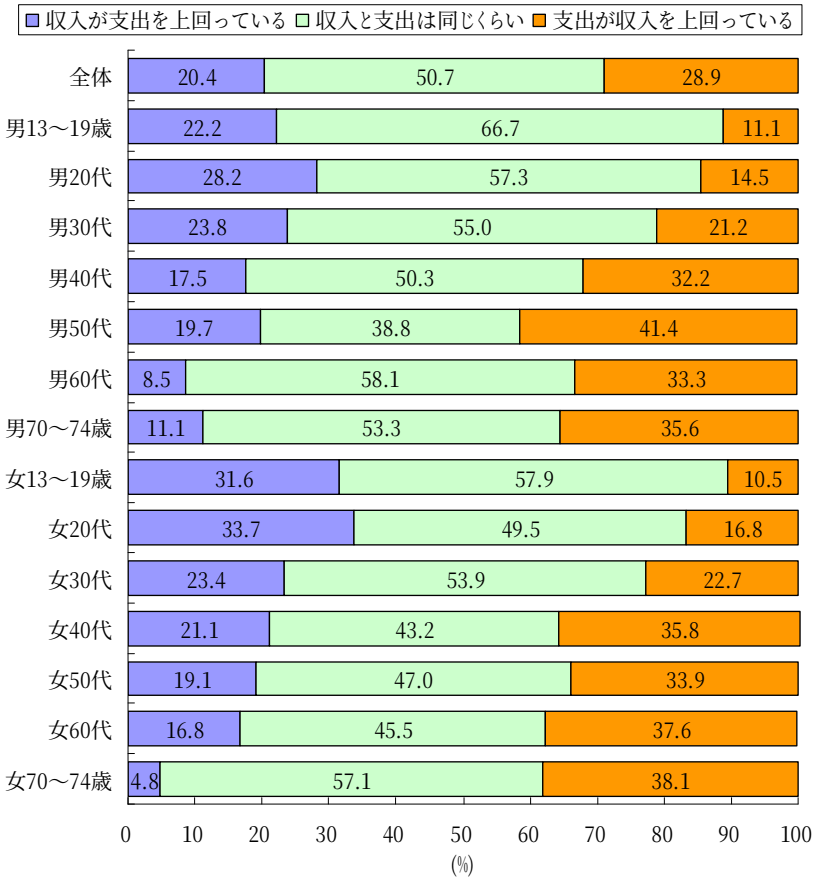
◇全体では、「収入が支出を上回っている」（20.4%）人よりも、「支出が収入を上回っている」（28.9%）人のほうが多い。

◇男女とも 20 代では「収入が支出を上回っている」人が「支出が収入を上回っている」人より多いが、年代が上がるにつれ、「支出が収入を上回っている」人が増加し、40 代以降の年代では逆転し、多数派になる。

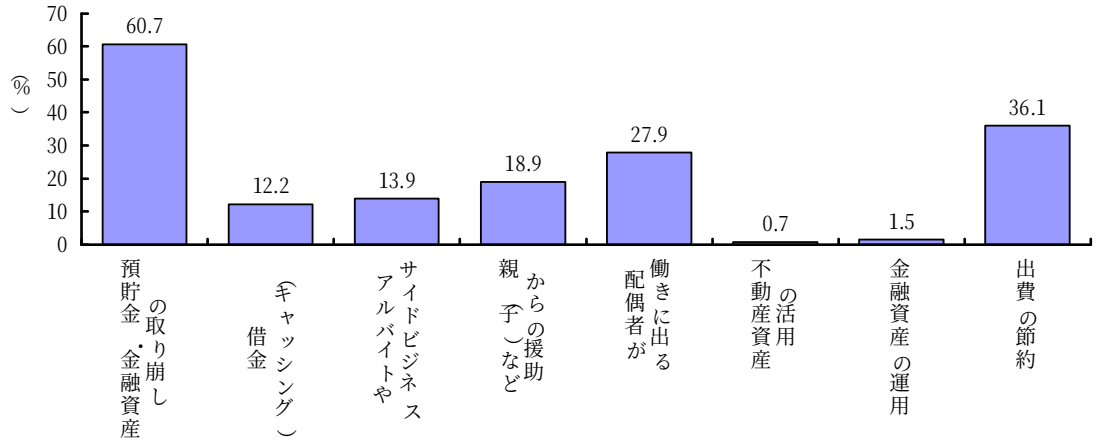
では、「支出が収入を上回っている」人は、どのようにして補填しているのだろうか。

「預貯金・金融資産の取り崩し」が 60.7%で最も多い。都市生活者は、収入が減り、支出の補填のためのためにやむをえず貯蓄を取り崩しているのである。「出費の節約」36.1%、「配偶者が働きに出る」27.9%、「親(子)などからの援助」18.9%がこれに続く。

図表 2-21：収入と支出のバランス



■ 支出が収入を上回っている人（n=402）の補填方法



増えた支出と減った支出を多い順に整理したものが、図表 2-22 である。

全体でみると、ここ 1～2 年で増えた支出は、「食料費」「通信費」「保健医療費」の順で多い。食費が増加していることに加え、携帯電話の普及と利用が拡大することによって、通信費の負担が増している。また、保健医療費の負担も重くのしかかっている。

反対にここ 1～2 年で減った支出は、「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「小遣い」「貯蓄」の順で多い。貯蓄のゆとりもなくなり、小遣いを節約して、ファッションの購入を控えざるを得なくなっている。

増えた支出と減った支出の内容は、当然のことながら性年代で異なる。以下は、性年代別に整理したものである。

◇男 13～19 歳で増えた支出は、「小遣い」「趣味・娯楽費」である。反対に減った支出は、「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「趣味・娯楽費」「交通費」である。

◇女 13～19 歳では、「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「食料費」「趣味・娯楽費」が増え、「貯蓄」「小遣い」「教育費」が減っている。10 代のファッション支出は、男性が減少、女性が増加と分かれた。

◇男 20 代は、「食料費」「趣味・娯楽費」「通信費」が増え、「貯蓄」「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「小遣い」が減った。

◇女 20 代は、「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「交際費」「食料費」が増え、「貯蓄」「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「交通費」が減った。「衣料品・靴・バッグなどの購入費」は、増加と減少の上位に出現するが、増加が減少を上回っていることからファッション支出の増加が認められる。

◇男性 30 代・40 代は、「食料費」「通信費」「教育費」が増え、「貯蓄」「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「小遣い」「趣味・娯楽費」「交際費」が減った。この層は、収入が減る中で、重くのしかかる「食料費」や「通信費」を負担するために、「貯蓄」に回す余裕がなくなり、「衣料品」や「小遣い」を節約せざるを得ない状況に追い込まれている。

◇この傾向は、女性の同年代でも同様で、40 代世帯では、子どもの成長に伴い「教育費」の負担が大きくなってきていることを示している。

◇子育て世代は、子どもにかかわる支出が増加し、「小遣い」や「交際費」を減らさざるを得ない状況にある。「小遣い」や「交際費」の減少は、友人とのつきあいを希薄化させていくことにもつながり、憂慮される。

◇「教育費」への支出増は、男 50 代まで続く。「通信費」は、男女とも支出が増えている費目になっている。「保健医療費」は、50 代男女で支出増が確認される費目である。一方、50 代の支出減は、男性が「小遣い」「趣味・娯楽費」「衣料品・靴・バッグなどの購入費」、女性が「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「食料品」「小遣い」「貯蓄」になっている。

子どもの成長を支える 50 代世帯は、「教育費」と「通信費」の支出増が顕著で、男性は、収入減少により、直接的に「小遣い」の“削減”を強いられている。女性は、「食料費」の節約に努めているのである。

◇60 代以降の世代は、男女とも「保健医療費」「水道光熱費」「交際費」が増えている。「保健医療費」は、高齢化に伴い支出が増える傾向にある。一方、減った支出は、男性が「小遣い」「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「食料費」で、女性は「衣料品・靴・バッグなどの購入費」「食料費」「小遣い」になる。60 代以降は、引退世代に入ることにより、日々の外出に伴う出費が減少していくとみられる。

「小遣い」は、ここ 1～2 年で減った支出で 2 番目に多い費目で、男性 50 代以上では、1 番目に減った支出にあげられている。実際の性年代別の 1 ヶ月の小遣い額と 1 年前と比較しての増減をまとめたものは、図表 2－23 になっている。これによると、現役世代男性（男 20 代～50 代）の 1 ヶ月の小遣い額の平均は 32,000 円で、年代による差は殆どなく、年代が上がるほど「1 年前と比較して小遣いが減った」と回答する人が多くなっている。男性 50 代以上の小遣い額は、“削減”を余儀なくされ、他の世代と同等の水準に抑えられている。

重点的に増やしたい支出は、全体で「貯蓄」が最も多く、「趣味・娯楽費」と「小遣い」が続く。「貯蓄」は、男女とも 20 代～50 代の現役世代に共通して最も多くなっている。現状の厳しい家計のやりくりから脱して、少しでも気持ちのゆとりを持ちたいと考えているようだ。また、「貯蓄」が最も多くなる背景として、先行きの不透明さから将来への備えという意味合いもあるだろう。「趣味・娯楽費」と「小遣い」は、これまでの削減対象になってきたもので、ゆとりのある生活を取り戻したいとの気持ちの表れと解釈できる。

60 代以上の高齢者では、「趣味・娯楽費」が最も高くなる。将来への蓄えよりもリタイア人生を楽しみたいと考えているようだ。

一方、重点的に減らしたい支出は、全体で「水道光熱費」が最も多く、「通信費」、「食料費」がこれに続く。これは、男女とも 20 代～50 代に共通した傾向である。この 1～2 年での支出増加の要因として「通信費」が大きな位置を占めており、普段の生活の中での負担感が増している結果の裏返しともいえる。現役世代は、「通信費」を含む生活のインフラにかかるコストを可能であれば減らしたいと考えている。

60 歳以上になると、減らしたい支出の上位に「保健医療費」が上がってくる。いうまでもなく、これも負担感によるものであろう。

図表 2－22：増えた支出と減った支出

■ この1～2年で増えた支出（収入のある人のみ n=1,392）

	1位	2位	3位
全 体	食料費(外食費･給食費を含む) (37.1%)	通信費(携帯電話･インターネットを含む) (33.8%)	保健医療費 (27.0%)
男13～19歳	小遣い (44.4%)	趣味･娯楽費 (33.3%)	－
男20代	食料費 (53.2%)	趣味･娯楽費 (34.7%)	通信費 (33.9%)
男30代	食料費 (37.0%)	通信費 (34.4%)	教育費 (29.6%)
男40代	教育費 (65.7%)	通信費 (49.0%)	食料費 (46.2%)
男50代	教育費 (36.8%)、通信費 (36.8%)	保健医療費 (32.9%)	－
男60代	保健医療費 (51.9%)	食料費 (28.7%)	通信費 (25.6%)
男70～74歳	保健医療費 (35.6%)	水道光熱費（電気･ガス･水道費) (24.4%)	通信費／自家用車関連費 (22.2%)
女13～19歳	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (63.2%)	食料費 (47.4%)	趣味･娯楽費 (42.1%)
女20代	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (43.6%)	交際費 (41.6%)	食料費 (38.6%)
女30代	食料費 (48.4%)	通信費 (35.2%)	水道光熱費 (29.7%)
女40代	教育費 (67.4%)	食料費 (52.6%)	通信費 (47.4%)
女50代	通信費 (36.5%)	保健医療費 (30.4%)	食料費 (27.0%)
女60代	保健医療費 (45.5%)	水道光熱費 (26.7%)	食料費 (24.8%)
女70～74歳	保健医療費 (61.9%)	交際費 (28.6%)	水道光熱費 (26.2%)

■ この1～2年で減った支出（収入のある人のみ n=1,392）

	1位	2位	3位
全 体	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (32.3%)	小遣い (30.0%)	貯蓄 (27.1%)
男13～19歳	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (44.4%)	趣味･娯楽費 (22.2%)	交通費 (11.1%)
男20代	貯蓄 (26.6%)	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (25.0%)	小遣い (23.4%)
男30代	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (32.3%)	趣味･娯楽費 (30.7%)	交際費 (28.6%)
男40代	趣味･娯楽費 (38.5%)	小遣い (34.3%)	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (30.1%)
男50代	小遣い (44.7%)	趣味･娯楽費 (36.8%)	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (36.2%)
男60代	小遣い (36.4%)	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (34.9%)	食料費 (26.4%)
男70～74歳	小遣い (35.6%)	貯蓄 (33.3%)	食料費 (28.9%)
女13～19歳	貯蓄 (21.1%)	小遣い／教育費 (15.8%)	
女20代	貯蓄 (27.7%)	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (22.8%)	交通費 (21.8%)
女30代	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (41.4%)	貯蓄 (28.1%)	小遣い (26.6%)
女40代	貯蓄 (36.8%)	趣味･娯楽費／小遣い (32.6%)	
女50代	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (37.4%)	食料費 (33.9%)	小遣い、貯蓄 (31.3%)
女60代	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (39.6%)	食料費 (33.7%)	小遣い (25.7%)
女70～74歳	衣料品･靴･バッグなどの購入費 (35.7%)	食料費 (28.6%)	交際費／小遣い／貯蓄 (23.8%)

■ 重点的に増やしたい支出（収入のある人のみ n=1,392）

	1位	2位	3位
全 体	貯蓄（48.3%）	趣味･娯楽費（33.3%）	小遣い（26.8%）
男13～19歳	小遣い（44.4%）	衣料品･靴･バッグなどの購入費（33.3%）	交際費（22.2%）
男20代	貯蓄（50.8%）	趣味･娯楽費（37.9%）	小遣い（25.0%）
男30代	貯蓄（47.6%）	小遣い（30.2%）	趣味･娯楽費（23.3%）
男40代	貯蓄（53.8%）	趣味･娯楽費（35.7%）	教育費（32.2%）
男50代	貯蓄（49.3%）	趣味･娯楽費（36.8%）	小遣い（35.5%）
男60代	趣味･娯楽費（41.9%）	貯蓄（40.3%）	小遣い（33.3%）
男70～74歳	趣味･娯楽費（42.2%）	貯蓄（22.2%）	小遣い（20.0%）
女13～19歳	貯蓄（42.1%）	趣味･娯楽費／小遣い（21.1%）	
女20代	貯蓄（57.4%）	趣味･娯楽費（29.7%）	衣料品･靴･バッグなどの購入費／小遣い（15.8%）
女30代	貯蓄（58.6%）	趣味･娯楽費（30.5%）	小遣い（21.9%）
女40代	貯蓄（48.4%）	教育費（25.3%）	趣味･娯楽費（24.2%）
女50代	貯蓄（59.1%）	趣味･娯楽費（41.7%）	小遣い（27.8%）
女60代	貯蓄（38.6%）	趣味･娯楽費（32.7%）	小遣い（21.8%）
女70～74歳	趣味･娯楽費（35.7%）	貯蓄（26.2%）	食料費／小遣い（21.4%）

■ 重点的に減らしたい支出（収入のある人のみ n=1,392）

	1位	2位	3位
全 体	水道光熱費（電気･ガス･水道費）（37.3%）	通信費(携帯電話･インターネットを含む)（30.5%）	食料費(外食費･給食費を含む)（25.4%）
男13～19歳	趣味･娯楽費（22.2%）	衣料品･靴･バッグなどの購入費、食料費（11.1%）	
男20代	食料費（43.5%）	通信費（27.4%）	水道光熱費（21.0%）
男30代	水道光熱費（31.2%）	通信費（28.6%）	自家用車関連費（23.8%）
男40代	水道光熱費（42.7%）	通信費（32.9%）	各種ローンの返済費（27.3%）
男50代	水道光熱費（43.4%）	通信費（29.6%）	各種ローンの返済費、自家用車関連費（27.6%）
男60代	水道光熱費（42.6%）	保健医療費（33.3%）	通信費（28.7%）
男70～74歳	保健医療費（35.6%）	水道光熱費（31.1%）	食料費（22.2%）
女13～19歳	食料費／通信費（36.8%）		衣料品･靴･バッグなどの購入費（26.3%）
女20代	通信費（36.6%）	食料費（34.7%）	衣料品･靴･バッグなどの購入費（25.7%）
女30代	水道光熱費（42.2%）	通信費（35.9%）	食料費／保健医療費（25.8%）
女40代	水道光熱費（54.7%）	通信費（43.2%）	食料費（33.7%）
女50代	水道光熱費（49.6%）	通信費（36.4%）	自家用車関連費（25.2%）
女60代	水道光熱費（34.7%）	保健医療費（32.7%）	通信費（21.8%）
女70～74歳	保健医療費（33.3%）	水道光熱費（31.0%）	交際費（21.4%）

図表 2－23：1 ヶ月のこづかいと増減

	1ヶ月の平均小遣い額(円)	1年前と比較しての小遣い額の増減
全 体	23,979.74	-0.20
男13～19歳	7,954.55	0.77
男20代	30,660.00	0.04
男30代	32,226.47	-0.21
男40代	31,655.30	-0.39
男50代	32,054.42	-0.46
男60代	29,488.19	-0.47
男70～74歳	24,761.36	-0.48
女13～19歳	9,708.33	0.90
女20代	26,598.21	-0.01
女30代	21,924.66	-0.30
女40代	12,760.87	-0.38
女50代	15,578.74	-0.34
女60代	18,352.17	-0.30
女70～74歳	18,386.36	-0.34

注:「1年までと比較しての小遣い額の増減」は「増えた」～「減った」の5段階で聴取した結果を加重平均した。

（３）将来に備えて貯蓄

それでは、貯蓄の実態はどのようなものか。図表 2－24 は、貯蓄率と貯蓄額の増減、貯蓄理由をまとめたものである。

貯蓄をしているかという質問に対しては、次のようになった。

◇全体では、「毎月額を決めて貯蓄をしている」23.1%、「額は決めていないが毎月貯蓄をしている」15.6%、「毎月ではないが貯蓄をしている」33.9%で、何らかの形で貯蓄をしている人は、72.6%に上った。

◇女 40 代の貯蓄率がもっと高く、「毎月額を決めて貯蓄をしている」38.2%、「額は決めていないが毎月貯蓄をしている」13.2%、「毎月ではないが貯蓄をしている」38.2%で、ほぼ 9 割が貯蓄をしている。

また、貯蓄額が 1 年前と比較して増えたか減ったかを聞いたところ、

◇男性は、30 代までが増加、40 代以降減少し、60 代にかけて減った程度が大きくなる。
◇女性は、20 代までが増加、30 代以降が減少し、50 代の落ち込みが最も大きい。

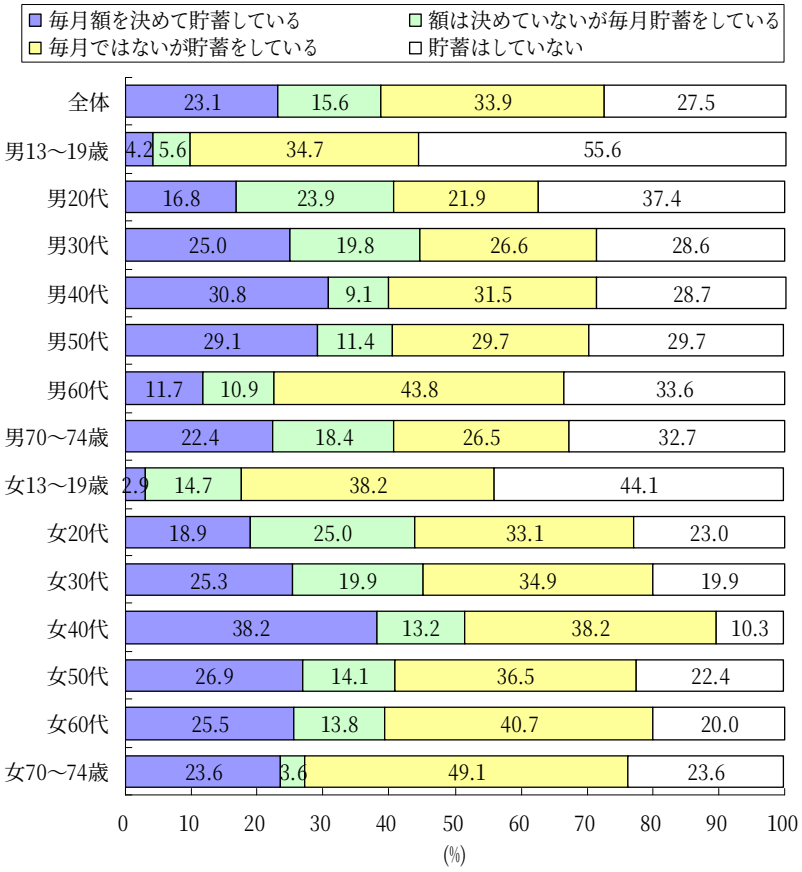
貯蓄の理由は、将来への備えが基本であるが、年代ごとにその特徴は異なっている。

◇全体では、「予定外の支出に備えて」（49.6%）、「老後に備えて」（48.2%）が多く、これらに続いて「子供の教育資金」（30.3%）、「雇用などの将来不安に備えて」（19.6%）、「旅行資金」（18.4%）、「車や家電等耐久消費財の購入資金」（12.8%）があげられている。
◇20 代は、「予定外の支出に備えて」が最も高いものの、「車や家電等耐久消費財の購入資金」「結婚資金」「旅行資金」が高く、将来の生活に向けての貯蓄になっている。
◇30 代も 20 代と同様に、「予定外の支出に備えて」が最も高いが、2 番目に高くなるのは、「子どもの教育資金」である。30 代は、結婚、出産という経過の中で、子どもの将来への貯蓄を始めている。また、30 代では、「雇用などの将来不安に備えて」や「老後に備えて」が目立って高くなる。30 代は、家族形成期に入ることを契機に、将来不安への備えや老後への蓄え意識が芽生えるとみられる。
◇40 代になると、「子どもの教育資金」が男女とも最も高くなる。
◇50 代は、「老後に備えて」が男女とも最も高くなる。また、「旅行資金」も理由の一つになっている。50 代で老後を意識し始めることが貯蓄の実態からも窺われる。
◇60 代・70 代も、「老後に備えて」が男女とも最も高くなる。

貯蓄の理由をまとめると、20 代は将来の生活構築にむけて、30 代は子どもと家族の将来への備え、40 代は子どもの教育資金、50 代以降は老後への備えということができる。貯蓄は、自分と家族の生活のための備えになっている。

このような背景から、子ども手当ての使いみち（図表 2－25）は、「貯蓄した」が 29.3%で、「子どものために使った」と同等になっている。「貯蓄」は、子どもの将来のためのものとみるべきであろう。また、「生活費に使った」は 23.0%で、減収で生活費に回さざるを得ない厳しい状況を反映している。

図表 2－24：貯蓄



■ 貯蓄率と貯蓄額の増減

	貯蓄率 (%)	1年前と比較しての貯蓄額の増減
全 体	72.5	-0.16
男13～19歳	44.4	0.25
男20代	62.6	0.28
男30代	71.4	0.05
男40代	71.3	-0.27
男50代	70.3	-0.41
男60代	66.4	-0.46
男70～74歳	67.3	-0.24
女13～19歳	55.9	0.39
女20代	77.0	0.18
女30代	80.1	-0.11
女40代	89.7	-0.28
女50代	77.6	-0.45
女60代	80.0	-0.41
女70～74歳	76.4	-0.40

注:「1年まえと比較しての貯蓄額の増減」は「増えた」～「減った」の5段階で聴取した結果を加重平均した。

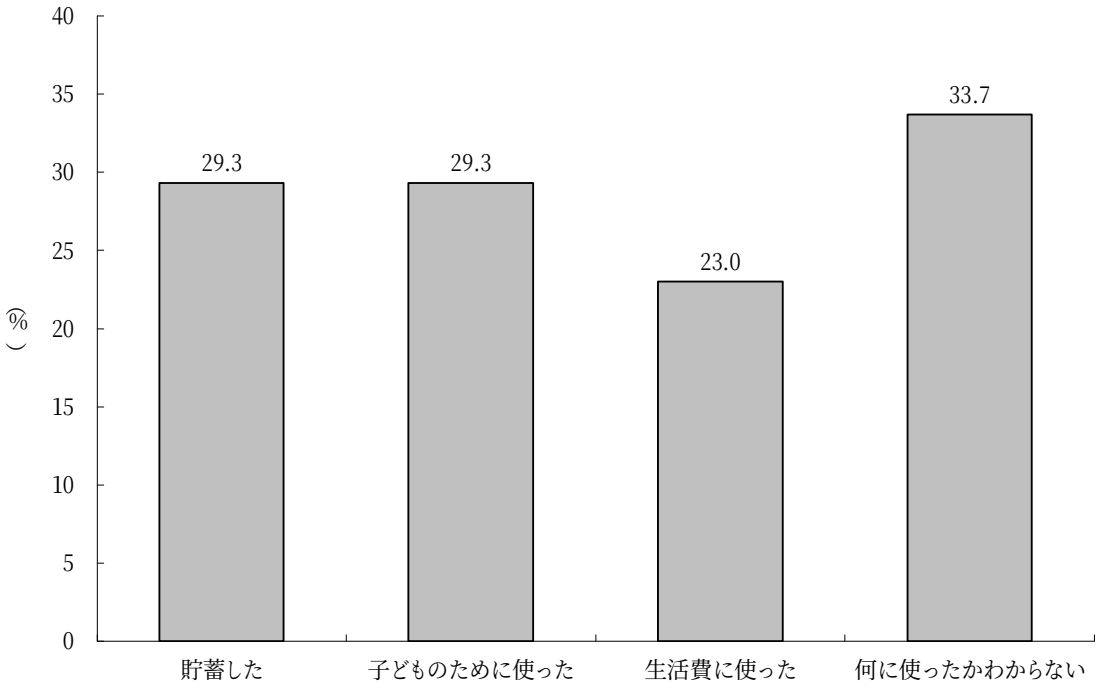
■ 貯蓄理由 (貯蓄している人 n=1,305)

単位:％

	子供の教育資金	住宅の購入資金	車や家電等耐久消費財の購入資金	旅行資金	結婚資金	雇用などの将来不安に備えて	老後に備え	予定外の支出に備えて
全 体	30.3	6.1	12.8	18.4	6.0	19.6	48.2	49.6
男13～19歳	0.0	3.1	0.0	9.4	3.1	**25.0**	6.3	25.0
男20代	14.4	**10.3**	**20.6**	17.5	**15.5**	19.6	7.2	30.9
男30代	**42.3**	**12.4**	**17.5**	10.2	**9.5**	**25.5**	31.4	48.9
男40代	**70.6**	**9.8**	**14.7**	12.7	1.0	**24.5**	48.0	43.1
男50代	**35.1**	5.4	11.7	10.8	1.8	18.9	**68.5**	45.0
男60代	2.2	0.0	9.9	**25.2**	0.0	9.9	**84.6**	**54.9**
男70～74歳	0.0	0.0	**15.2**	**24.2**	0.0	12.1	**75.8**	**51.5**
女13～19歳	2.6	0.0	2.6	10.5	0.0	7.9	2.6	28.9
女20代	17.5	**7.9**	12.3	**27.2**	**27.2**	**25.4**	17.5	**52.6**
女30代	**55.0**	**9.4**	12.1	**23.5**	**6.7**	**30.2**	45.0	**55.7**
女40代	**69.7**	**6.6**	**16.4**	**19.7**	0.0	**20.5**	47.5	**54.1**
女50代	19.0	1.7	**14.9**	**20.7**	3.3	**19.8**	**72.7**	**60.3**
女60代	0.0	1.7	6.9	**22.4**	0.9	6.0	**75.0**	**58.6**
女70～74歳	0.0	0.0	4.8	11.9	0.0	4.8	**69.0**	47.6

図表 2－25：子ども手当の使いみち

〔15歳以上の子どもがいる人 n=751〕



現在行っている資産運用についてきいたところ、次のような結果となった。

◇全体では、「個人年金保険」が 14.7%で最も多く、「株式」10.7%、「投資信託（債権型）」5.4%と続く。
◇「個人年金保険」は、ほとんどの層で利用されており、なかでも男 30 代～40 代、女 40 代～60 代で 20%～25%の高い利用率になっている。
◇「株式」は、男 30 代～70 代、女 30 代～70 代で利用されており、特に男 60 代・70 代での利用率が 24%と高い。男女とも 40 代・50 代においても 13%～17%の利用率である。
◇「投資信託（債権型）」も幅広い層で利用されているものの、最も高い利用率でも女 60 代の 15%程度にとどまった。
◇少数派ではあるが、「外貨貯金」は女 20 代・30 代で利用されている。（2%～5%）

また、今後利用したい資産運用手段については、次のようになった。

◇全体で最も高い「株式」でも 8.7%にとどまった。「株式」以外では、「個人年金保険」6.4%、「国債」「外貨貯金」「金（ゴールド）」4.4%であった。「外貨預金」と「金（ゴールド）」の運用は今後伸びていく可能性がある。
◇「株式」は、男性での最も利用意向が高い資産運用手段で、どの層でも 10%以上の利用意向がある。
◇女性層では、「個人年金保険」が最も高いが、利用意向は 10%以下にとどまった。

資産運用するには、知識と資金が必要であることは言うまでもないが、資産運用しない理由は、男性が「資金のなさ」を理由にしているのに対し、女性は「知識のなさ」をあげる人が多い。これらに続く理由は、「リスク」があげられるが、女 60 代～70 代は、リスクを避けたいという気持ちが強い。

図表 2－26：資産運用について

■ 現在利用している資産運用手段

	1位	2位	3位
全 体	個人年金保険 (14.7%)	株式 (10.7%)	投資信託（債権型） (5.4%)
男20代	個人年金保険 (3.9%)	投資信託（債権型） (1.9%)	株式 (1.3%)
男30代	個人年金保険 (9.9%)	株式 (8.3%)	投資信託（株式型）／外貨貯金 (3.1%)
男40代	個人年金保険 (23.1%)	株式 (16.1%)	投資信託（株式型） (5.6%)
男50代	個人年金保険 (24.7%)	株式 (16.5%)	投資信託（債権型） (10.1%)
男60代	株式 (24.1%)	個人年金保険 (16.1%)	投資信託（債権型） (13.9%)
男70～74歳	株式 (24.5%)	個人年金保険 (14.3%)	投資信託（債券型）／外貨貯金／国債 (8.2%)
女20代	個人年金保険 (6.1%)	外貨貯金 (2.0%)	－
女30代	個人年金保険 (11.3%)	外貨貯金 (4.8%)	株式 (3.8%)
女40代	個人年金保険 (25.0%)	株式 (16.9%)	外貨貯金 (7.4%)
女50代	個人年金保険 (21.8%)	株式 (13.5%)	投資信託（債権型） (12.2%)
女60代	個人年金保険 (22.8%)	投資信託（債権型） (15.2%)	株式／国債 (12.4%)
女70～74歳	株式 (18.2%)	個人年金保険 (14.5%)	投資信託（債券型・株式型）／国債 (10.9%)

■今後利用したい資産運用手段

	1位	2位	3位
全 体	株式 (8.7%)	個人年金保険 (6.4%)	国債、外貨貯金、金（ゴールド） (4.4%)
男13～19歳	－	－	－
男20代	株式 (13.5%)	外国為替証拠金取引（FXなど） (5.8%)	外貨貯金 (5.2%)
男30代	株式 (13.5%)	個人年金保険 (9.9%)	国債 (6.8%)
男40代	個人年金保険 (12.6%)	株式 (11.2%)	金（ゴールド） (9.8%)
男50代	株式 (11.4%)	個人年金保険 (5.7%)	国債 (5.1%)
男60代	株式 (13.9%)	国債 (9.5%)	外貨貯金 (8.0%)
男70～74歳	株式 (12.2%)	国債 (8.2%)	外貨貯金／投資信託（債権型・株式型）／個人年金保険 (4.1%)
女13～19歳	－	－	－
女20代	個人年金保険 (4.7%)	外貨貯金／不動産 (2.7%)	
女30代	個人年金保険 (8.1%)	株式 (7.5%)	外貨貯金 (5.9%)
女40代	個人年金保険 (8.8%)	株式 (7.4%)	金（ゴールド） (5.9%)
女50代	個人年金保険 (5.8%)	株式 (5.1%)	金（ゴールド） (3.8%)
女60代	国債 (9.0%)	個人年金保険 (7.6%)	外貨貯金 (4.8%)
女70～74歳	株式 (9.1%)	社債／国債／投資信託（株式型）／株式・投資信託の毎月定期購入／外国為替証拠金取引（FXなど） (3.6%)	

■ 資産運用しない理由 (n=1,335)

	1位	2位	3位
全 体	運用･投資に関する知識がない (36.6%)	運用･投資に回す資金がない (34.8%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (31.0%)
男20代	運用･投資に関する知識がない (34.2%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (25.4%)	運用･投資に回す資金がない (17.5%)
男30代	運用･投資に回す資金がない (40.8%)	運用･投資に関する知識がない (35.4%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (29.2%)
男40代	運用･投資に回す資金がない (47.8%)	運用･投資に関する知識がない (39.1%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (32.6%)
男50代	運用･投資に回す資金がない (48.1%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (39.8%)	運用･投資に関する知識がない (25.9%)
男60代	運用･投資に回す資金がない (44.7%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (26.6%)	運用･投資に関する知識がない (20.2%)
男70～74歳	運用･投資に回す資金がない (55.9%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい／銀行･郵便局に預けておけば安心 (26.5%)	
女20代	運用･投資に関する知識がない (51.9%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (20.9%)	運用･投資に回す資金がない (20.2%)
女30代	運用･投資に関する知識がない (44.5%)	運用･投資に回す資金がない (35.2%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (32.8%)
女40代	運用･投資に関する知識がない (49.5%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (44.7%)	運用･投資に回す資金がない (39.8%)
女50代	運用･投資に回す資金がない (49.6%)	運用･投資に関する知識がない (40.7%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (39.0%)
女60代	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (45.4%)	運用･投資に関する知識がない (38.0%)	運用･投資に回す資金がない (34.3%)
女70～74歳	銀行･郵便局に預けておけば安心 (39.1%)	ﾘｽｸのある資産運用は避けたい (30.4%)	運用･投資に回す資金がない (28.3%)

３．ワークライフ・バランスと家庭生活

（１）仕事・家庭・余暇のバランスと余暇への欲求拡大

都市生活者は、現在の仕事・家庭・余暇のバランスをどのように捉えているのだろうか。

◇有職者全体では、バランスが取れている(「バランスが取れていると思う」＋「どちらかといえばバランスが取れていると思う」) 46.3%、バランスが取れていない(「バランスが取れていない」＋「どちらかといえばバランスが取れていない」) 33.3%で、バランスが取れていると考える人が多い。
◇現役世代では、男性より女性のほうが、バランスが取れている人が多い。
◇男 40 代・50 代は、バランスが取れていない人が、バランスが取れている人を上回る。

仕事・家庭・余暇のいずれを充実させたいかについては、次のようになった。

◇有職者全体では、「余暇を充実させたい」が 43.0%で最も多く、「仕事を充実させたい」21.9%、「家庭を充実させたい」21.6%になった。
◇男性は、若い層ほど「仕事」充実意向が高いが、年代が上がると「余暇」への充実意向が高まる。特に、40 代から 50 代にかけての余暇充実意向の高まりが顕著である。
◇女性は 20 代から 40 代にかけて、「家庭」充実意向が高まる傾向にある。
◇「家庭」充実意向は、女性のみならず、男性でも高い。

「余暇」に対する充実意向の高さは、本章の１-（2）の「遊び・余暇」「健康・美容」への高まる関心と不満でみたように、この分野への関心が高いながらも、満足できていない状態にあることと符合する。
40 代男女の「家庭」充実意向の高さは、収入減少による家庭回帰の表れともみることができる。

さらに、労働時間と収入に関する質問には、次のような結果が得られた。

◇有職者全体では、「今と同じ時間働き、今と同じ収入を得たい」が 49.9%で最も多く、「労働時間を増やしても収入を増やしたい」が 34.8%となった。「収入が減っても労働時間を減らしたい」は 15.3%であった。2 人に 1 人は、時間を

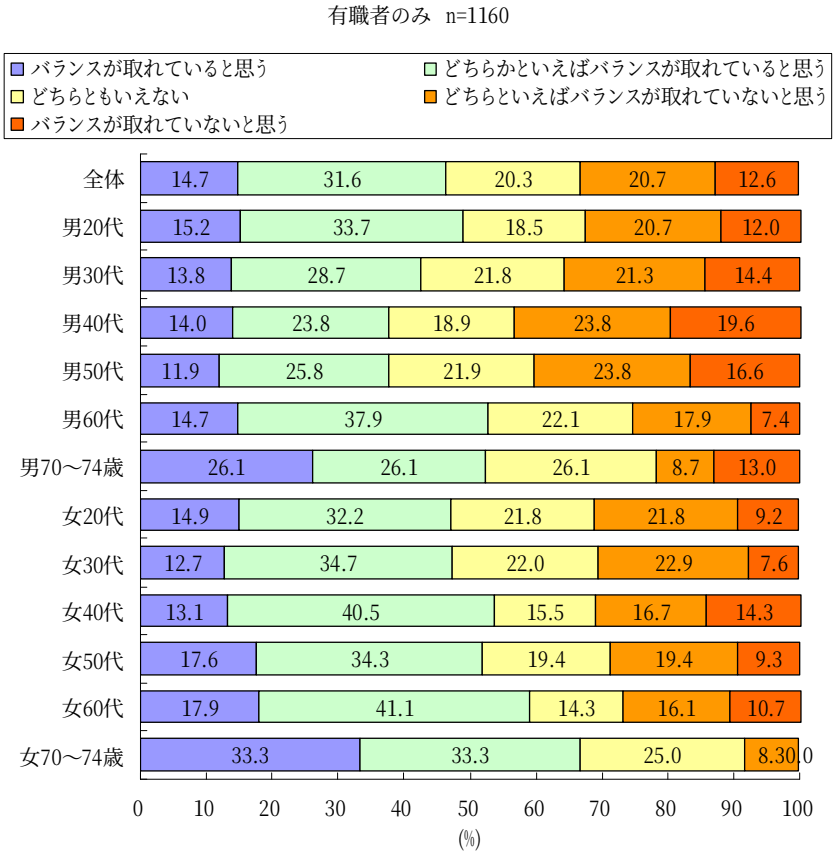
犠牲にしてまでの収入増を望んでいない。

◇男性は、若い層ほど「労働時間を増やしても収入を増やしたい」が多く、20 代で 54.3%にのぼる。50 代になると、「今と同じ時間働き、今と同じ収入を得たい」が 52.3%になり、過半数を超える。40 代は、「労働時間を増やしても収入を増やしたい」が 44.1%で、30 代の 46.3%と比較しても収入増への意欲がより強く表れる。

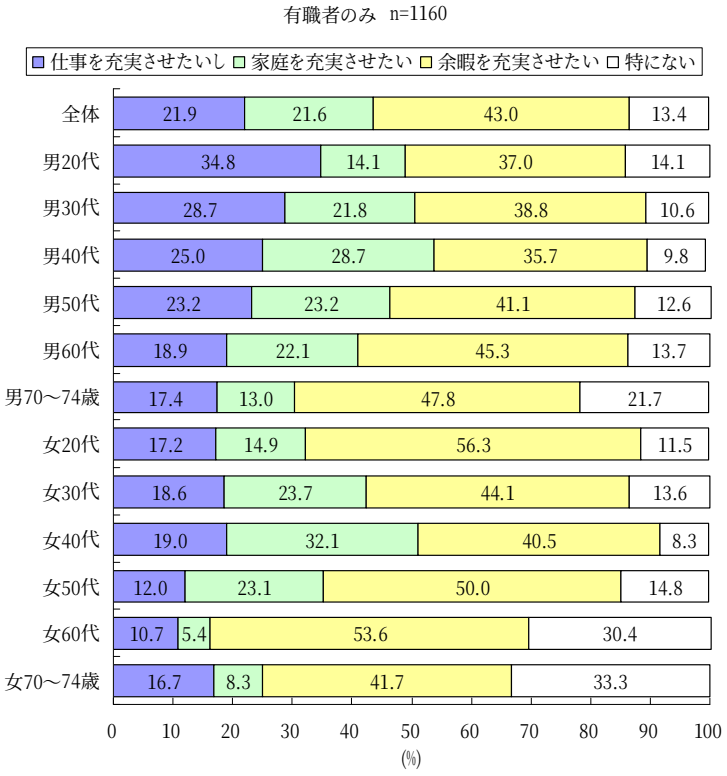
◇女性は、「今と同じ時間働き、今と同じ収入を得たい」が多数派で、男性に比べて収入に固執はしていないようだ。女性も 30 代以降は若い層ほど「労働時間を増やしても収入を増やしたい」が多くなる傾向がある。

若い層ほど収入増への意欲が高いのは、当然のことといえる。男 40 代の収入増への意欲の高さは、収入減少への反動も否めないが、男 40 代は子育て期にあり、働き盛りの現役世代としての労働意欲がある年代とみるほうが自然であろう。

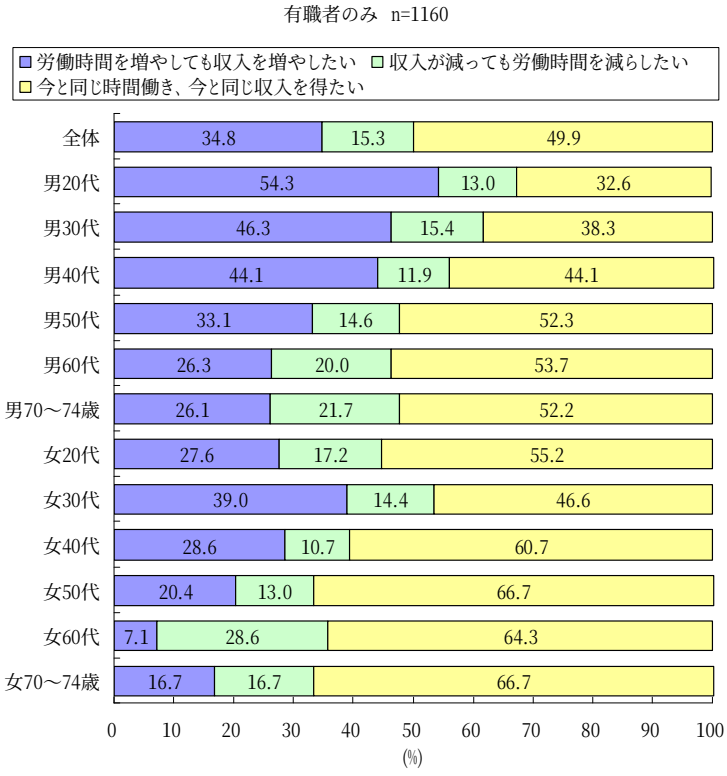
図表 2－27：仕事・家庭・余暇のバランス



図表 2－28：充実させたいもの



図表 2－29：労働時間と収入



（２）子ども中心の家庭生活

家庭に対する意識・態度・考え方からみえてくるのは、都市生活者が家庭を大切にしている姿である。そして、子育て期にある世代の子ども中心の家庭生活である。

図表 2－30 は、「家庭にあてはまるもの」を高い順に整理したものである。

◇全体では、「家族でよく会話をする」が 57.8%で最も高く、「家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする」49.1%、「家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い」47.8%が続く。

◇上記のことは、どの層でも上位にあげられている。今回の調査対象のほとんどが、2 人以上の世帯である（単身世帯は 6%）ことから、層による違いはみられない。

◇男 50 代・60 代と女 60 代では、「家族と一緒に旅行をすることがある」が 41%～47%あり、夫婦で旅行を楽しむ姿が浮かび上がる。

◇男 40 代と女 30 代・40 代で、「家庭生活は子ども中心である」が 60%前後あり、子育て世代の家庭生活が子ども中心で成り立っていることがわかる。

図表 2-31 の「家庭についての考え」は、子育てや親子関係についての考えを聞いたものである。

◇全体では、「子どものしつけは親の責任だと思う」が 78.1%で最も高く、2 番目は、「子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う」が 62.7%となった。いずれも子育ての考え方を示すものである。これらに次いで高いのは、「老後は子どもには迷惑をかけたくない」が 61.1%であった。

◇性年代別でみても、「子どものしつけは親の責任だと思う」は 10 代を除く全ての層で 1 番高く、30 代以降の親になっている年代では 8 割以上の人が支持する考えになっている。10 代では、「子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う」が最も高い。

◇10 代～30 代までの世代は、「男性も責任を持って子育てをすべきだと思う」が、35%～70%程度ある。自身が親になっている 30 代にかけて支持率が上昇し、男性より女性で高い。最近では“イクメン”という言葉で表されるように、育児にかかわる男性が注目されているが、実際の生活でも、若い世代では共働きの増加などにより、女性だけに頼るのではなく、夫婦で協力して子育てしていく姿がみてとれる。

◇40 代以降の 70%～80%の人は、「老後は子どもには迷惑をかけたくない」と回答している。

図表 2－30：家庭に対する意識・態度・考え方

	1位	2位	3位
全 体	家族でよく会話をする (57.8%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (49.1%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (47.8%)
男13～19歳	家族でよく会話をする (66.7%)	家族揃って食事をする機会が多い (51.4%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (45.8%)
男20代	家族でよく会話をする (53.5%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (42.6%)	家族揃って食事をする機会が多い (31.0%)
男30代	家族でよく会話をする (59.9%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (47.4%)	家族揃って食事をする機会が多い／家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (40.1%)
男40代	家庭でよく会話をする (63.6%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (60.8%)	子どもの学校行事には親が参加することが多い (60.1%)
男50代	家族でよく会話をする／家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (48.7%)		家族と一緒に旅行をすることがある (47.5%)
男60代	家族でよく会話をする (51.8%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (48.2%)	家族と一緒に旅行をすることがある (46.0%)
男70～74歳	家族揃って食事をする機会が多い (61.2%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (55.1%)	家族でよく会話をする (51.0%)
女13～19歳	家族と洋服などのショッピングに行くことがある (69.1%)	家族でよく会話をする (61.8%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (54.4%)
女20代	家族でよく会話をする (73.6%)	家族と洋服などのショッピングに行くことがある (60.8%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (53.4%)
女30代	家族でよく会話をする (64.0%)	家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (63.4%)	家庭生活は子供中心である (60.8%)
女40代	子どもの学校行事には親が参加することが多い (72.8%)	家庭生活は子供中心である (64.0%)	家族と洋服などのショッピングに行くことがある (61.8%)
女50代	家族でよく会話をする (52.6%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (46.8%)	家族と洋服などのショッピングに行くことがある (44.9%)
女60代	家族揃って食事をする機会が多い (46.2%)	家族でよく会話をする／家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃ってお祝いをする (44.8%)	
女70～74歳	家族でよく会話をする (60.0%)	家族揃った食卓では楽しい雰囲気で食べることが多い (50.9%)	家族揃って食事をする機会が多い (49.1%)

図表 2－31：家庭についての考え

	1位	2位	3位
全 体	子どものしつけは親の責任だと思う (78.1%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (62.7%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (61.1%)
男13～19歳	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (50.0%)	子どものしつけは親の責任だと思う (44.4%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (34.7%)
男20代	子どものしつけは親の責任だと思う (62.6%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (54.2%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (48.4%)
男30代	子どものしつけは親の責任だと思う (77.6%)	家族のためなら一生懸命働ける (58.9%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (55.7%)
男40代	子どものしつけは親の責任だと思う (92.3%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (69.2%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (68.5%)
男50代	子どものしつけは親の責任だと思う (81.6%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (67.1%)	家族のためなら一生懸命働ける (65.2%)
男60代	子どものしつけは親の責任だと思う (76.6%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (73.7%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (56.9%)
男70～74歳	子どものしつけは親の責任だと思う (93.9%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (79.6%)	家族のためなら一生懸命働ける (55.1%)
女13～19歳	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (66.2%)	友達同士のような親子関係でもよいと思う (58.8%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (55.9%)
女20代	子どものしつけは親の責任だと思う (70.9%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (69.6%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (67.6%)
女30代	子どものしつけは親の責任だと思う (84.9%)	男性も責任を持って子育てをするべきだと思う (71.5%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (66.7%)
女40代	子どものしつけは親の責任だと思う (89.7%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (80.1%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (75.7%)
女50代	子どものしつけは親の責任だと思う (89.1%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (80.8%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (69.9%)
女60代	子どものしつけは親の責任だと思う (83.4%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (81.4%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (60.0%)
女70～74歳	子どものしつけは親の責任だと思う (74.5%)	老後は子どもには迷惑をかけたくないと思う (69.1%)	子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよいと思う (56.4%)

家庭内コミュニケーション(意思の疎通)が最近 1～2 年で増えているかという問いに対しては、全体では「増えていない」という結果となった。性年代別では、次のようになっている。

◇10 代男女では、「増えていない」が多い。
◇男性は、20 代から 40 代にかけて「増えていない」人が少なくなり、子育て期に入ると、なかなか家庭内コミュニケーションを増やせるわけではないものの、一定水準を維持していることが読み取れる。50 代になると、「増えていない」が多くなる。
◇女性は、20 代で「増えている」が多いが、年代が上がるほど「増えていない」傾向が強くなる。

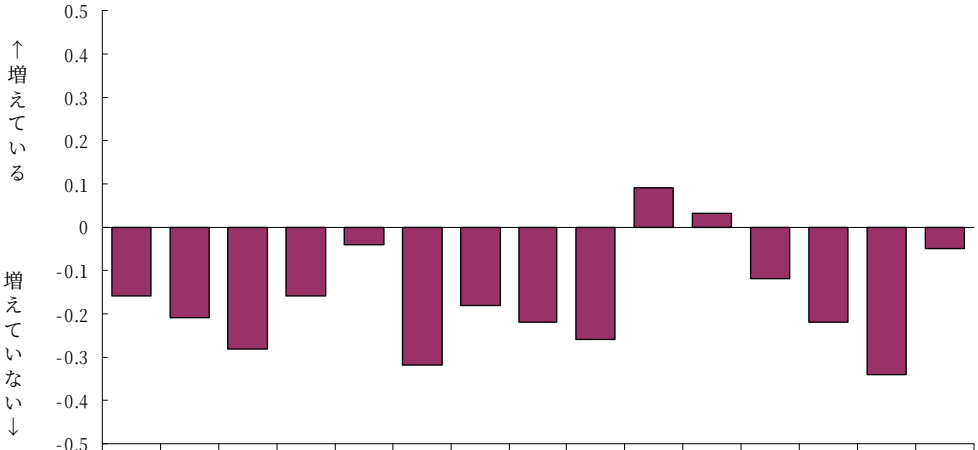
家庭内コミュニケーションは、子育て世代で活発である。子育て世代は、子どもとの対話や子どもを中心とした生活の中で家庭内での会話が活発であるためであろう。

ところで、家庭内のコミュニケーションの最大の機会は、夕食であろう。そこで、実際にどの程度の頻度で家族と一緒に夕食を摂っているかをみた。「1 週間に家族と一緒に夕食を食べた日数」（図表 2-33）は、平均 5.86 日/1 週である。このうち、家族全員で食べた日数は、平均 3.11 日/1 週にとどまる。

◇男性は、20 代が 4.82 日/1 週で最も少なく、年代が上がるにつれて多くなり、50 代で 5.85 日/1 週と全体平均と同水準になる。
◇女性も若い層ほど少なく、年代が上がると多くなる傾向は男性と同じであるが、家族と一緒の夕食日数は、男性より多い。女性で最も多いのは、40 代の 6.99 日/1 週とほぼ毎日になる。女 40 代は、子どもと一緒に夕食を摂っていることが読み取れる。
◇家族全員で食べた日数に限ると、50 代までの現役世代は、男女とも 3 日/1 週程度にとどまる。土日の休日を除くと、平日の家族揃っての食事は、わずか 1 日にすぎない。平日は、父親の職場からの帰宅が遅く、母親と子どもでの夕食にならざるを得ないためと推察される。
◇60 代以上の家族と一緒に食べた日数は、6 日/1 週を上回り、家族全員で食べた日数も 3.9 日/1 週と他の世代よりも多くなる。

子育て世代は、働き盛りでもある。彼らは、忙しい毎日の中で、夕食を一緒に摂ることが困難な状況ながらも、家族とのコミュニケーションは保たれている。

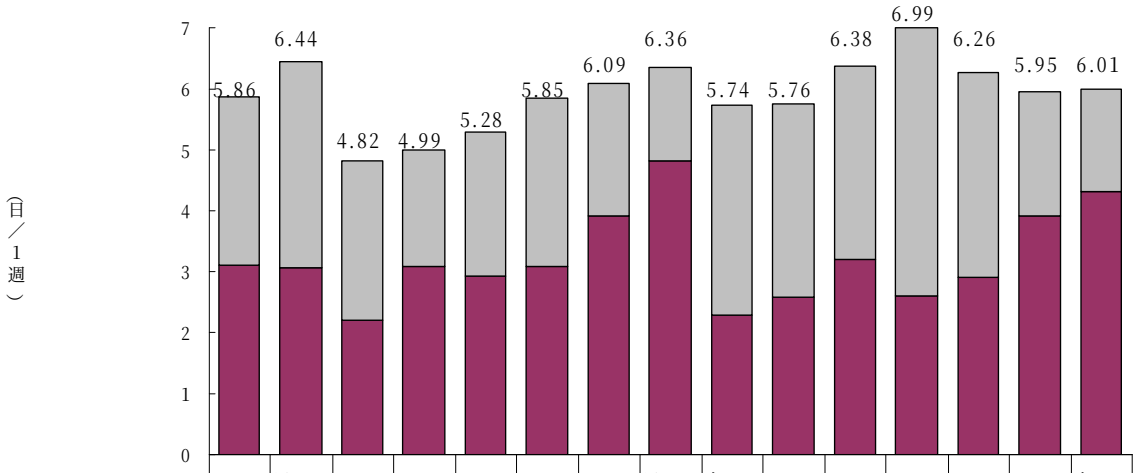
図表 2－32：家庭内コミュニケーションの増減



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
■家庭内コミュニケーションの増減	-0.16	-0.21	-0.28	-0.16	-0.04	-0.32	-0.18	-0.22	-0.26	0.09	0.03	-0.12	-0.22	-0.34	-0.05

注：値はそれぞれの質問についての「増えている」「やや増えている」「変わらない」「あまり増えていない」「増えていない」の５段階の回答を加重平均し、中央を「0」にして増減を示した。

図表 2－33：１週間に家族と一緒に夕食を食べた日数



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
□家族全員ではないが家族と食べた	2.75	3.38	2.61	1.89	2.34	2.76	2.18	1.53	3.45	3.19	3.17	4.38	3.34	2.03	1.70
■家族全員で食べた	3.11	3.06	2.21	3.10	2.94	3.09	3.91	4.83	2.29	2.57	3.21	2.61	2.92	3.92	4.31

（３）子どもには高等教育を受けさせたい

子育てと教育について、どのように考えているのだろうか。図表 2-34 は、「そう思う」と「ややそう思う」の合計が多い順に並べたものである。

回答率が高い項目は、次のように分類できる。

〔子どもの友達への関心〕

◇「子どもがどのような友達と付き合っているのか知りたい」という子どもの友達づきあいへの関心が高い。

〔高等教育を受けさせたい〕

◇「子どもには(大学や大学院など)高等教育を受けさせたい」は 80％と高いが、「少しでも偏差値の高い学校に子どもを入れたい」「塾に通わせたい」は、50％～60％にとどまる。子どもの教育については、高等教育までを視野に入れている。

〔教育環境への不満〕

◇「教育格差が広がっていると思う」「進路の選択の幅を広げてほしい」など教育環境への不満がある。

〔子育て・教育環境への要望〕

◇「奨学金制度を充実させてほしい」「保育施設の充実を図ってほしい」など具体的な要望がある。重くのしかかる教育費の負担や共働き家庭を背景にしたものであろう。

親は、子どもに高等教育を受けさせたいと考えており、そのための教育費の負担に耐え、また貯蓄もしている。一方では、教育環境や子育て環境への不満もある。

以上の結果について、世代間の差はみられず、上記のことが、都市生活者全世代に共通した認識になっている。

図表２－34：子育て・教育についての考え方

〔20歳以上のみ n=1,660 「そう思う」＋「ややそう思う」〕 単位：%

	進路の選択の幅を広げてほしい	付き合っているのか知りたい子どもがどのような友達と	教育格差が広がっていると思う	奨学金制度を充実させてほしい	保育施設の充実を図ってほしい	高等教育を受けさせたい子どもには（大学や大学院等）	お金をかけることはない無理をしてまで子どもに	負担になっている教育費が家計の	なので塾に通わせたい学校では勉強だけでは不十分	子どもには苦労をさせたい	子どもを入れたい少しでも偏差値の高い学校に	大切に育てたい子どもは少なく生んで	子どもは３人以上欲しい	行かせたい公立の学校より私立の学校に	言うことを聞いていればよい大人になるまでは子どもは親の
全 体	**89.2**	**89.1**	**86.7**	**85.1**	**85.6**	**80.8**	**73.7**	61.3	59.1	51.1	48.6	40.5	40.2	28.0	26.6
男20代	**84.5**	**80.6**	**80.6**	**81.3**	**82.6**	**78.7**	65.2	59.4	51.6	57.4	43.2	49.0	38.1	20.0	23.2
男30代	**86.5**	**85.9**	**83.3**	**85.9**	**83.3**	**74.0**	**76.6**	52.6	53.1	58.9	42.2	42.2	37.5	25.5	29.7
男40代	**88.8**	**86.7**	**85.3**	**87.4**	72.7	**81.1**	**69.9**	**72.0**	65.0	56.6	51.7	32.2	44.8	23.8	30.8
男50代	**91.8**	**85.4**	**90.5**	**83.5**	**88.0**	**84.8**	**71.5**	**67.1**	53.8	50.0	57.6	31.0	51.3	29.1	27.2
男60代	**89.1**	**82.5**	**86.1**	**82.5**	**89.1**	**81.8**	**76.6**	58.4	53.3	60.6	49.6	46.7	40.1	29.9	33.6
男70～74歳	**87.8**	**83.7**	**85.7**	**87.8**	**87.8**	**91.8**	**73.5**	**69.4**	**69.4**	63.3	61.2	46.9	61.2	36.7	34.7
女20代	**89.9**	**89.2**	**81.8**	**85.8**	**91.2**	**80.4**	**66.9**	51.4	44.6	35.1	34.5	43.2	30.4	17.6	18.2
女30代	**90.3**	**95.2**	**86.6**	**87.6**	**86.6**	**76.3**	**73.7**	51.6	61.8	41.9	42.5	42.5	33.9	23.7	21.5
女40代	**92.6**	**98.5**	**93.4**	**91.2**	**84.6**	**86.0**	65.4	**74.3**	**72.8**	50.7	58.8	30.1	41.2	34.6	29.4
女50代	**90.4**	**95.5**	**92.9**	**85.3**	**90.4**	**83.3**	**83.3**	**69.2**	62.8	47.4	56.4	42.9	41.0	34.0	21.2
女60代	**88.3**	**89.7**	**86.9**	**80.0**	**86.2**	**80.7**	**84.1**	60.7	64.1	49.0	44.8	36.6	37.9	35.2	26.2
女70～74歳	**90.9**	**96.4**	**90.9**	**81.8**	**87.3**	**83.6**	**81.8**	60.0	**78.2**	50.9	58.2	52.7	41.8	45.5	38.2

XX.X 80%以上
XX.X 66.7%以上80%未満

第３章　都市生活者のコミュニティと社会意識

到来しつつある高齢社会では、人々は肉体的にも精神的にも助け合い、支え合うことで社会が成り立つだろう。本章では、都市生活者のコミュニティ意識と社会に対する現在の意識と実態を整理する。まず、人づきあいとコミュニティ意識を明らかにした後に、地域コミュニティに対する意識と実態、社会意識と実態を明らかにする。また、老後についての意識もまとめる。

１．世代で異なる人づきあいとコミュニティ意識

（１）世代で異なる人づきあい

人づきあいについて 25 の考え方を質問した。結果を次の 4 つの領域ごとにまとめていく。

① 人づきあいについての考え
② 友人や仲間とのつきあい
③ 近所づきあい
④ 交流手段

① 人づきあいについての考え

人づきあいについての考えは、全体では「親戚づきあいは必要だと思う」が 54.8%で最も高く、「人数が少なくても深いつきあいをしたい」39.2%、「いろいろな人と知り合いになりたい」28.3%が続く。「広く浅く大勢の人とおつきあいをしたい」(15.1%)と「人づきあいは面倒だと思う」（17.3%）は少数意見であった。しかし、性年代での考えは異なっている。

◇10 代は、男女とも「いろいろな人と知り合いになりたい」が最も高い。
◇20 代でも、「いろいろな人と知り合いになりたい」は高いが、これ以上に「人数が少なくても深いつきあいをしたい」が最も高くなる。この年代では、「広く浅く大勢の人とおつきあいをしたい」が低く、仲間との深いつきあいを求めている。
◇30 代になると、「親戚づきあいは必要だと思う」が最も高くなる。結婚によって、親戚との関係が現実になってくると考えられる。
◇40 代以降の年代は、30 代の傾向がさらに強まり、「親戚づきあいは必要だと思う」「人数が少なくても深いつきあいをしたい」「いろいろな人と知り合いになりたい」の順になる。

◇「親戚づきあいは必要だと思う」に対しては、男性は高齢化するほど高くなるが、女性はどの世代でも高い。
◇「人数が少なくても深いつきあいをしたい」に対しては、男性より女性の支持率が高い。

② 友人や仲間とのつきあい

全体では、「親密な付き合いをする友人がいる」が 49.4%で最も高く、「趣味やスポーツの仲間がいる」40.5%、「声をかければ必ずつきあってくれる友人がいる」39.4%が続く。しかし、「つきあう友人の数が減っている」が 33.1%で、上記に続いて高い。

◇女性は、男性に比べてどの年代でも「親密な付き合いをする友人がいる」と「声をかければ必ずつきあってくれる友人がいる」が 50%～60%程度で高く、親密な友人がいる。また、「友人・知人を自宅に招くことが多い」も 3 割程度あり、自宅で友人と交流している。
◇10 代は、男女とも「趣味やスポーツの仲間がいる」が 50%を超えている。
◇20 代男性は、「趣味やスポーツの仲間」に加えて、「親密なつきあいをする友人」がいる。
◇30 代～50 代の男性は、「つきあう友人の数が減っている」「仕事関係以外の人づきあいは殆どない」のスコアが高くなり、仕事中心のつきあいが中心になっている。
◇しかし、男性は 50 代になると、「同窓会はできるだけ出席するようにしている」が 3 人に一人程度に増え、70 代ではほぼ 6 割になる。子育て期を過ぎると、疎遠になってしまった友人関係を取り戻そうとする意向が窺われる。
◇また、男 40 代～50 代と女 30 代～40 代は、「夫(妻)と共通の友人がいる」が 4 割から 5 割程度になる。

③ 近所づきあい

近所づきあいは、圧倒的に 30 代以上の女性と男 70 代でのスコアが高い。これらの人々は、在宅率が高くなるので、必然的に近所づきあいも活発になるのであろう。「近所の人といろいろな話をする」が最も高く、これに次いで「近所に親密なつきあいをする人がいる」「町会の集会や催し物などによく参加している」の順で高い。

④ 交流手段

交流手段は、「友人・知人との連絡はメールで殆ど済ませている」が全体で 31.8%である。10 代～40 代女性で約半数にもなっており、連絡手段としてのメールが多用されている。また、最近拡大している「一度も会ったことのないメールやネット上の友人がいる」は、男 30 代と女 10 代～20 代で、17%前後あった。

図表 3－1：人づきあい

■ 人づきあいについての考え　　単位：%

	必要だと思う親戚づきあいは	したい深いつきあいを人数が少なくても	なりたい知り合いにいろいろな人と	面倒だと思う人づきあいは	したい人とおつきあいを広く浅く大勢の
全 体	54.8	39.2	28.3	17.3	15.1
男13～19歳	43.1	27.8	52.8	9.7	15.3
男20代	36.8	41.3	34.2	16.1	12.3
男30代	42.2	32.8	25.0	16.1	14.6
男40代	51.0	35.7	23.1	17.5	13.3
男50代	65.8	28.5	19.6	21.5	19.6
男60代	63.5	27.7	17.5	20.4	13.1
男70～74歳	83.7	28.6	30.6	10.2	28.6
女13～19歳	54.4	48.5	52.8	7.4	14.7
女20代	45.9	58.1	36.5	17.6	8.1
女30代	55.9	46.2	30.1	20.4	16.1
女40代	58.8	47.8	26.5	19.9	15.4
女50代	59.0	41.0	24.4	17.9	16.7
女60代	59.3	35.9	22.8	14.5	15.9
女70～74歳	81.8	43.6	27.3	20.0	16.4

注：網掛けは「全体＋5%」以上

■ 友人や仲間とのつきあい　　単位：％

	親密なつきあいをする友人がいる	趣味やスポーツの仲間がいる	声をかければ必ず友人がいるつきあってくれる	つきあう友人の数が減っている	仕事関係以外のよくしている人づきあいを	夫（妻）と共通の友人がいる	同窓会はできるだけ出席するようにしている	人から相談を受けることが多い	友人・知人を自宅に招くことが多い	仕事関係以外の人づきあいは殆どない
全 体	49.4	40.5	39.4	33.1	32.9	29.9	28.4	26.3	21.0	8.4
男13～19歳	41.7	54.2	29.2	16.7	9.7	-	25.0	23.6	13.9	1.4
男20代	57.4	51.0	40.0	28.4	39.4	14.2	31.6	23.9	20.0	7.1
男30代	43.8	39.6	25.0	41.1	32.3	30.7	13.5	22.9	14.1	18.2
男40代	28.7	41.3	32.9	38.5	40.6	51.7	23.1	23.8	16.1	23.1
男50代	27.2	37.3	22.8	39.9	31.0	39.9	34.2	15.8	11.4	19.6
男60代	36.5	38.7	32.8	38.0	33.6	31.4	34.3	13.9	11.7	16.1
男70～74歳	44.9	46.9	26.5	36.7	38.8	30.6	59.2	24.5	12.2	4.1
女13～19歳	58.8	54.4	45.6	13.2	16.2	-	33.8	39.7	26.5	-
女20代	66.2	33.1	45.3	33.1	36.5	16.9	28.4	34.5	24.3	4.1
女30代	58.6	28.0	53.8	34.4	37.1	38.2	22.6	30.1	32.3	4.3
女40代	59.6	33.1	52.2	35.3	43.4	41.9	26.5	35.3	31.6	-
女50代	51.3	41.7	50.6	30.1	35.3	32.7	25.0	26.3	22.4	0.6
女60代	62.1	46.9	46.2	21.4	20.0	29.0	35.9	30.3	24.1	1.4
女70～74歳	58.2	45.5	40.0	43.6	23.6	30.9	40.0	34.5	36.4	-

注：網掛けは「全体＋5%」以上

■ 近所づきあい　　単位：％

	近所の人とよくするいろいろな話を	近所に親密なつきあいをする人がいる	町会の集会やよく参加している催し物などに	近所づきあいが減っている	近所の人と一緒に出かけたりすることがよくある
全 体	28.0	16.1	15.8	15.6	8.3
男13～19歳	8.3	9.7	2.8	9.7	4.2
男20代	6.5	4.5	1.9	14.2	1.3
男30代	14.6	5.2	9.4	15.1	3.1
男40代	18.2	15.4	17.5	12.6	7.0
男50代	19.0	7.0	14.6	20.9	3.2
男60代	27.0	16.1	17.5	15.3	4.4
男70～74歳	51.0	24.5	44.9	18.4	10.2
女13～19歳	19.1	11.8	10.3	10.3	7.4
女20代	9.5	10.8	5.4	14.2	4.1
女30代	38.2	18.8	19.4	11.3	14.0
女40代	47.8	35.3	24.3	21.3	14.0
女50代	41.0	20.5	18.6	18.6	10.3
女60代	55.2	29.0	25.5	18.6	21.4
女70～74歳	63.6	32.7	32.7	14.5	18.2

注：網掛けは「全体＋5%」以上

■ 交流手段　　単位：％

	殆ど済ませている連絡はメールで友人・知人との	ネット上の友人いるメールやネットで一度も会ったことのない	知り合いになった友人いるメールやネットで	近況報告や季節の挨拶等などの手紙や葉書をよく書く	電話等相手と顔を合わせないで話せる方が何でも
全 体	31.8	8.0	6.8	5.0	4.3
男13～19歳	29.2	11.1	5.6	-	13.9
男20代	35.5	11.0	9.0	0.6	4.5
男30代	38.0	16.1	13.0	3.1	3.6
男40代	23.8	6.3	3.5	0.7	2.8
男50代	17.1	1.9	1.3	1.3	-
男60代	7.3	0.7	-	5.1	2.9
男70～74歳	8.2	2.0	2.0	8.2	-
女13～19歳	47.1	17.6	14.7	4.4	8.8
女20代	52.0	16.2	18.9	5.4	3.4
女30代	53.2	12.9	11.3	8.1	4.8
女40代	49.3	8.8	8.1	4.4	6.6
女50代	30.8	0.6	1.3	7.7	3.2
女60代	13.8	-	-	10.3	5.5
女70～74歳	9.1	1.8	-	18.2	7.3

注：網掛けは「全体＋5%」以上

参加している集まりや活動を選んでもらったところ、「スポーツやさまざまな趣味の集まり」が 30.7%、「学生時代からの集まり」24.1%、「町内会・自治会・青年団など」19.9%が上位 3 であった。これも性年代ごとに特徴がみられる。

◇「スポーツやさまざまな趣味の集まり」は、男 10 代～20 代と男 70 代、女 60 代～70 代で高い。若い世代はスポーツに、高齢者は健康維持のための運動や趣味仲間との集まりに参加しているのだろう。

◇女性は、「稽古事や習い事・スクールなどの集まり」が高めである。

◇「ＰＴＡなど子どもを通じた集まり」は、子育て期の女性である 30 代～50 代で高いが、男性では男 40 代のみである。

◇「祭りや盆踊り・運動会など地域イベント」は、男 40 代と女 30 代・40 代で 2 割以上になる。子どもと参加しているとみられる。

◇男女とも 70 代になると、「町内会・自治会・青年団など」や「道路や公園などの清掃や地域の美化活動」「社会奉仕やボランティア活動」「交通安全や防犯・治安など地域の安全活動」へと参加する地域活動が広がる。

図表 3-2：参加している集まりや活動

単位:%

	趣味の集まりさまざまなスポーツや	などの集まり稽古事や習い事・スクール	た集まり子どもを通じPTAなど	の集まり学生時代から	ィ等の集まりトコミュニテインターネッ	た集まりペットを通じ	域の安全活動犯罪・治安等地交通安全や防	の美化活動清掃や地域道路や公園等	サイクル活動資源回収等リゴミの減量や	活動ボランティア社会奉仕や	地域イベント運動会等り・祭りや盆踊	・青年団など自治会町内会
全 体	30.7	11.9	16.4	24.1	3.0	2.4	3.9	6.3	2.7	5.6	15.3	19.9
男13～19歳	41.7	8.3	-	16.7	6.9	-	-	1.4	1.4	4.2	13.9	4.2
男20代	44.5	1.9	0.6	35.5	7.1	-	1.3	2.6	-	1.9	5.2	1.9
男30代	27.6	4.7	6.8	18.8	3.6	1.6	0.5	0.5	2.1	3.1	11.5	10.4
男40代	30.1	3.5	28.0	23.8	0.7	2.1	2.8	5.6	2.8	7.0	21.7	23.1
男50代	28.5	0.6	8.2	20.3	1.9	2.5	5.1	6.3	1.3	5.7	12.0	24.7
男60代	28.5	0.6	5.1	13.1	-	1.5	10.9	10.9	3.6	8.0	16.1	24.8
男70～74歳	36.7	8.2	2.0	16.3	-	2.0	18.4	26.5	12.2	18.4	16.3	44.9
女13～19歳	33.8	19.1	1.5	16.2	7.4	-	-	-	-	-	14.7	4.4
女20代	23.6	8.8	8.8	39.9	5.4	2.0	0.7	2.0	1.4	2.7	10.8	2.7
女30代	23.1	18.3	41.9	32.3	4.3	3.8	2.2	3.8	1.6	2.2	25.3	18.3
女40代	22.1	16.2	61.0	29.4	2.9	0.7	3.7	5.9	1.5	5.9	22.8	28.7
女50代	28.2	19.9	21.8	22.4	0.6	7.1	4.5	7.1	3.2	6.4	14.7	29.5
女60代	35.9	34.5	6.2	17.2	-	4.1	6.2	15.9	8.3	9.0	13.1	37.9
女70～74歳	52.7	27.3	3.6	16.4	1.8	5.5	9.1	16.4	5.5	20.0	16.4	41.8

注:網掛けは「全体＋5%」以上

（2）年代で異なる大切な人、関係を深めたい人、よりどころ

大切に思っている人、今後関係を深めたい人、そしてよりどころについてきいた。

① 大切に思っている人

まず、大切に思っている人は、全体で「親」「きょうだい」「子ども」があげられている。「配偶者」も含めて大切な人が「家族」になるのは、当然の結果といえる。「家族」以外では、「学校や学生時代の友人・知人」や「隣近所の友人・知人」など日頃周囲で接する人があげられている。これらを性年代ごとに順位付けすると、それぞれが置かれた環境によって異なっている。それぞれの層における3番目までのスコアは60%を超え、1番目は90%前後と高い。

◇10代は男女とも、「学校や学生時代の友人・知人」が9割以上で最も高く、「親」「きょうだい」がこれに続く。10代は友達の形成期で、意識上で友人との人間関係が大きな位置を占めているのであろう。

◇20 代は、「親」が「学校や学生時代の友人・知人」を上回り、最も高くなる。次いで、「きょうだい」になり、家族の大切さを感じている。

◇30 代になると、「親」が最も大切ということは、男女共通しているが、女性が 20 代と同じ「学校や学生時代の友人・知人」「きょうだい」であるのに対し、男性は、「きょうだい」「配偶者」となる。これは、男性は、社会人になり、学生時代の友人から職場での人づきあいに重点が移行したことにより、相対的に「学校や学生時代の友人・知人」が低下するためと考えられる。

◇40 代は、男女とも「親」「子ども」「配偶者」が高く、3 番目でも 80%を超える。40 代は、子どもの成長期にあり、家族を最も大切に思う世代である。

◇50 代が大切に思う人は、家族という点では 40 代と変わらないが、その順位は男女により異なっている。男性は、「配偶者」「子ども」「親」の順になるが、女性は、「子ども」「配偶者」「親」の順になる。老後を意識し始める男性 50 代は、「配偶者」への心理的依存が高まる傾向にある。

◇60 代でも男性は、「配偶者」が最も高くなる。一方、女性は、「子ども」「きょうだい」「隣近所の友人・知人」の順で、「配偶者」の位置は低い。女性は、70 代でも同じ傾向を示す。高齢化により、男性は「配偶者」を大切な人と思っているのに対して、女性は、「子ども」「きょうだい」「隣近所の友人・知人」になっている。

② 今後関係を深めたい人

今後関係を深めたい人は、全体で「子ども」48.9%、「配偶者」45.2%、「学校や学生時代の友人・知人」44.6%である。また、大切に思っている人に比べてやや低いスコアになる。これは、大切に思っている人との現在での関係がある程度良好な状態にあり、さらに積極的に関係を深める必要がないことをあらわしていると解釈できる。ここでも、性年代別にみていくことにする。

◇10 代は、大切に思っている人と傾向は同じである。

◇20 代は、男性が「学校や学生時代の友人・知人」が最も高く、「勤務先や仕事上の友人・知人」がこれに続く。女性でも、「学校や学生時代の友人・知人」が最も高く、「親」の次に「勤務先や仕事上の友人・知人」が続く。20 代は、社会人としての人間関係を構築したいということであろう。

◇30 代は、「親」「子ども」「配偶者」「きょうだい」が高い。30 代は、家族形成期にあるので、忙しい毎日の中で家族とのコミュニケーションを大切にしたいと考えているようだ。

◇40 代でも「親」「子ども」「配偶者」があげられるが、30 代に比べて男性は「親」よりも「配偶者」と「子ども」、女性は「子ども」をあげる人が多くなる。現役世代で子育てに追われる忙しい 40 代は、家族の絆を深めたいと考えている。

◇50 代以降の男性は、「配偶者」や「子ども」が上位にあげられ、大切に思っている人と同じ傾向を示す。しかも、年代が上がるほど、そのスコアも高くなっている。これは、大切に思っている人、すなわち「配偶者」や「子ども」との関係をもっと深めたいと考えていることの表れで、高齢化に伴ってより強くなっている。

◇50 代以降の女性が関係を深めたいのは、「子ども」が 1 番目で、大切に思っている人と同じである。これに次ぐのは「配偶者」「きょうだい」で、「配偶者」が「子ども」の次になる。

③ よりどころ

よりどころについて、家族や周囲の人に加えて、「学校」や「職場」「お寺や教会」「地域のコミュニティ」などを提示したが、家族や友人が高くなる結果となった。

◇10 代・20 代は、男女とも「友人（幼なじみを除く）」「親」の順で高い。これらの次に高いのは、男性が「学校」で、女性は「きょうだい」となった。

◇30 代以降の男性は、「配偶者」が最も高く、「子ども」「親」が続く。70 代男性では、「孫」が「配偶者」「子ども」に次ぐ。

◇40 代以降の女性が最もよりどころにしているのは「子ども」で、「配偶者」より高い。これに次ぐのは、「友人」や「きょうだい」である。

男性は、高齢化に伴い「配偶者」をよりどころにする傾向にあるが、女性は、第一に「子ども」で、「配偶者」はこの次になっている。

図表 3-3：大切に思っている人、今後関係を深めたい人、よりどころ

■ 大切に思っている人

	1位	2位	3位
全 体	親 (78.7%)	きょうだい (71.7%)	子ども (66.1%)
男13～19歳	学校や学生時代の友人･知人 (91.7%)	親 (83.3%)	きょうだい (76.4%)
男20代	親 (85.2%)	学校や学生時代の友人･知人 (80.0%)	きょうだい (66.5%)
男30代	親 (93.2%)	きょうだい (71.4%)	配偶者 (60.9%)
男40代	親 (90.9%)	子ども (88.8%)	配偶者 (85.3%)
男50代	配偶者 (89.9%)	子ども (85.4%)	親 (80.4%)
男60代	配偶者 (91.2%)	子ども (89.1%)	きょうだい (67.2%)
男70～74歳	子ども (93.9%)	配偶者 (91.8%)	きょうだい (71.4%)
女13～19歳	親／学校や学生時代の友人･知人 (94.1%)		きょうだい (77.9%)
女20代	親 (92.6%)	学校や学生時代の友人･知人 (79.7%)	きょうだい (74.3%)
女30代	親 (93.5%)	学校や学生時代の友人･知人 (73.7%)	きょうだい (72.0%)
女40代	子ども (94.1%)	親 (91.2%)	配偶者 (83.1%)
女50代	子ども (94.9%)	配偶者 (84.6%)	親 (82.7%)
女60代	子ども (89.0%)	きょうだい (74.5%)	隣近所の友人･知人 (70.3%)
女70～74歳	子ども (89.1%)	隣近所の友人･知人 (78.2%)	きょうだい (74.5%)

■ 今後関係を深めたい人

	1位	2位	3位
全 体	子ども (48.9%)	配偶者 (45.2%)	学校や学生時代の友人･知人 (44.6%)
男13～19歳	学校や学生時代の友人･知人 (76.4%)	親 (36.1%)	きょうだい (30.6%)
男20代	学校や学生時代の友人･知人 (63.9%)	勤務先や仕事上の友人･知人 (43.9%)	親 (38.1%)
男30代	親 (49.5%)	子ども (42.2%)	配偶者／きょうだい (41.7%)
男40代	配偶者／子ども (56.6%)		親 (41.3%)
男50代	配偶者 (59.5%)	子ども (57.6%)	親 (43.7%)
男60代	配偶者 (63.5%)	子ども (60.6%)	きょうだい (39.4%)
男70～74歳	配偶者 (81.6%)	子ども (79.6%)	きょうだい／親戚 (57.1%)
女13～19歳	学校や学生時代の友人･知人 (83.8%)	親 (54.4%)	きょうだい (50.0%)
女20代	学校や学生時代の友人･知人 (66.2%)	親 (56.1%)	勤務先や仕事上の友人･知人 (44.6%)
女30代	親 (63.4%)	子ども (57.5%)	きょうだい (52.7%)
女40代	子ども (72.1%)	親 (58.8%)	配偶者 (58.1%)
女50代	子ども (64.7%)	配偶者 (55.8%)	親／きょうだい (48.7%)
女60代	子ども (70.3%)	配偶者 (57.2%)	きょうだい (56.6%)
女70～74歳	子ども (72.7%)	配偶者 (58.2%)	きょうだい (56.4%)

■ よりどころ

	1位	2位	3位
全 体	子ども (57.6%)	配偶者 (53.0%)	友人(幼なじみを除く) (50.2%)
男13～19歳	友人(幼なじみを除く) (68.1%)	親 (51.4%)	学校 (45.8%)
男20代	友人(幼なじみを除く) (60.0%)	親 (49.7%)	趣味･スポーツの集まり (32.9%)
男30代	配偶者 (53.1%)	子ども (47.9%)	親 (46.4%)
男40代	配偶者 (76.2%)	子ども (75.5%)	親 (43.4%)
男50代	配偶者 (82.3%)	子ども (74.1%)	親 (44.9%)
男60代	配偶者 (82.5%)	子ども (73.0%)	きょうだい (38.7%)
男70～74歳	配偶者／子ども (79.6%)		孫 (61.2%)
女13～19歳	友人(幼なじみを除く) (80.9%)	親 (61.8%)	きょうだい (48.5%)
女20代	親 (70.3%)	友人(幼なじみを除く) (69.6%)	きょうだい (42.6%)
女30代	親 (67.7%)	友人(幼なじみを除く) (61.3%)	子ども (60.8%)
女40代	子ども (89.0%)	配偶者 (67.6%)	友人(幼なじみを除く) (66.2%)
女50代	子ども (84.0%)	配偶者 (70.5%)	友人(幼なじみを除く) (56.4%)
女60代	子ども (81.4%)	配偶者 (56.6%)	孫／きょうだい (53.1%)
女70～74歳	子ども (87.3%)	孫 (70.9%)	配偶者 (65.5%)

（3）重視される地域のつきあい

コミュニティに対する態度を「住んでいる地域」「趣味の仲間やボランティア仲間」「職場」「インターネットを通じて」の 4 つのコミュニティについて、興味関心の程度、かかわりの程度、今後重視したい程度を「ある」「ややある」「あまりない」「ない」の 4 段階で尋ねた。図表 3－4 は、その回答を一覧にしたものである。

◇全体では、興味関心の程度は「趣味の仲間やボランティア仲間」が最も高いが、かかわりの程度と今後重視したい程度になると「住んでいる地域」のコミュニティが最も高くなる。

◇「住んでいる地域」については、女 30 代～70 代と男 50 代～70 代での興味関心、かかわり、今後重視したい度合が高い。地域については、若年層も極端に低いわけではないが、主婦層と高齢層の度合がより高い。また、「住んでいる地域」は、どの層においても興味関心、かかわりよりも、今後重視したい程度が高くなり、最も重要度の高いコミュニティになっている。

◇「趣味の仲間やボランティア仲間」については、女 30 代～70 代での興味関心、かかわり、今後重視したい度合が高い。男性は、70 代がやや高めである。「趣味の仲間やボランティア仲間」は、興味関心が高く、「住んでいる地域」に次ぐ重要度の高さになる。

◇「職場」については、男 20 代～50 代と女 20 代～50 代での興味関心、かかわり、今後重視したい度合が高い。当然のことながら現役世代になる。

◇「インターネットを通じて」については、男女 10 代～30 代の興味関心、かかわり、今後重視したい度合が高い。このコミュニティについての 40 代以降世代での興味関心、かかわり、重視度は現状では低位にとどまっている。

以上を概括すると、どの世代も「住んでいる地域」コミュニティに対する関心と重要性を感じている。実際のかかわりは、女 30 代以上と男性高齢者に限られており、今後、他の世代の参画が求められる。

図表 3-4：コミュニティに対する態度

〔4段階回答を加重平均〕

	興味関心の程度				かかわりの程度				今後重視したい程度			
	「住んでいる地域のコミュニティ」	「趣味やボランティアの仲間」のコミュニティ	「職場」のコミュニティ	「インターネットを通じて」のコミュニティ	「住んでいる地域のコミュニティ」	「趣味やボランティアの仲間」のコミュニティ	「職場」のコミュニティ	「インターネットを通じて」のコミュニティ	「住んでいる地域のコミュニティ」	「趣味やボランティアの仲間」のコミュニティ	「職場」のコミュニティ	「インターネットを通じて」のコミュニティ
全 体	2.51	2.57	2.33	1.79	2.21	2.17	2.11	1.41	2.70	2.64	2.34	1.59
男13～19歳	2.38	2.68	2.26	2.32	2.19	2.25	1.86	1.92	2.67	2.65	2.40	2.11
男20代	2.09	2.41	2.47	2.05	1.71	2.21	2.28	1.68	2.21	2.68	2.60	1.88
男30代	2.34	2.41	2.54	2.06	1.97	2.00	2.43	1.64	2.53	2.52	2.60	1.86
男40代	2.47	2.50	2.45	1.75	2.28	2.17	2.50	1.33	2.68	2.62	2.61	1.50
男50代	2.54	2.46	2.54	1.75	2.20	2.01	2.39	1.36	2.78	2.51	2.56	1.57
男60代	2.67	2.47	2.19	1.39	2.17	2.04	1.95	1.10	2.83	2.50	2.13	1.32
男70～74歳	3.04	2.92	2.02	1.43	2.90	2.63	1.71	1.12	3.16	2.98	1.78	1.29
女13～19歳	2.22	2.71	2.19	2.12	2.00	2.07	1.62	1.56	2.38	2.62	2.21	1.93
女20代	2.36	2.52	2.45	2.17	1.75	2.07	2.15	1.70	2.51	2.64	2.53	1.86
女30代	2.55	2.67	2.39	1.89	2.32	2.15	2.10	1.48	2.73	2.73	2.32	1.67
女40代	2.69	2.65	2.48	1.77	2.70	2.23	2.23	1.37	3.04	2.73	2.40	1.50
女50代	2.67	2.58	2.39	1.51	2.45	2.24	2.28	1.13	2.83	2.64	2.37	1.28
女60代	2.69	2.70	1.79	1.35	2.45	2.34	1.44	1.06	2.88	2.66	1.57	1.19
女70～74歳	2.96	2.96	1.65	1.27	2.45	2.53	1.40	1.05	2.80	2.95	1.67	1.22

注1：4段階回答の加重平均は、「興味関心がある/かかわっている/重視する」＝4、「やや興味関心がある/少しかかわっている/やや重視する」＝3、「あまり興味関心はない/あまりかかわっていない/あまり重視しない」＝2、「興味関心はない/かかわっていない/重視しない」＝1で算出した。
注2：網掛けは「全体」を上回るもの

２．地域コミュニティに対する意識と実態

（１）高齢者、子育て世代ほど必要度が高い地域の人々との交流

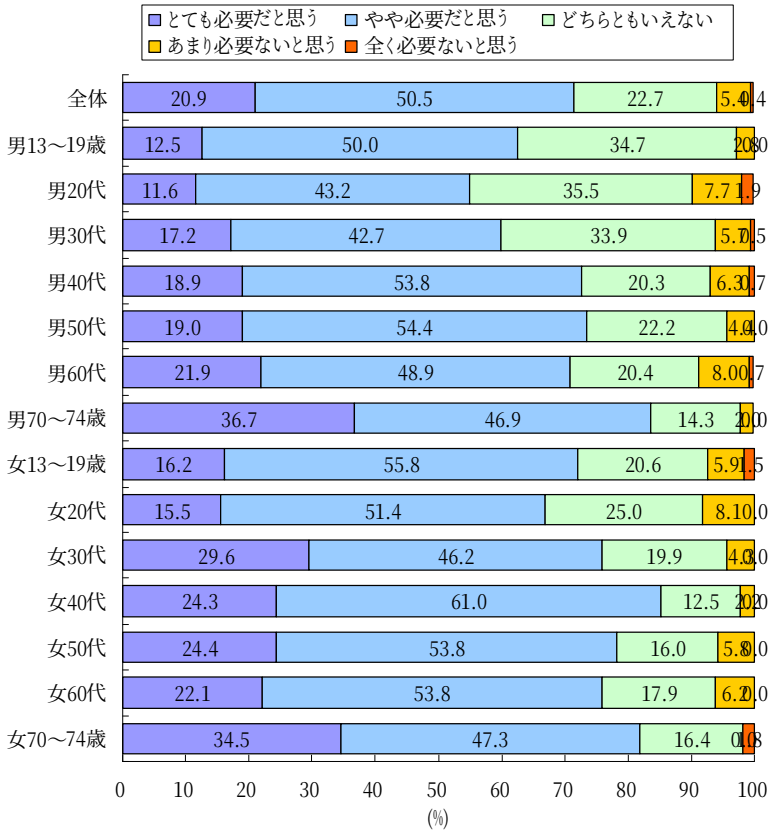
都市生活者が地域コミュニティの重要性を感じていることは、前節で確認された。それでは、地域の人々との交流についてはどのように考えているのだろうか。まず、地域の人々との交流の必要度を問うた。

◇全体では、「とても必要だと思う」20.9%、「やや必要だと思う」50.5%で、コミュニティの必要性を感じている人は、7割にのぼる。「必要ない」という回答は、5%にすぎない。

◇コミュニティの必要性について性年代の差は小さく、全世代に共通した認識となっている。

◇強いて言えば、男性は、年代が上がるほど交流の必要度は高まる。女性は、30代以降の年代で必要度が高い。男女70代は、交流の必要度を強く感じており、3人に1人以上が「とても必要だと思う」と回答している。

図表 3-5：地域の人々との交流の必要度



続いて、住んでいる地域の人々との交流が必要だと思う目的は何か、現状でうまくいっているものは何か、交流によりもっと機能してほしいものは何かを明らかにする。

① 住んでいる地域の人々との交流が必要だと思う目的

◇交流が必要だと思う目的は、「地域の防犯、治安の向上」（65.9%）、「いざという時の助け合い」(62.9%)、「災害時の対応」（58.1%）、「子どもを見守る地域の目としての役割」(55.9%)、「高齢者に対するサポート」(50.3%)が 50%以上の高いものである。都市生活者は、弱者に対するサポートを含む地域の防犯・安全確保と緊急時の対応が主な目的と考えている。

◇交流が必要だと思う目的の中でも、「地域の防犯、治安の向上」「いざという時の助け合い」「災害時の対応」は、どの層でも高い。「子どもを見守る地域の目としての役割」は、女 20 代～50 代、「高齢者に対するサポート」は 20 代以上の女性で高い。女性は、子どもや高齢者に対する意識が強い。

② 現状でうまくいっているもの

◇交流によりうまくいっているものは、「伝統文化、お祭りなどの継承や保存」（38.8%）、「地域や街の美化」（32.6%）、「住民同士の親睦、交流」（32.2%）などが高めで、参加型の地域イベントはうまくいっている。「地域の防犯、治安の向上」（30.8%）、「子どもを見守る地域の目としての役割」（27.8%）は、まだ向上させる余地がありそうだ。

◇交流によりうまくいっているものの中で、「伝統文化、お祭りなどの継承や保存」「地域や街の美化」「住民同士の親睦、交流」は、女 40 代～60 代で高い。

③ 交流によりもっと機能してほしいもの

◇交流によりもっと機能してほしいものは、「いざという時の助け合い」(35.1%)、「災害時の対応」(35.0%)、「高齢者に対するサポート」(33.4%)、「子どもを見守る地域の目としての役割」（31.8%）が高めである。都市生活者は、地域の安全向上、緊急時の対応力を高めるための交流が必要だと思っている。

◇交流によりもっと機能してほしいという意識が高いのは、女 40 代である。

都市生活者は、住んでいる地域の人々との交流が、地域の安全・安心のために必要なことで、もっと交流が必要であると考えている。特に、女性層での意識の高さ

が顕著である。これは、地域の安全・安心ニーズが高いことを意味している。安全・安心な地域づくりへの取り組みを活性化させていくためには、地域イベントでの交流を発展させていく道筋もあるだろう。

図表 3-6：住んでいる地域の人々との交流について

単位:％

	治安の向上、地域の防犯	高齢者に対するサポート（手助け等）	子育てに対するサポート（育児相談等）	子どもを見守る地域の目としての役割	住民同士の親睦、交流	地域や町の美化	リサイクル活動やごみ減量等環境対策	伝統文化、お祭りなどの継承や保存	スポーツ、趣味	生涯教育など学習機会獲得	災害時の対応	いざという時の助け合い
A. 交流が必要だと思う目的	65.9	50.3	55.9	39.5	43.9	40.6	33.5	38.3	25.5	22.4	58.1	62.9
B. 交流により、うまくいっているもの	30.8	18.7	27.8	18.4	32.2	32.6	29.6	38.8	26.7	18.2	19.1	22.1
C. 交流により、もっと機能してほしいもの	29.1	33.4	31.8	29.6	18.8	23.7	23.9	18.3	18.1	22.7	35.0	35.1
Bの達成度（B／A×100）	46.7	37.2	49.7	46.6	73.3	80.3	88.4	101.3	104.7	81.3	32.9	35.1
Cの達成度（C／A×100）	44.2	66.4	56.9	74.9	42.8	58.4	71.3	47.8	71.0	101.3	60.2	55.8

■ 交流が必要だと思う目的

単位:％

	治安の向上、地域の防犯	高齢者に対するサポート（手助け等）	子どもを見守る地域の目としての役割	子育てに対するサポート（育児相談等）	住民同士の親睦、交流	地域や町の美化	リサイクル活動やごみ減量等環境対策	伝統文化、お祭りなどの継承や保存	スポーツ、趣味	生涯教育など学習機会獲得	災害時の対応	いざという時の助け合い
全 体	65.9	50.3	55.9	39.5	43.9	40.6	33.5	38.3	25.5	22.4	58.1	62.9
男13～19歳	62.5	36.1	43.1	38.9	45.8	31.9	36.1	34.7	34.7	33.3	45.8	58.3
男20代	61.9	38.7	51.0	37.4	40.0	40.6	31.6	35.5	30.3	21.3	49.0	58.1
男30代	66.7	50.0	60.9	40.1	41.7	41.1	29.2	36.5	27.1	21.9	62.5	65.8
男40代	67.8	48.3	59.4	43.4	50.3	42.0	35.0	48.3	22.4	19.6	58.0	63.6
男50代	67.1	51.3	55.1	34.8	41.8	39.2	32.3	38.0	27.2	24.7	61.4	61.4
男60代	68.6	50.4	45.3	29.2	46.0	37.2	32.1	36.5	32.1	21.9	55.5	54.0
男70～74歳	65.3	42.9	46.9	32.7	53.1	59.2	40.8	32.7	34.7	30.6	57.1	69.4
女13～19歳	51.5	38.2	44.1	26.5	33.8	32.4	30.9	35.3	26.5	20.6	50.0	64.7
女20代	70.3	58.1	63.5	49.3	47.3	43.2	35.1	39.2	25.0	26.4	57.4	63.5
女30代	66.1	48.4	57.0	45.2	45.2	39.8	36.6	41.4	23.1	24.2	58.6	63.4
女40代	69.1	58.1	69.9	49.3	44.1	40.4	30.1	42.6	19.1	14.7	61.0	66.9
女50代	69.9	57.1	61.5	41.0	44.2	41.7	32.7	37.2	18.6	22.4	62.8	65.4
女60代	62.1	57.2	51.0	34.5	35.2	36.6	33.1	33.8	22.1	20.0	63.4	63.4
女70～74歳	61.8	56.4	49.1	34.5	58.2	54.5	47.3	38.2	25.5	20.0	56.4	69.1

注:網掛けは「全体＋5%」以上

■ 交流により、うまくいっているもの

単位：％

	治安の向上（地域の防犯、）	高齢者に対するサポート（手助け等）	子どもを見守る地域の目としての役割	子育てに対するサポート（育児相談等）	住民同士の親睦、交流の	地域や町の美化	リサイクル活動やごみ減量等環境対策	伝統文化、お祭りなどの継承や保存	スポーツ、趣味	生涯教育など学習機会獲得	災害時の対応	いざという時の助け合い
全 体	30.8	18.7	27.8	18.4	32.2	32.6	29.6	38.8	26.7	18.2	19.1	22.1
男13～19歳	23.6	22.2	22.2	23.6	29.2	30.6	27.8	31.9	30.6	20.8	26.4	26.4
男20代	20.6	15.5	20.6	17.4	25.8	21.9	21.9	28.4	27.7	21.3	23.9	22.6
男30代	29.2	19.8	24.5	16.1	28.6	30.2	28.1	34.4	25.0	16.7	15.6	18.8
男40代	28.7	16.8	28.7	16.8	27.3	36.4	28.0	41.3	28.0	16.8	18.2	21.7
男50代	30.4	15.2	28.5	20.3	29.1	31.6	31.6	31.0	30.4	20.3	21.5	19.6
男60代	33.6	21.9	26.3	19.0	35.0	36.5	38.0	38.7	24.8	12.4	19.0	20.4
男70～74歳	32.7	22.4	28.6	12.2	55.1	36.7	26.5	42.9	14.3	6.1	12.2	22.4
女13～19歳	32.4	13.2	20.6	10.3	30.9	25.0	23.5	41.2	26.5	13.2	13.2	20.6
女20代	29.7	14.9	21.6	14.9	27.0	24.3	23.0	40.5	20.3	16.2	15.5	25.0
女30代	35.5	24.2	37.1	30.6	37.1	34.4	25.3	41.4	27.4	22.0	19.4	24.2
女40代	39.7	19.9	44.9	26.5	40.4	35.3	27.9	50.0	25.7	19.1	22.8	27.9
女50代	34.0	14.7	30.1	12.8	31.4	42.3	34.6	42.9	26.9	17.3	19.9	19.9
女60代	30.3	22.1	24.8	14.5	38.6	39.3	43.4	42.8	33.1	21.4	15.2	20.7
女70～74歳	29.1	20.0	18.2	10.9	25.5	27.3	32.7	38.2	25.5	23.6	23.6	20.0

注：網掛けは「全体＋5%」以上

■ 交流により、もっと機能してほしいもの

単位：％

	治安の向上（地域の防犯、）	高齢者に対するサポート（手助け等）	子どもを見守る地域の目としての役割	子育てに対するサポート（育児相談等）	住民同士の親睦、交流の	地域や町の美化	リサイクル活動やごみ減量等環境対策	伝統文化、お祭りなどの継承や保存	スポーツ、趣味	生涯教育など学習機会獲得	災害時の対応	いざという時の助け合い
全 体	29.1	33.4	31.8	29.6	18.8	23.7	23.9	18.3	18.1	22.7	35.0	35.1
男13～19歳	22.2	23.6	23.6	15.3	11.1	19.4	19.4	18.1	15.3	12.5	27.8	19.4
男20代	24.5	22.6	21.9	20.0	12.9	19.4	17.4	13.5	14.2	13.5	21.9	25.8
男30代	30.2	28.6	32.3	29.2	17.7	25.0	22.9	18.2	22.4	23.4	32.8	31.3
男40代	31.5	32.2	36.4	33.6	20.3	21.7	24.5	16.8	15.4	21.0	36.4	36.4
男50代	27.2	36.7	30.4	33.5	24.7	28.5	31.0	20.9	20.9	25.3	29.1	31.0
男60代	28.5	32.8	32.1	25.5	20.4	22.6	19.7	19.0	19.0	27.0	38.0	37.2
男70～74歳	18.4	38.8	34.7	28.6	16.3	24.5	22.4	12.2	24.5	28.6	34.7	42.9
女13～19歳	25.0	30.9	22.1	20.6	14.7	20.6	19.1	13.2	13.2	16.2	23.5	27.9
女20代	35.8	31.1	35.8	33.8	17.6	20.3	18.9	20.3	14.2	17.6	36.5	35.1
女30代	32.3	32.8	34.4	32.8	16.1	24.7	28.0	19.4	17.2	22.0	40.9	39.8
女40代	38.2	40.4	37.5	36.8	27.2	34.6	33.8	26.5	19.9	33.1	44.1	45.6
女50代	25.0	38.5	29.5	32.7	17.3	23.1	24.4	14.1	17.9	26.9	41.0	39.1
女60代	26.9	44.8	34.5	31.7	22.8	25.5	24.8	21.4	20.0	24.8	40.7	39.3
女70～74歳	29.1	34.5	34.5	23.6	16.4	10.9	18.2	14.5	20.0	20.0	30.9	36.4

注：網掛けは「全体＋5%」以上

地域の安全・安心に対するニーズは、「住みたいと思う環境」という質問の回答からも読み取ることができる。図表 3-7 は、性年代別に高いものを整理したものである。どの層でも「治安のよいところに住みたい」が上位になっている。「治安のよさ」は、男 30 代～60 代では最も高い要件になっている。女性では「日常の買い物が便利」、高齢者では「医療環境のよいところ」が最も高く、日常生活を営む上で必要な施設の利便性が優先されるものの、「治安のよさ」はこれに次ぐ住環境要件になっている。

図表 3－7：住みたいと思う環境

	1位	2位	3位
全 体	治安のよいところに住みたい (67.9%)	日常の買い物に便利なところに住みたい (67.6%)	住み慣れた街･地域に住みたい (56.3%)
男13～19歳	通勤･通学便利なところに住みたい (51.4%)	治安のよいところに住みたい (50.0%)	駅に近いところに住みたい (48.6%)
男20代	通勤･通学便利なところに住みたい (70.3%)	治安のよいところに住みたい (54.8%)	住み慣れた街･地域に住みたい (51.6%)
男30代	治安のよいところに住みたい (57.8%)	通勤･通学便利なところに住みたい (56.3%)	住み慣れた街･地域に住みたい (54.7%)
男40代	治安のよいところに住みたい (62.9%)	日常の買い物に便利なところに住みたい (52.4%)	通勤･通学便利なところに住みたい (51.0%)
男50代	治安のよいところに住みたい (67.7%)	日常の買い物に便利なところに住みたい (59.5%)	住み慣れた街･地域に住みたい (51.9%)
男60代	治安のよいところに住みたい (72.3%)	住み慣れた街･地域に住みたい (65.7%)	日常の買い物に便利なところに住みたい (60.6%)
男70～74歳	医療環境のよいところに住みたい (67.3%)	住み慣れた街･地域に住みたい (65.3%)	自然が豊かなところに住みたい／日常の買い物に便利なところに住みたい (61.2%)
女13～19歳	通勤･通学便利なところに住みたい (69.1%)	日常の買い物に便利なところに住みたい (67.6%)	駅に近いところに住みたい (57.4%)
女20代	日常の買い物に便利なところに住みたい (78.4%)	治安のよいところに住みたい (70.3%)	通勤･通学便利なところに住みたい (66.9%)
女30代	日常の買い物に便利なところに住みたい (82.8%)	治安のよいところに住みたい (80.6%)	住み慣れた街･地域に住みたい (61.8%)
女40代	日常の買い物に便利なところに住みたい (82.4%)	治安のよいところに住みたい (80.1%)	住み慣れた街･地域に住みたい (62.5%)
女50代	日常の買い物に便利なところに住みたい (85.9%)	治安のよいところに住みたい (80.8%)	住み慣れた街･地域に住みたい (61.5%)
女60代	日常の買い物に便利なところに住みたい (80.7%)	治安のよいところに住みたい (69.7%)	住み慣れた街･地域に住みたい (64.1%)
女70～74歳	日常の買い物に便利なところに住みたい (83.6%)	治安のよいところ／医療環境のよいところ／住み慣れた街･地域 (70.9%)	

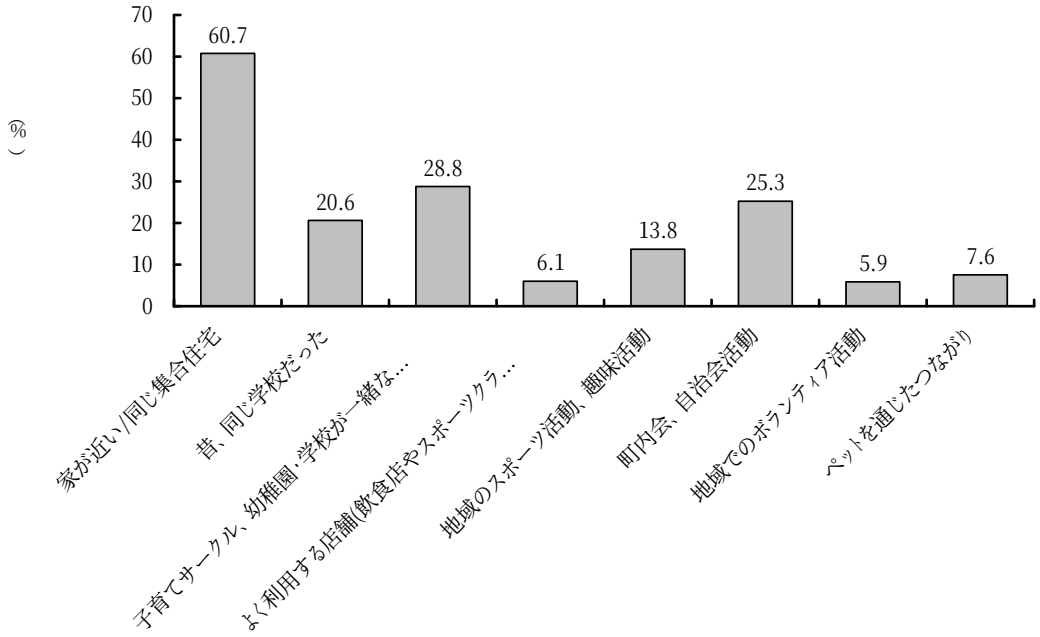
（2）地域の交流は日々の暮らしに必要なもの

では、地域の人々との交流は、どのような関係やつながりでできているのだろうか。最も多いのは、「家が近い／同じ集合住宅」（60.7%）で、近所づきあいが基本になっている。次いで多いのは、「子育てサークル、幼稚園、学校が一緒など子どもを通じた関係」（28.8%）で、子どもが交流の鍵になっている。子育て世代では、子

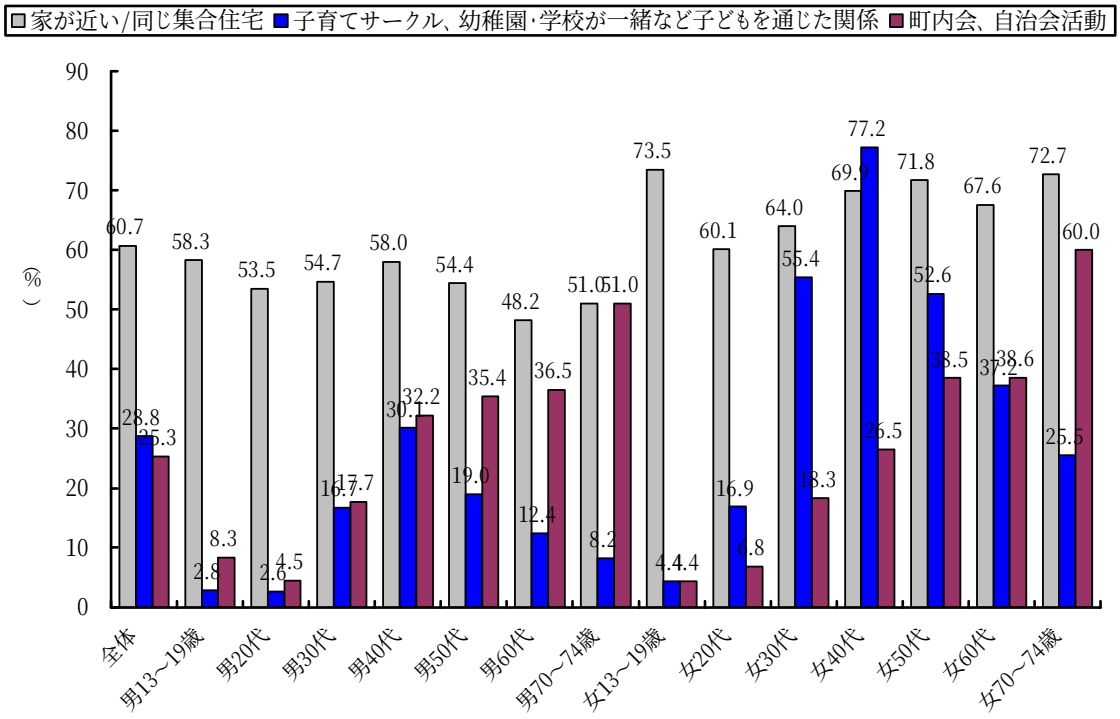
どもを中心とした母親同士の交流がある。また、「町内会、自治会活動」(25.3%)は、高齢者で高く、高齢者の活動の一助になっている。

図表 3-8：地域の交流要因

■ 地域交流の要因（対象者全体）



■性年代別地域交流の3大要因



地域の人々との交流は、「日々の暮らしに必要なもの」(47.0%)が最も高く、「気持ちや心を豊かにするもの」（31.2%)、「楽しいもの」（30.7%）が続く。「あまり関心のないもの」（22.7%）や「面倒くさい」(9.7%)は少数派である。交流は、地域住民の必要条件であるだけでなく、気持ちや心の豊かさ、楽しさがあるという心理的なプラスをもたらすものとして捉えられている。この傾向は、とりわけ女性と高齢者で顕著である。

図表 3-9：地域の人々との交流とは

単位：%

	必要なもの日々の暮らしに	楽しいもの	豊かにするもの気持ちや心を	わずらわしいもの面倒くさいもの、	ないものあまり関心の
全 体	47.0	30.7	31.2	9.7	22.7
男13～19歳	26.4	33.3	26.4	6.9	25.0
男20代	32.9	23.2	25.8	10.3	35.5
男30代	38.5	21.4	21.9	9.4	32.3
男40代	46.2	23.1	25.9	14.0	25.2
男50代	44.3	17.7	26.6	13.3	24.1
男60代	44.5	19.7	35.0	8.0	27.7
男70～74歳	65.3	34.7	46.9	8.2	12.2
女13～19歳	35.3	50.0	25.0	4.4	26.5
女20代	39.9	32.4	26.4	8.1	28.4
女30代	52.2	43.5	41.4	8.6	19.9
女40代	64.7	36.8	34.6	12.5	9.6
女50代	51.3	39.1	37.2	7.7	12.8
女60代	62.1	32.4	31.0	9.0	14.5
女70～74歳	63.6	47.3	49.1	10.9	7.3

注：網掛けは「全体＋5%」以上

３．社会意識と実態

（１）社会に対する不満と不平等感

社会に対する意識について、現在の社会に対する満足度から明らかにする。

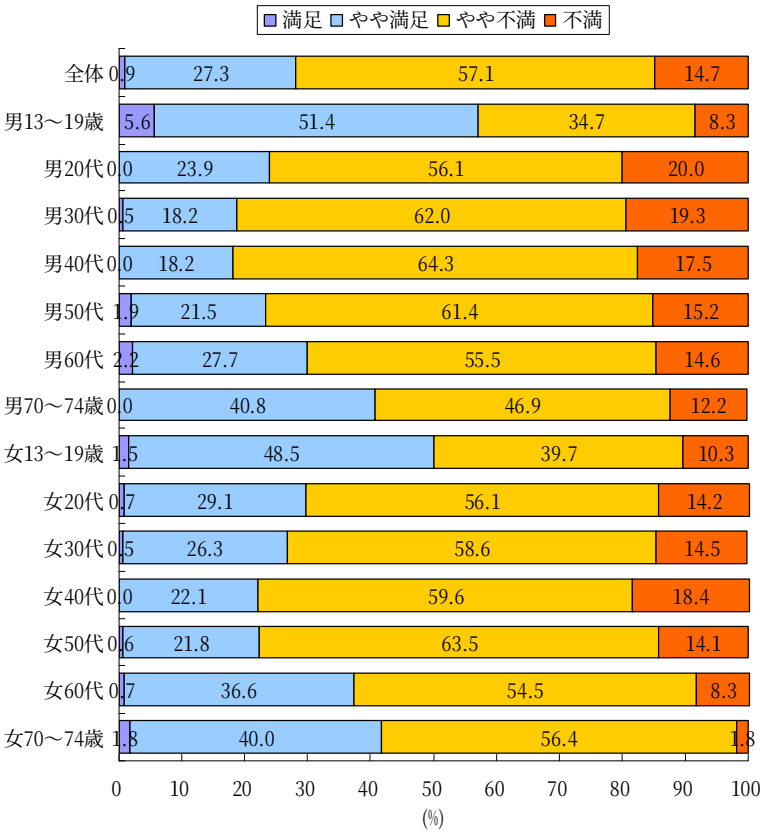
◇全体では、社会に対して「満足」と回答した人は、３割弱（28.1%）にとどまり、「やや不満」が 57.1%、「不満」14.7%で、不満が大勢を占めた。

◇10 代は、男女とも「満足」と「不満」が半々である。

◇20 代～70 代は、男女とも 20 代から 40 代・50 代にかけて満足度が下がり、その後高齢化するに従い満足度が上がる。とはいえ、高齢者でも「不満」が「満足」を上回る。

◇満足度が最も低い男 30 代・40 代の「満足」している人は、２割に満たない。同様に、女 40 代・50 代でもほぼ２割に過ぎない。現在の都市生活者の中でも、現役の子育て世代の満足度が最も低く、大半の人が不満を持っている状態にある。

図表 3－10：現在の「社会」満足度



図表 3-11 は、今の社会に対してそう思う程度をまとめたものである。その内容は、都市生活者が今の社会に対して「不満」に思っていることである。

◇全体でみると、都市生活者は今の社会について「格差が広がっている」「人に対する気づかいが希薄」「老いるのがますます辛い」「子どもを産み育てるのが難しい」「時間に追われる多忙な社会」と思う程度が強い。

◇満足度の低い男 30 代～40 代は、「格差が広がっている」「人に対する気づかいが希薄になっている」「時間に追われる多忙な社会」「子どもを産み育てるのが難しい」に加えて、「パソコンやケータイが使いこなせないと生きていけない」「弱者が報われなくなっている」と思う程度が強い。

◇満足度の低い女 40 代～50 代も、男 30 代～40 代と同じ傾向であるが、これに加えて、「夢や将来の展望が持ちにくくなっている」と思う程度が強い。

現役・子育て世代の社会に対する不満は、低成長経済の中で、弱者が報われない格差社会という見方をしており、多忙さと子どもを産み育てることの難しさを感じている。

図表 3－11：「今の社会」に対してそう思う程度

(5段階回答を加重平均)

	今の社会は、格差が広がっている	今の社会は、自由が失われているルール優先で個人の規則や	今の社会は、安心にお金をかけるようになっている	今の社会は、老いるのがますます辛くなっている	今の社会は、人に対する気づかいが希薄になっている	今の社会は、時間に追われる多忙な社会になっている	今の社会は、子どもを産み育てるのが難しくなっている	今の社会はパソコンやケータイが使いこなせないと生きていけない	今の社会は、夢や将来の展望が持ちにくくなっている	今の社会は、お金がすべての世の中になっている	今の社会は、個々人の個性が失われている	今の社会は、弱者が報われなくなっている
全 体	4.18	2.77	3.44	3.97	4.09	3.96	3.97	3.64	3.67	3.57	3.18	3.66
男13～19歳	3.83	3.00	3.24	3.39	3.54	3.79	3.40	4.10	3.33	3.75	3.17	3.50
男20代	3.97	3.08	3.43	3.79	3.97	3.95	3.82	3.77	3.58	3.46	2.99	3.46
男30代	4.16	2.80	3.58	3.91	4.04	4.05	3.98	3.74	3.54	3.57	3.12	3.61
男40代	4.27	2.67	3.56	3.99	4.21	4.03	4.08	3.65	3.66	3.62	3.16	3.73
男50代	4.23	2.87	3.60	4.02	4.21	3.92	3.92	3.53	3.78	3.58	3.37	3.73
男60代	4.31	2.80	3.47	4.03	4.12	3.79	3.92	3.14	3.78	3.64	3.36	3.69
男70～74歳	4.43	2.78	3.24	3.82	4.47	3.76	3.88	3.12	3.61	3.41	3.43	3.49
女13～19歳	3.72	3.19	3.38	3.90	3.96	3.93	3.59	3.94	3.79	3.63	3.26	3.71
女20代	4.19	2.70	3.31	3.93	4.08	4.11	4.10	3.97	3.73	3.55	3.07	3.76
女30代	4.25	2.82	3.56	4.13	4.10	4.12	4.06	3.91	3.59	3.57	3.03	3.53
女40代	4.29	2.70	3.57	4.07	4.19	4.12	4.21	3.79	3.71	3.49	3.03	3.68
女50代	4.30	2.35	3.40	4.18	4.11	3.95	4.08	3.39	3.73	3.54	3.19	3.72
女60代	4.17	2.66	3.20	3.95	4.04	3.72	4.00	3.28	3.78	3.50	3.31	3.67
女70～74歳	4.25	2.62	3.13	4.07	4.09	3.87	3.93	3.36	3.82	3.93	3.42	4.09

注1:5段階回答の加重平均は、「そう思う」＝5、「ややそう思う」＝4、「わからない」＝3、「あまりそう思わない」＝2、「そう思わない」＝1で算出した。
注2:網掛けは「全体」を上回るもの

それでは、世の中の平等・不平等意識とその内容(図表 3－12)はどのようなものか。

◇「世の中は平等」と回答した人は、全体で 2 割（20.3%）にとどまり、「どちらかといえば不平等」が 46.8%、「不平等だと思う」27.5%である。4 人中 3 人が「不平等」と感じている。
◇「不平等」感は、男女とも若い層ほど強い傾向がある。
◇不平等だと思うものは、「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」（65.7%）、「雇用や就職」（56.6%）、「税負担と受ける行政サービスの質・量」（53.9%）など、日々の生活に関するものが高く、「教育機会」（32.1%）や「資産」(27.8%)はさほど高くない。
◇「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」と「税負担と受ける行政サービスの質・量」については、男女とも 30 代以降の家族形成期以降の年代で高い。「雇用や就職」については、10 代～50 代の年代で高く、現役世代のみならず、これから社会人になる世代も不平等意識を抱いている。

次に、損をしている世代・世帯は、図表 3－13 にまとめたとおりである。

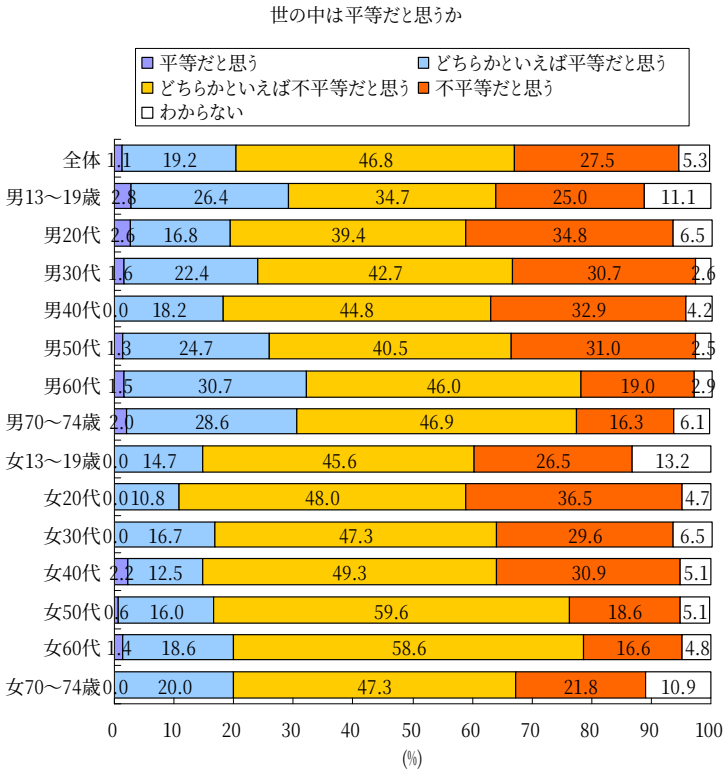
◇「損をしている世代」は、それぞれの世代で自らの世代が最も高くなる。誰もが、「自分が損をしている」と思っている。
◇「損をしている世帯」も、男 20 代～30 代が「単身世帯」、男 30 代～50 代と女 30 代・40 代が「子育て世代」と回答する率が高く、自らの世帯をあげている。

また、格差要因をどのように考えているのだろうか。図表 3－14 は、格差に対する意見を「本人の努力や能力不足」か「政治や社会制度の問題」かをきいた結果である。

◇「本人の努力や能力不足」と回答した人は 3 人に 1 人程度（32.4%）で、3 人中 2 人（67.6%）が「政治や社会制度の問題」と回答している。都市生活者は、現役世代・引退世代に関係なく、「政治や社会制度の問題」により格差が生じていると考えている。
◇「政治や社会制度の問題」は、年代が上がるに従って、やや高くなる傾向がある。
◇この考え方は、男性より女性で強い。

平等・不平等意識と損をしている世代・世帯、格差要因を通してみると、都市生活者が、自らの生活における利益を基準にして、個人の努力や能力よりも政治や社会制度の問題によって不平等な社会が形成されていると思っていることがわかる。

図表 3－12：平等・不平等意識と不平等だと思うもの



■ 不平等だと思うもの　　単位：%

	年金・健康保険などの社会保障の負担と給付	税負担と受けるサービスの質・量の行政	雇用や就職	教育機会	資産
全 体	65.7	53.9	56.6	32.1	27.8
男13～19歳	31.9	19.4	52.8	34.7	26.4
男20代	55.5	40.6	58.7	23.2	38.7
男30代	71.9	56.8	57.8	30.2	28.6
男40代	67.1	53.8	48.3	32.9	28.0
男50代	67.7	65.8	63.3	31.0	31.0
男60代	65.0	54.7	40.9	23.4	19.7
男70～74歳	75.5	55.1	42.9	22.4	34.7
女13～19歳	39.7	32.4	60.3	29.4	26.5
女20代	59.5	48.0	69.6	32.4	32.4
女30代	72.6	57.5	56.5	43.5	26.3
女40代	65.4	56.6	61.8	44.1	30.1
女50代	73.7	60.3	68.6	37.2	20.5
女60代	79.3	66.2	49.0	24.8	25.5
女70～74歳	69.1	61.8	40.0	29.1	14.5

注：網掛けは「全体＋5%」以上

図表 3－13：損をしていると思う年代・世帯

■ 損をしていると思う年代

単位：%

	19歳以下	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	年代はない 損をしている	わからない
全 体	17.1	31.9	37.8	33.6	22.7	12.5	6.5	1.7	24.7
男13～19歳	19.4	25.0	18.1	19.4	12.5	4.2	4.2	-	51.4
男20代	25.2	52.3	34.8	20.0	14.2	9.0	7.1	0.6	28.4
男30代	28.6	38.5	64.6	32.3	10.9	8.9	6.3	1.6	13.0
男40代	21.0	29.4	37.8	60.8	21.0	8.4	5.6	1.4	15.4
男50代	19.0	32.9	31.6	39.9	51.3	7.6	4.4	2.5	16.5
男60代	13.1	21.2	29.9	24.1	22.6	32.1	4.4	5.1	19.0
男70～74歳	4.1	24.5	26.5	34.7	20.4	10.2	26.5	10.2	24.5
女13～19歳	19.1	20.6	17.6	20.6	16.2	7.4	10.3	1.5	54.4
女20代	20.9	52.0	36.5	23.6	16.2	6.1	7.4	-	32.4
女30代	14.5	27.4	57.0	31.7	16.1	8.6	3.2	1.1	25.3
女40代	17.6	27.2	36.8	55.9	14.7	4.4	4.4	-	24.3
女50代	9.0	28.8	31.4	35.9	51.3	17.3	3.2	1.3	24.4
女60代	6.2	26.2	33.8	31.7	20.7	33.8	4.1	1.4	24.8
女70～74歳	1.8	9.1	20.0	20.0	18.2	10.9	29.1	3.6	25.5

注：網掛けは「全体＋5%」以上

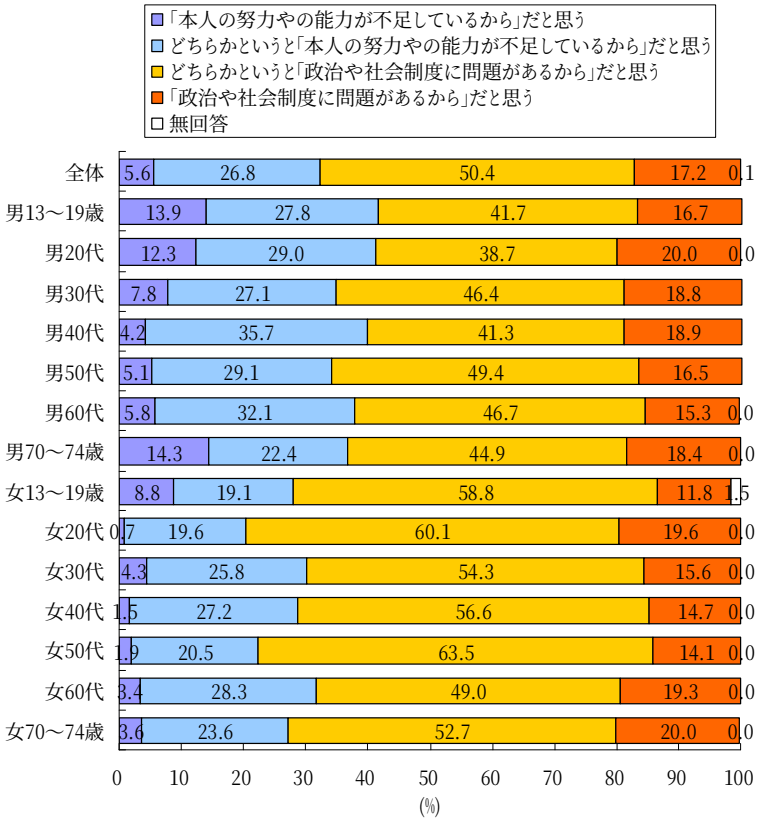
■ 損をしていると思う世帯

単位：%

	単身世帯	夫婦のみの世帯（共働き）	夫婦のみの世帯（専業主婦）	子育て世代（共働き）	子育て世代（専業主婦）	子育て世代（母子・父子）	親の同居世帯 成人の子どもと	世帯はない 損をしている	わからない
全 体	27.4	20.8	11.8	19.0	15.8	14.2	14.4	1.2	33.3
男13～19歳	5.6	5.6	4.2	8.3	5.6	2.8	2.8	-	75.0
男20代	33.5	20.0	10.3	14.8	9.7	9.0	20.0	0.6	40.0
男30代	33.9	24.5	12.0	25.0	18.8	19.8	13.0	2.1	20.8
男40代	28.7	23.8	9.8	28.7	27.3	16.8	7.7	0.7	23.1
男50代	30.4	24.7	8.9	24.7	21.5	23.4	16.5	1.9	19.6
男60代	27.7	17.5	10.9	21.9	15.3	13.9	13.9	4.4	27.7
男70～74歳	36.7	16.3	8.2	30.6	12.2	20.4	18.4	2.0	30.6
女13～19歳	4.4	2.9	2.9	4.4	2.9	7.4	7.4	-	83.8
女20代	20.9	16.2	14.2	15.5	12.8	14.2	18.2	0.7	46.6
女30代	29.6	24.7	10.2	19.4	22.0	14.5	12.4	0.5	30.6
女40代	25.0	24.3	18.4	21.3	23.5	11.8	18.4	-	24.3
女50代	30.1	28.8	19.9	14.1	11.5	11.5	23.1	-	25.6
女60代	32.4	21.4	16.6	11.7	8.3	11.0	11.7	1.4	33.8
女70～74歳	20.0	10.9	3.6	18.2	10.9	16.4	7.3	3.6	40.0

注：網掛けは「全体＋5%」以上

図表 3－14：格差に対する意見



（2）望まれる社会福祉の充実

前項で、「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」と「税負担と受ける行政サービスの質・量」が、「不平等」感につながっていることが明らかにされている。社会福祉や年金と税金の負担について次の3つの選択肢で尋ねた。

ａ．社会福祉や年金の水準が多少低下しても、税金などの負担は軽いほうがよい
ｂ．税金などの負担が多少増えても、社会福祉や年金の水準をあげたほうがよい
ｃ．社会福祉や年金の水準はあげてほしいが、税金などの負担が増えるなら今と同じ程度でよい

結果は、次のようになった。

◇ｃの「水準をあげてほしいが負担増を伴うなら現状で良い」という意見は、全体で46.6%と最も多い。
◇ｂの「負担増になっても水準をあげるべき」という意見を支持する人は、全体で40.7%である。どの年代のおいても、男性の支持率が女性のそれを上回る。
◇ａの「負担の軽さ」を支持する人は、全体で12.4%と少数派で、若い層ほど高い。

都市生活者は、社会福祉や年金がより高い水準になることを望んでいる。その実現のためには、同じ負担で済めばこれに越したことはないが、負担増もやむをえないという考え方を持っている。

では、公共の利益と個人の自由・犠牲との兼ね合いはどのようになっているのだろうか。図表3-16は、次の2つの質問で公共の利益の達成に対する個人の自由のあり方を訊いた結果である。

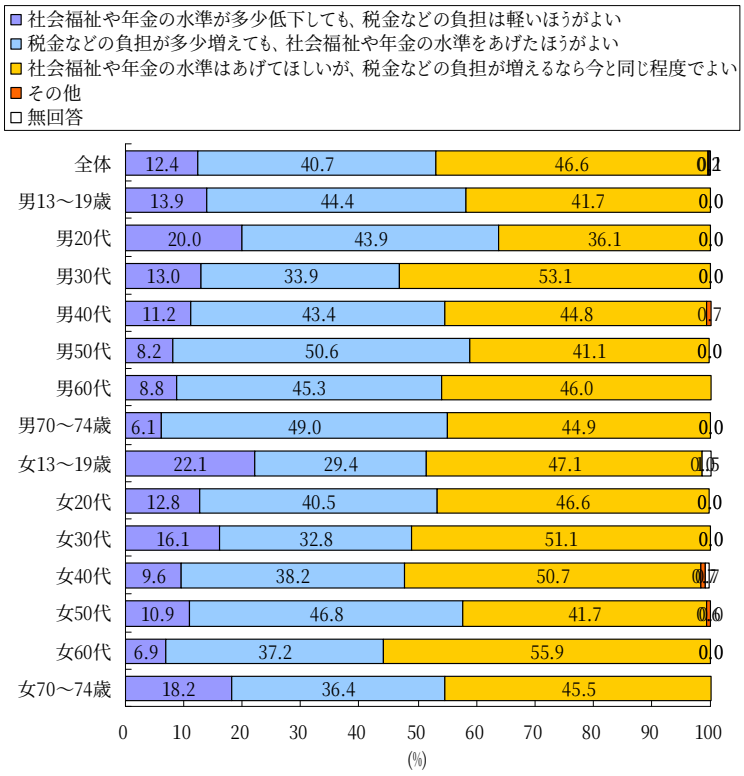
ａ．公共の利益を達成するためには、個人の自由はある程度制限されてもよい
ｂ．個人の自由を犠牲にしてまで、公共の利益を求めるのは望ましくない

結果は、次のようになっている。

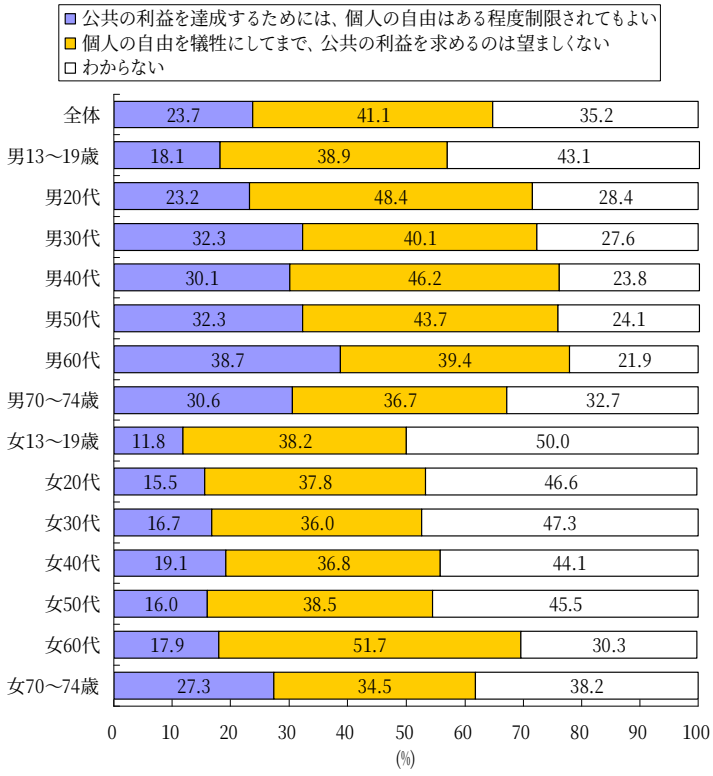
◇ｂの意見の支持率は、全体で41.1%とａの23.7%を大きく上回った。
◇ａの「公共の利益の達成を優先」する意見に対しては、女性より男性での支持率が高く、年代が上がるほど高くなる傾向を示している。

都市生活者にとって、個人の自由を犠牲にした公共の利益は成り立ちにくい。公共の利益は、個人の犠牲の上に成り立つのではなく、むしろ個人の利益につながることが必要条件になっている。自分が報いられることが前提となる。この背景には、年金問題に対する不安感があると考えられる。

図表 3－15：社会福祉や年金と税金の負担についての考え方



図表 3－16：公共の利益と個人の自由についての考え方



（3）近未来社会と不安

近未来の日本の社会予想についてどのように思っているかを知るために、25の事項を提示し、それぞれに対して「なると思う」か否かを問うた。図表3-17は、「なると思う」回答順に並べた表である。

近未来の日本の社会予想で高いものは、次のように3つのグループに集約される。これらは、性年代を問わず共通した認識になっている。

ａ．世帯構成の変化
「一人暮らしの高齢者が増えた」社会
「未婚者が増加し、晩婚化が一層進んだ」社会
「子どものいない家庭が増えた」社会

ｂ．活力の低下と負担の増大
「高齢化と人口の減少による活力が低下」した社会
「不況や失業が慢性化」した社会
「税金や社会保障費負担の高い」社会

ｃ．情報化の進展と環境問題
「いつでも・どこでも世界とつながる情報化」社会
「地球温暖化など環境問題が一層深刻化」した社会
「循環型社会」

反対に、「ならないと思う」ものは、次のようなものである。

ｄ．安定とゆとり
「経済的に豊か」な社会
「安定した収入や雇用が見込める」社会
「余暇が増大し、皆が思い思いの楽しみを味わえる」社会

ｅ．安心・安全な社会
「安心して子どもを産み育てることのできる」社会
「道徳や規律・責任が重んじられている」社会
「暮らしている人同士の協力や助け合いが盛ん」な社会
「災害や犯罪に強い安全で安心して暮らせる」社会

ｆ．自分らしい暮らし
「経済的ゆとりがなくても、自分らしい暮らしのできる」社会

「なると思う」と「ならないと思う」をまとめると、都市生活者は、人口動態や世帯構成の変化、経済環境の変化、情報化社会、環境問題などへの認識を持っており、安心・安全な社会形成や自分らしさを求めることに対して、とても悲観的な見方をしていることがわかる。経済的・時間的ゆとりがなくなる社会の中で、精神的ゆとりまでもがなくなると思い込んでいるようだ。

一方、日ごろ不安に感じていることは、経済的なことが最も多い。

◇全体の 6 割(59.8%)の人が「収入」と回答、「景気・株価」（41.4%）、「年金制度」（40.8%）が続く。
◇10 代が最も不安に感じていることは「進学・受験」で、「地震・台風・洪水などの自然災害」がこれに次ぐ。
◇20 代～50 代が最も不安に感じていることは「収入」で、それぞれの層で 70%前後にのぼる。
◇60 代～70 代になると、「高齢者医療制度」や「年金制度」「福祉・介護保険」に対する不安が上位になる。
◇20 代～50 代の「収入」以外の不安は、性年代により異なる。生活を安定化させるステージにある男 20 代～30 代では、「雇用」と「景気・株価」、子育て期にある男 40 代では、「子どもの将来」と「景気・株価」、老後を意識する男 50 代では、「年金制度」と「景気・株価」になる。
◇20 代～50 代の女性の「収入」以外の不安は、20 代では「景気・株価」「異常気象」「雇用」で、30 代～40 代になると、「子どもの将来」になり、50 代では、「老後の生活設計」と「親の介護」があげられている。男性と同様に、不安な点はライフステージごとに異なっている。50 代の老後への不安も同様だが、その内容は男性が経済的なものであるのに対し、女性は生活設計になっている。

ここ 1～2 年の減収が家計に与えた影響の大きさも否めないが、都市生活者は、不安定な経済環境の中で、生活の基盤になる「収入」と「将来の生活設計」「子どもの将来」「親の介護」に不安を抱えている。

図表３－17：近未来（10年後くらい）の日本の社会予想（「そう思う」順）

（3段階回答を加重平均）

	増えた社会 一人暮らしの高齢者が	が一層進んだ社会 未婚者が増加し、晩婚化	増えた社会 子どものいない家庭が	負担の高い社会 税金や社会保障費	よる活力低下した社会 高齢化と人口の減少に	とつながる情報化社会 いつでも・どこでも世界	が一層深刻化した社会 地球温暖化など環境問題	慢性化した社会 不況や失業が	循環型社会	一緒に働く社会 外国人と一緒に暮らし	深刻化した社会 エネルギー不足が	大切にする社会 自然や環境を
全 体	2.86	2.74	2.70	2.59	2.56	2.49	2.49	2.43	2.17	2.17	2.11	2.10
男13～19歳	2.74	2.43	2.56	2.47	2.38	2.61	2.24	2.40	2.26	2.35	2.00	2.36
男20代	2.78	2.65	2.61	2.55	2.54	2.51	2.34	2.37	2.04	2.15	2.11	1.97
男30代	2.83	2.78	2.71	2.62	2.59	2.49	2.39	2.46	2.13	2.06	2.04	2.16
男40代	2.96	2.82	2.83	2.66	2.66	2.53	2.49	2.56	2.19	2.23	2.15	2.13
男50代	2.87	2.72	2.74	2.66	2.61	2.49	2.49	2.45	2.11	2.06	2.06	2.06
男60代	2.91	2.77	2.73	2.57	2.64	2.27	2.49	2.42	2.20	2.02	2.17	1.96
男70～74歳	2.92	2.80	2.69	2.73	2.67	2.51	2.47	2.37	2.14	2.04	2.02	2.10
女13～19歳	2.75	2.65	2.66	2.38	2.47	2.60	2.50	2.43	2.16	2.35	2.22	2.01
女20代	2.82	2.73	2.69	2.56	2.57	2.47	2.64	2.54	2.16	2.27	2.29	2.15
女30代	2.88	2.73	2.66	2.66	2.53	2.53	2.53	2.39	2.23	2.30	2.13	2.19
女40代	2.88	2.79	2.71	2.57	2.60	2.51	2.59	2.45	2.29	2.23	2.18	2.25
女50代	2.92	2.79	2.70	2.62	2.42	2.54	2.54	2.37	2.21	2.20	1.99	2.10
女60代	2.84	2.77	2.73	2.45	2.52	2.41	2.52	2.30	2.13	2.13	2.09	1.96
女70～74歳	2.87	2.82	2.71	2.56	2.60	2.35	2.58	2.36	2.02	1.96	2.07	1.98

注1：3段階回答の加重平均は、「なると思う」＝3、「ならないと思う」＝1、「わからない」＝2で算出した。注2：網掛けは、「2」以上

（3段階回答を加重平均）

	食べるのが大変な社会 食糧不足が深刻化し、	た教育を選択できる社会 本人の能力や目標に応じ	両立できる社会 仕事と子育てが	行動する社会 地域の人が解決に向け 地域の問題は、	優しい社会 高齢者や障害者に	できる社会 自分らしい暮らしの 経済的ゆとりがなくても	暮らせる社会 安全で安心して 災害や犯罪に強い	盛んな社会 協力や助け合いが 暮らしている人同士の	できる社会 産み育てることの 安心して子どもを	重んじられている社会 道徳や規律・責任が	味わえる社会 皆が思い思いの楽しみを 余暇が増大し、	雇用が見込める社会 安定した収入や	経済的に豊かな社会
全 体	1.95	1.79	1.76	1.74	1.71	1.65	1.62	1.61	1.58	1.51	1.38	1.32	1.30
男13～19歳	1.82	2.03	1.96	1.94	2.08	1.83	1.94	1.90	1.86	1.94	1.57	1.60	1.67
男20代	1.90	1.68	1.66	1.59	1.74	1.65	1.59	1.53	1.56	1.46	1.32	1.36	1.32
男30代	1.89	1.80	1.64	1.74	1.77	1.58	1.56	1.56	1.50	1.51	1.42	1.34	1.31
男40代	2.01	1.68	1.52	1.62	1.59	1.48	1.48	1.43	1.38	1.42	1.33	1.16	1.16
男50代	1.99	1.67	1.66	1.65	1.49	1.51	1.58	1.50	1.53	1.36	1.31	1.27	1.28
男60代	2.12	1.75	1.67	1.79	1.47	1.62	1.55	1.59	1.53	1.41	1.32	1.28	1.22
男70～74歳	2.02	1.76	1.65	1.69	1.43	1.76	1.55	1.59	1.61	1.47	1.45	1.33	1.24
女13～19歳	1.82	2.00	2.03	1.75	2.07	1.90	1.93	1.76	1.85	1.93	1.49	1.44	1.47
女20代	1.94	1.83	1.86	1.64	1.86	1.68	1.62	1.63	1.61	1.59	1.38	1.32	1.30
女30代	1.80	1.84	1.89	1.80	1.88	1.71	1.70	1.63	1.60	1.53	1.39	1.28	1.27
女40代	1.96	1.90	1.92	1.92	1.79	1.65	1.69	1.71	1.61	1.53	1.37	1.30	1.29
女50代	1.88	1.77	1.79	1.73	1.62	1.67	1.56	1.63	1.58	1.46	1.33	1.28	1.26
女60代	2.09	1.82	1.75	1.83	1.59	1.74	1.57	1.68	1.63	1.50	1.43	1.35	1.29
女70～74歳	2.04	1.80	1.93	1.75	1.53	1.60	1.56	1.75	1.65	1.44	1.44	1.38	1.35

注1：3段階回答の加重平均は、「なると思う」＝3、「ならないと思う」＝1、「わからない」＝2で算出した。注2：網掛けは、「2」以上

図表 3－18：不安点

	1位	2位	3位
全 体	収入 (59.8%)	景気･株価 (41.4%)	年金制度 (40.8%)
男13～19歳	進学･受験 (52.8%)	地震･台風･洪水などの自然災害 (40.3%)	環境問題 (37.5%)
男20代	収入 (64.5%)	雇用 (49.0%)	景気･株価 (46.5%)
男30代	収入 (72.9%)	雇用 (40.6%)	景気･株価 (40.1%)
男40代	収入 (69.2%)	子どもの将来 (48.3%)	景気･株価 (47.6%)
男50代	収入 (72.2%)	年金制度 (51.9%)	景気･株価 (47.5%)
男60代	年金制度 (51.8%)	収入 (47.4%)	高齢者医療 (46.7%)
男70～74歳	高齢者医療 (71.4%)	福祉･介護保険 (51.0%)	年金制度 (49.0%)
女13～19歳	進学･受験 (52.9%)	地震･台風･洪水などの自然災害 (45.6%)	犯罪･通り魔･暴力 (38.2%)
女20代	収入 (69.6%)	景気･株価／異常気象 (50.0%)	
女30代	収入 (75.3%)	子どもの将来 (51.1%)	景気･株価 (46.2%)
女40代	収入 (74.3%)	子どもの将来 (60.3%)	親の介護 (58.1%)
女50代	収入 (64.1%)	年金制度 (58.3%)	老後の生活設計 (55.8%)
女60代	高齢者医療 (55.2%)	年金制度 (53.8%)	食の安心･安全／異常気象 (45.5%)
女70～74歳	高齢者医療 (70.9%)	福祉･介護保険 (54.5%)	異常気象 (52.7%)

（４）環境意識の高まり

環境意識について、①関心の高いもの、②環境問題についての意識・行動を明らかにし、③環境のためにしていることを整理する。

① 関心の高いもの

「地球温暖化」が全体で 82.3％と最も高く、「環境汚染（大気汚染・海洋汚染・土壌汚染など）」（61.0％）、「森林の減少などの自然破壊」（59.8%）が続く。性年代別でもこの傾向は変わらないが、年代が上がるほどスコアが高くなる傾向がある。

② 環境問題についての意識・行動

環境問題について上位にあげられることは、全体で「地球温暖化は切実な問題だと感じている」(75.9％)、「環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う」(65.0%)、「次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う」(54.0%)になっている。関心に準じた内容で、個人としての取り組み意識も高い。

ここでも、“地球温暖化”が最も高く、関心の高いものと同じ内容になっている。

③ 環境のためにしていること

環境のためにしていることは、「中味詰替え商品を買っている」(75.6％)、「電気をこまめに消している」(62.8%)、「紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる」(60.8%)が上位にあげられている。女性と一部の男性では、「買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する」もあげられている。

資源やエネルギーを大切にするための行動が、都市生活者に浸透している。

「地球温暖化」に代表される環境問題への関心や意識は、ここ数年のマスコミ報道などにより、どの世代にも環境問題や環境用語が浸透している結果とみることができるが、その意識は高い水準にあるといえよう。また、日常生活においては、省エネやリサイクルへの取り組みが定着している。

図表 3－19：環境に関する意識・行動

①環境問題や環境用語の中で関心が高いもの

	1位	2位	3位
全 体	地球温暖化 (82.3%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (61.0%)	森林の減少などの自然破壊 (59.8%)
男13～19歳	地球温暖化 (77.8%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (41.7%)	森林の減少などの自然破壊 (36.1%)
男20代	地球温暖化 (67.1%)	森林の減少などの自然破壊 (40.6%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (40.0%)
男30代	地球温暖化 (70.3%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (56.3%)	森林の減少などの自然破壊 (52.6%)
男40代	地球温暖化 (81.1%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (60.8%)	森林の減少などの自然破壊 (60.1%)
男50代	地球温暖化 (81.0%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など）／森林の減少などの自然破壊 (57.6%)	
男60代	地球温暖化 (86.9%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (71.5%)	森林の減少などの自然破壊 (67.2%)
男70～74歳	地球温暖化 (89.8%)	森林の減少などの自然破壊 (83.7%)	産業廃棄物の処理 (71.4%)
女13～19歳	地球温暖化 (85.3%)	森林の減少などの自然破壊 (47.1%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (41.2%)
女20代	地球温暖化 (82.4%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (57.4%)	森林の減少などの自然破壊 (55.4%)
女30代	地球温暖化 (83.3%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (63.4%)	森林の減少などの自然破壊 (61.3%)
女40代	地球温暖化 (86.0%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (75.7%)	森林の減少などの自然破壊 (66.2%)
女50代	地球温暖化 (89.7%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (68.6%)	森林の減少などの自然破壊 (67.9%)
女60代	地球温暖化 (95.2%)	森林の減少などの自然破壊 (77.2%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (72.4%)
女70～74歳	地球温暖化 (90.9%)	環境汚染（大気汚染･海洋汚染･土壌汚染など） (76.4%)	森林の減少などの自然破壊 (74.5%)

②環境問題についての意識･行動

	1位	2位	3位
全 体	地球温暖化は切実な問題だと感じている (75.9%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (65.0%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (54.0%)
男13～19歳	地球温暖化は切実な問題だと感じている (61.1%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (47.2%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (36.1%)
男20代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (51.0%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (45.8%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (32.3%)
男30代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (70.3%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (55.2%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (49.0%)
男40代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (80.4%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (69.9%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (58.0%)
男50代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (78.5%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (63.9%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (58.9%)
男60代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (81.8%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (67.9%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (59.9%)
男70～74歳	地球温暖化は切実な問題だと感じている (89.8%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (73.5%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う／環境問題のためには、企業や産業による努力が必要だと思う／環境問題解決のためには、国や地方自治体による法整備や規制が必要だと思う (71.4%)
女13～19歳	地球温暖化は切実な問題だと感じている (63.2%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (60.3%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (36.8%)
女20代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (74.3%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (64.9%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (52.0%)
女30代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (73.1%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (67.7%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (53.8%)
女40代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (81.6%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (74.3%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (66.6%)
女50代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (83.3%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (78.8%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (59.0%)
女60代	地球温暖化は切実な問題だと感じている (89.7%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (73.1%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (62.8%)
女70～74歳	地球温暖化は切実な問題だと感じている (96.4%)	環境問題に対して、個人レベルでも努力すべきだと思う (65.5%)	次の世代のために、環境問題に取り組むべきだと思う (61.8%)

③環境のためにしていること

	1位	2位	3位
全 体	中味詰替え商品を買っている (75.6%)	電気をこまめに消している (62.8%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (60.8%)
男13～19歳	中味詰替え商品を買っている (47.2%)	冷房や暖房は控えめにしている (41.7%)	電気をこまめに消している (40.3%)
男20代	中味詰替え商品を買っている (54.8%)	電気をこまめに消している (47.1%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (38.7%)
男30代	中味詰替え商品を買っている (66.1%)	電気をこまめに消している (56.3%)	冷房や暖房は控えめにしている (49.5%)
男40代	中味詰替え商品を買っている (80.4%)	電気をこまめに消している (68.5%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (63.6%)
男50代	中味詰替え商品を買っている (76.6%)	電気をこまめに消している (62.0%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (61.4%)
男60代	中味詰替え商品を買っている (68.6%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (67.2%)	電気をこまめに消している (64.2%)
男70～74歳	電気をこまめに消している (81.6%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (79.6%)	中味詰替え商品を買っている (73.5%)
女13～19歳	中味詰替え商品を買っている (61.8%)	電気をこまめに消している (55.9%)	買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する (54.4%)
女20代	中味詰替え商品を買っている (75.7%)	電気をこまめに消している (62.2%)	買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する／紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (52.0%)
女30代	中味詰替え商品を買っている (88.7%)	電気をこまめに消している (65.6%)	買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する (64.0%)
女40代	中味詰替え商品を買っている (87.5%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (75.7%%)	電気をこまめに消している (72.8%)
女50代	中味詰替え商品を買っている (90.4%)	買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する／紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (75.6%)	
女60代	中味詰替え商品を買っている (84.1%)	買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する (80.7%)	紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (80.0%)
女70～74歳	中味詰替え商品を買っている／紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる (85.5%)		買い物に行く際は、エコバッグ等を持参する (78.2%)

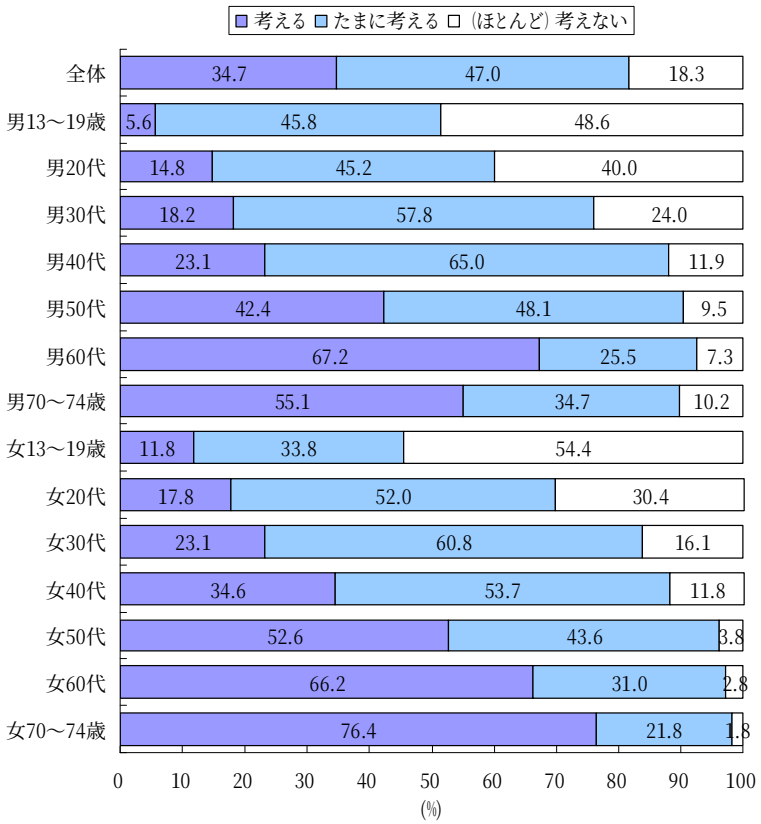
４．都市生活者と老後

（１）「老後」を意識しはじめる 50 代

50 代になると老後を意識し始めるということは、これまでの生活意識の分析結果からも見えてきている。ここでは、「老後について考えるかどうか」という質問に対する結果から検証する。

「老後について考える」と回答した人は、40 代から 50 代にかけて、男性 23.1%⇒42.4%、女性 34.6%⇒52.6%と急激に高まる。この結果からも、老後を意識し始める年齢は 50 代とみることができる。また、男性よりも女性のほうが老後を意識し始める時期が早い傾向にある。

図表 3－20：老後について考えるかどうか



（2）老後は旅行を楽しんだり、のんびりと過ごしたい

老後にしたいことの第1位は、性年代を問わず「国内旅行に行きたい」である。2位、3位は、「海外旅行」「夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい」「孫の成長を見守りたい」である。

60代以上の年代では、「孫の成長を見守りたい」があがる。また、男性が「夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい」「海外旅行」で、“夫婦”に向かうのに対し、女性は「海外旅行」「孫の成長を見守りたい」で、女性は夫よりも孫の成長へと目が向いている。

図表3－21：老後にしたいこと(20歳以上のみ)

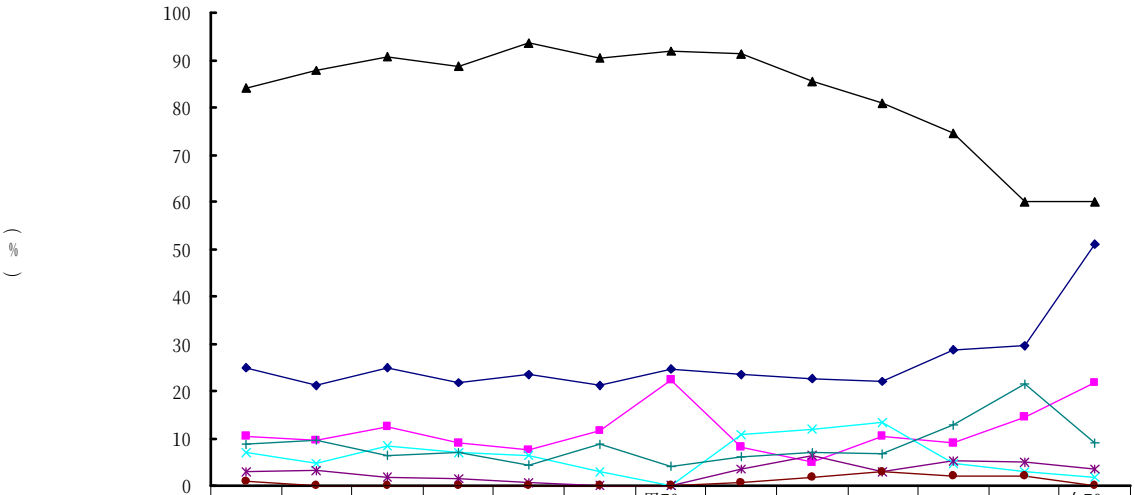
	1位	2位	3位
全体	国内旅行に行きたい (62.7%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (46.0%)	海外旅行に行きたい (42.7%)
男20代	国内旅行に行きたい (51.0%)	海外旅行に行きたい (46.5%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (37.4%)
男30代	国内旅行に行きたい (50.0%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (43.8%)	海外旅行に行きたい (41.1%)
男40代	国内旅行に行きたい (62.2%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (53.8%)	海外旅行に行きたい (49.0%)
男50代	国内旅行に行きたい (68.4%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (51.9%)	海外旅行に行きたい (41.1%)
男60代	国内旅行に行きたい (68.6%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (54.7%)	孫の成長を見守りたい (43.8%)
男70～74歳	国内旅行に行きたい (73.5%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (55.1%)	孫の成長を見守りたい (53.1%)
女20代	国内旅行に行きたい (67.6%)	海外旅行に行きたい (53.4%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (52.7%)
女30代	国内旅行に行きたい (62.9%)	海外旅行に行きたい (49.5%)	孫の成長を見守りたい (46.2%)
女40代	国内旅行に行きたい (60.3%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (51.5%)	孫の成長を見守りたい (47.1%)
女50代	国内旅行に行きたい (69.9%)	海外旅行に行きたい (47.4%)	映画･演劇鑑賞を楽しみたい (42.9%)
女60代	国内旅行に行きたい (64.8%)	孫の成長を見守りたい (52.4%)	海外旅行に行きたい (36.6%)
女70～74歳	国内旅行に行きたい (67.3%)	孫の成長を見守りたい (56.4%)	夫婦2人の暮らしをのんびり過ごしたい (34.5%)

（３）男女で異なる「老後に一緒に住む予定の人」

そこで、老後に一緒に住む予定の人をみると、どの年代でも「配偶者」が最も高いが、女性は 50 代以上になると、「配偶者（夫）」が低くなり、「子ども」が上昇する。この傾向が顕著な 70 代女性においては、「配偶者（夫）」60%、「子ども」50.9%となっている。

この結果から読み取れることは、高齢化に内在する男女のスレ違い現象である。

図表 3－22：老後に一緒に住む予定の人(20 歳以上のみ)



	全体	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
配偶者（夫・妻）	84.0	87.7	90.6	88.8	93.7	90.5	91.8	91.2	85.5	80.9	74.4	60.0	60.0
子ども	24.9	21.3	25.0	21.7	23.4	21.2	24.5	23.6	22.6	22.1	28.8	29.7	50.9
孫	10.4	9.7	12.5	9.1	7.6	11.7	22.4	8.1	4.8	10.3	9.0	14.5	21.8
親	6.9	4.5	8.3	7.0	6.3	2.9	0.0	10.8	11.8	13.2	4.5	2.8	1.8
友人・知人	3.0	3.2	1.6	1.4	0.6	0.0	0.0	3.4	6.5	2.9	5.1	4.8	3.6
その他	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	1.6	2.9	1.9	2.1	0.0
一人で暮らしたい	8.7	9.7	6.3	7.0	4.4	8.8	4.1	6.1	7.0	6.6	12.8	21.4	9.1

（４）老後のために健康維持と家族関係に配慮

それでは、老後のために何かの準備や心構えをしているのだろうか。図表 3-23 は、老後のためにしていることを性年代別に整理したものである。

◇全体では、「体力づくりや健康の維持」が 44.0%で最も高く、「良好な家族関係を築く」37.5%、「友人・仲間を作る」31.8%と続く。

◇20 代～40 代は「貯金・蓄財をする」を第 1 位にあげている。家族形成期から子育て期にあるこの年代は、老後について深刻に考えるというよりも貯金の理由のひとつに“老後”も含まれていると解釈したほうがよさそうだ。

◇50 代以降になると、「体力づくりや健康の維持」が最も高く、「良好な家族関係を築く」がこれに次ぐ。これらに続いて、男 50 代～60 代は、「ライフワークとしての自分の趣味を持つ」、男 70 代は「地域の人とお付き合いをする」をあげている。また、女 50 代～70 代は「友人・仲間を作る」である。

都市生活者は、老後を楽しく過ごすための要件として、健康と家族、趣味や友人・仲間が大切だと考えている。

図表 3－23：老後のためにしていること(20 歳以上のみ)

	1位	2位	3位
全 体	体力づくりや健康の維持 (44.0%)	良好な家族関係を築く (37.5%)	友人･仲間を作る (31.8%)
男20代	貯金･蓄財をする (34.2%)	友人･仲間を作る (24.5%)	体力づくりや健康の維持 (23.9%)
男30代	貯金･蓄財をする (40.1%)	体力づくりや健康の維持／良好な家族関係を築く (33.9%)	
男40代	体力づくりや健康の維持 (46.2%)	貯金･蓄財をする (41.3%)	良好な家族関係を築く (33.6%)
男50代	体力づくりや健康の維持 (44.9%)	貯金･蓄財をする／良好な家族関係を築く (37.3%)	
男60代	体力づくりや健康の維持 (58.4%)	良好な家族関係を築く (37.2%)	ライフワークとしての自分の趣味を持つ (30.7%)
男70～74歳	体力づくりや健康の維持 (67.3%)	良好な家族関係を築く (42.9%)	地域の人とお付き合いをする (40.8%)
女20代	貯金･蓄財をする (50.0%)	友人･仲間を作る (40.5%)	良好な家族関係を築く (31.8%)
女30代	貯金･蓄財をする (51.6%)	友人･仲間を作る (40.3%)	良好な家族関係を築く (39.8%)
女40代	貯金･蓄財をする (52.9%)	良好な家族関係を築く (51.5%)	体力づくりや健康の維持 (45.6%)
女50代	体力づくりや健康の維持 (65.4%)	良好な家族関係を築く (46.2%)	友人･仲間を作る／貯金･蓄財をする (41.0%)
女60代	体力づくりや健康の維持 (63.4%)	良好な家族関係を築く (49.0%)	友人･仲間を作る (43.4%)
女70～74歳	体力づくりや健康の維持 (52.7%)	友人･仲間を作る (40.0%)	良好な家族関係を築く (36.4%)

第４章　都市生活者の価値観と情報行動

第 2 章から第 3 章で、都市生活者の生活意識と実態を明らかにし、コミュニティと社会に対する意識と実態を明らかにした。特に、都市生活者の生活が、経済環境の変化に大きく影響されている様が窺えた。その中で目立ったものとしては、安全・安心へのニーズであり、これがコミュニティ・ニーズともいえるものになっている。

本章では、都市生活者の生活意識、生活実態、およびニーズの基になっている価値観について明らかにし、彼らの情報行動について整理する。まず、価値観について整理した後に、世界に誇れること、情報行動についてまとめる。情報行動では、最近急速に普及したインターネットの利用状況について掘り下げる。

１．都市生活者の価値観

（１）物の豊かさから人・心の豊かさへ

豊かな生活を「物」（財産や物質的に豊か生活）と「心」(精神的に豊かな生活)と「人」(家族・友人・知人に恵まれた豊かな生活)に分けて、それぞれについて重視したいと思っている程度と実際の生活で重視している程度を、10 段階で尋ねた。

図表 4-1 は、3 つの豊かな生活について、10 点満点中の平均点（重視したくない＝1～重視したい=10）で示したものである。

まず、「重視したい程度」については、次のような結果になっている。

◇「人」「心」の豊かな生活が、全体で 10 点満点中 8.8 点前後で高い。「物」は 7.23 点にとどまった。
◇「人」「心」の豊かな生活に対する重視度について、男性より女性がやや高めであるが、年代による差はみられない。
◇「物」の豊かさに対する重視度は、若い層ほど高く、年代が上がると低下している。

次に、「実際の生活で重視している程度」については、次のようになっている。

◇「人」「心」の豊かな生活が、全体で 10 点満点中 8.05～7.79 点と高い。「物」は 6.59 点にとどまっている。

◇性年代別の差は、ほとんどみられない。

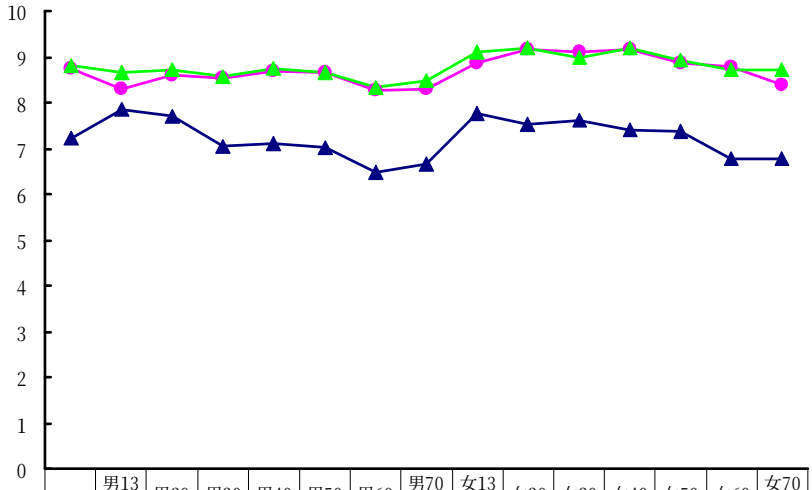
「重視したい程度」「実際の生活で重視している程度」のいずれをみても、「人」「心」の豊かな生活が、「物」の豊かな生活を上回っている。物の充足に伴い、ウォンツ、ニーズともに相対的に他のものより低くなっているとみられる。都市生活者の価値観は、物の豊かさから「人」「心」といった精神的な豊かさへと重点が移行している。

図表４－２は、「物」「心」「人」のそれぞれについて、「重視したい程度」と「実際の生活で重視している程度」を比較し、ギャップをみたものである。

「物」「心」「人」それぞれ、「重視したい」が「重視している実態」を上回るが、性年代の差はなくその開きはパラレルとなっている。

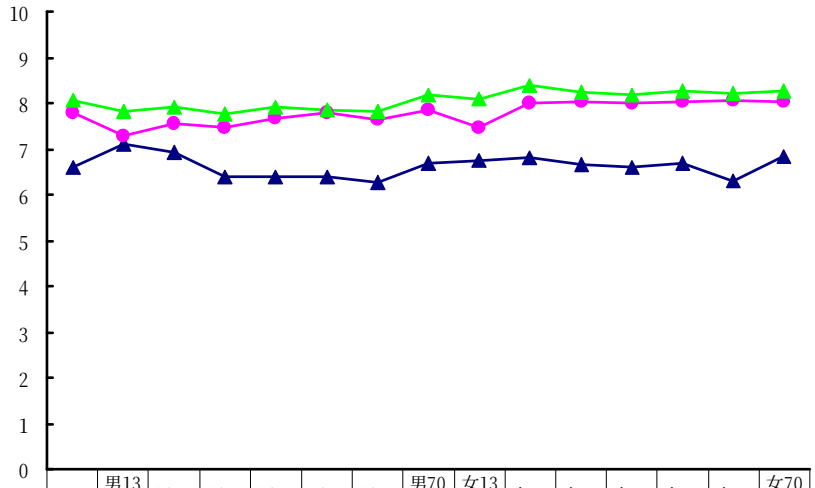
図表４－１：豊かさの重視程度

＜A＞重視したい程度



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
物の(財産や物質的に)豊かな生活	7.23	7.85	7.70	7.03	7.09	7.01	6.47	6.67	7.75	7.53	7.62	7.39	7.38	6.77	6.78
心の(精神的に)豊かな生活	8.74	8.29	8.61	8.54	8.69	8.66	8.26	8.29	8.88	9.16	9.09	9.15	8.87	8.78	8.38
人の（家族・友人・知人に恵まれた）豊かな生活	8.80	8.65	8.73	8.57	8.75	8.66	8.34	8.49	9.10	9.19	8.98	9.18	8.92	8.72	8.71

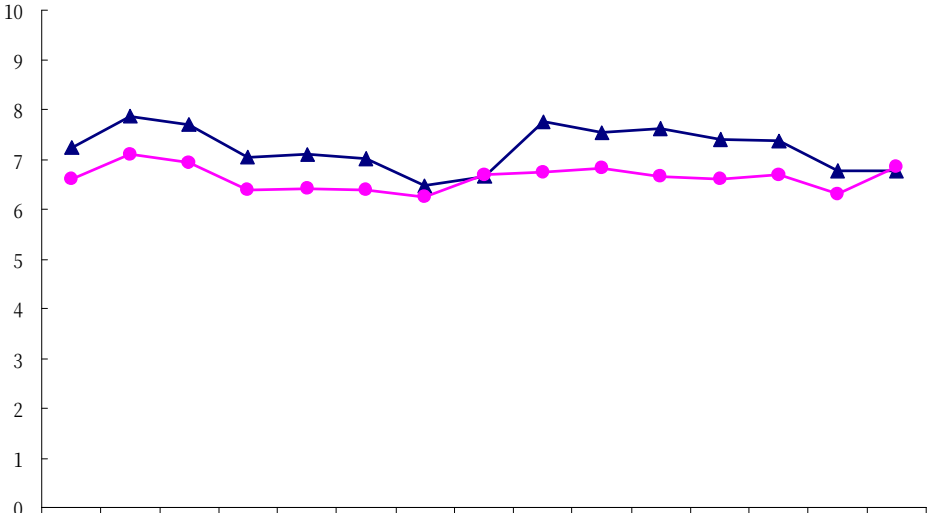
＜B＞実生活での重視程度



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
物の(財産や物質的に)豊かな生活	6.59	7.10	6.93	6.39	6.40	6.38	6.26	6.69	6.75	6.82	6.67	6.60	6.68	6.30	6.84
心の(精神的に)豊かな生活	7.79	7.29	7.55	7.45	7.68	7.80	7.64	7.84	7.46	7.99	8.02	8.01	8.04	8.07	8.02
人の（家族・友人・知人に恵まれた）豊かな生活	8.05	7.82	7.90	7.76	7.90	7.84	7.81	8.18	8.10	8.39	8.23	8.17	8.26	8.22	8.27

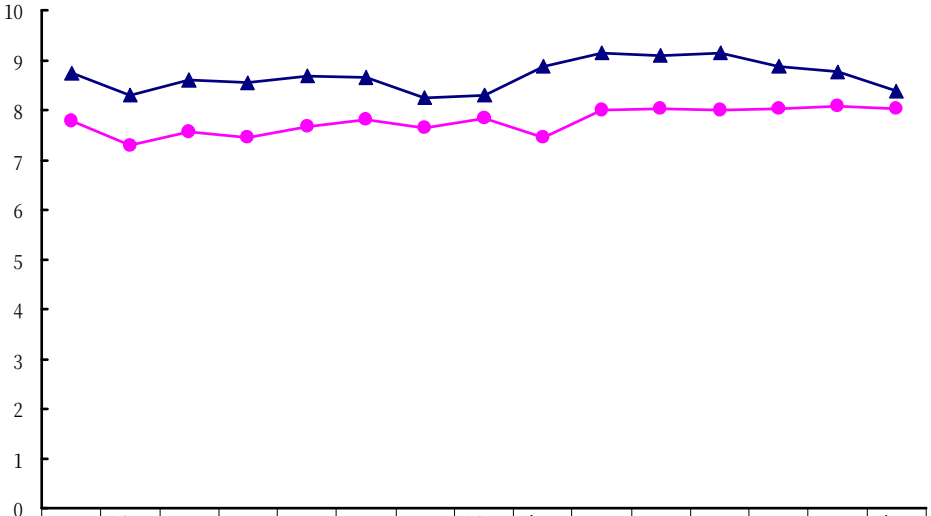
図表 4－2：重視したい程度と実生活での重視程度の差

①物の（財産・物質的に）豊かな生活



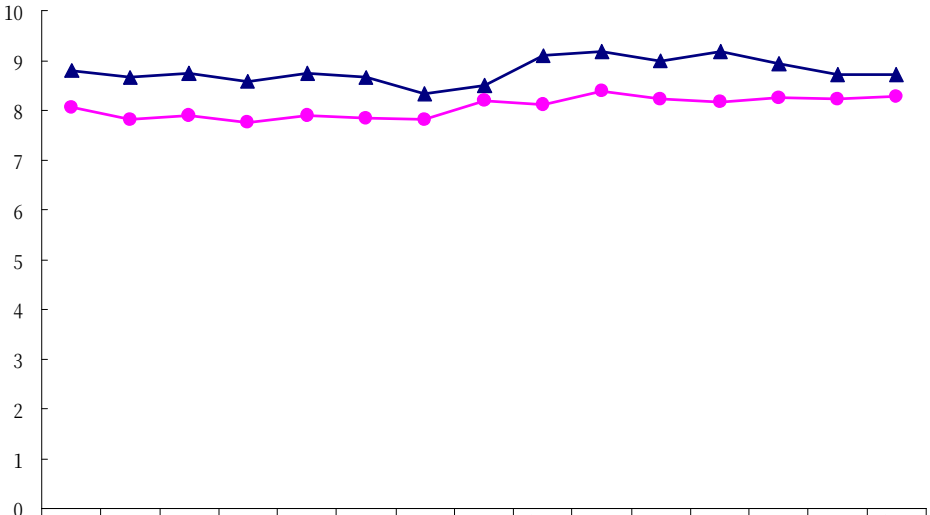
	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
A:重視したい程度	7.23	7.85	7.70	7.03	7.09	7.01	6.47	6.67	7.75	7.53	7.62	7.39	7.38	6.77	6.78
B:実生活での重視程度	6.59	7.10	6.93	6.39	6.40	6.38	6.26	6.69	6.75	6.82	6.67	6.60	6.68	6.30	6.84

②心の(精神的に)豊かな生活



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
A:重視したい程度	8.74	8.29	8.61	8.54	8.69	8.66	8.26	8.29	8.88	9.16	9.09	9.15	8.87	8.78	8.38
B:実生活での重視程度	7.79	7.29	7.55	7.45	7.68	7.80	7.64	7.84	7.46	7.99	8.02	8.01	8.04	8.07	8.02

③人の〔家族･友人･知人に恵まれた〕豊かな生活



	全体	男13～19歳	男20代	男30代	男40代	男50代	男60代	男70～74歳	女13～19歳	女20代	女30代	女40代	女50代	女60代	女70～74歳
A:重視したい程度	8.80	8.65	8.73	8.57	8.75	8.66	8.34	8.49	9.10	9.19	8.98	9.18	8.92	8.72	8.71
B:実生活での重視程度	8.05	7.82	7.90	7.76	7.90	7.84	7.81	8.18	8.10	8.39	8.23	8.17	8.26	8.22	8.27

（２）幸福感得点は 70 点

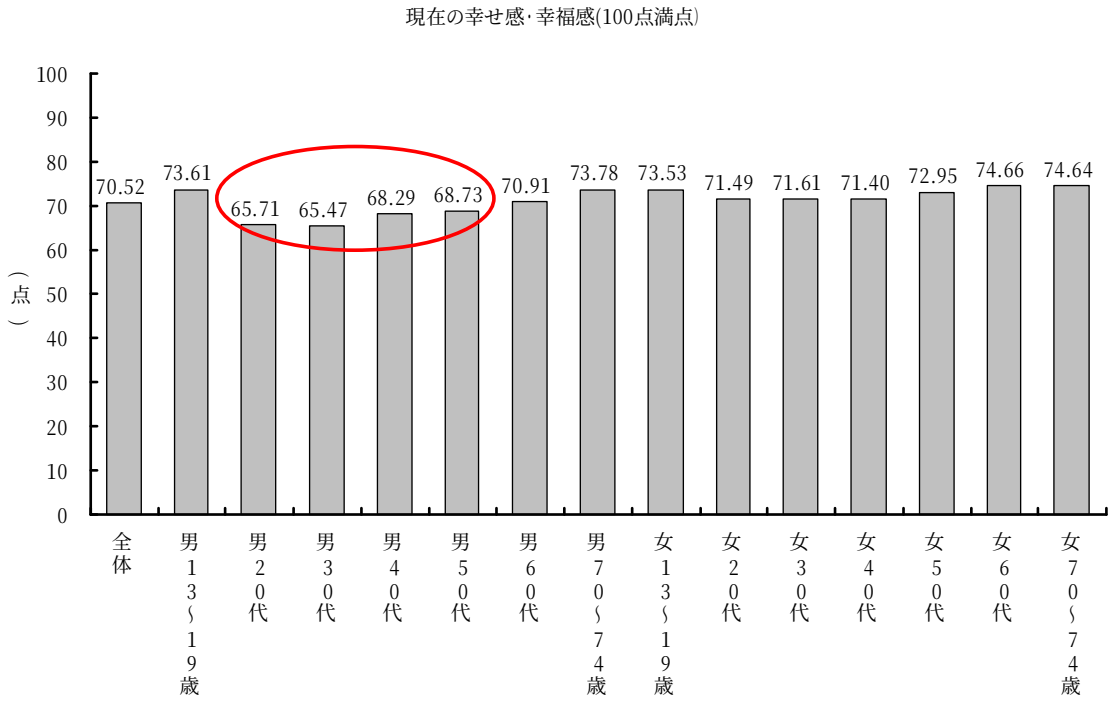
自分の幸せ感･幸福感を 100 点満点中の 10 点区切りで回答してもらったところ、次のようになった。

◇幸福感の全体平均は、70.52 点であった。
◇男女とも、10 代と 60 代以上はやや高めの得点になっている。
◇女性は、どの年代でも 70 点以上で、幸福感を感じている。
◇幸福感がやや低くなるのは男 20 代～50 代で、60 点台にとどまっている。

幸福度の度合いは、生活満足度(第 2 章　1－(1)参照)の「満足」の割合とほぼ同程度になり、傾向も符合する。

人々の幸福感を高めていくことは、価値観の変化に伴い、物の満足度を高めることよりも、人とのつながりや心の豊かさを高めていくことになるだろう。

図表 4-3：現在の幸せ感・幸福感



（３）趣味・友人・家族に喜びや生きがいを感じる

都市生活者は、何に喜びや生きがいを感じているのだろうか。図表 4－4 は、性年代別に上位のことがらを整理したものである。

◇全体では、「趣味やスポーツ」「友人とのつきあい」「家族との団らん」が上位にあげられた。

◇男性全般では、「趣味やスポーツ」が共通して上位にあげられている。これに加えて、10 代・20 代は「友人とのつきあい」、30 代～50 代になると「家族との団らん」「仕事・商売」「子どもや孫の育児・成長・教育」になり、家庭を持つことにより家族や子どもが生きがいになってくる。現役世代は、「仕事・商売」より「趣味やスポーツ」や「家族との団らん」が高く、プライベート領域に喜びや生きがいを感じている。60 代・70 代では、「健康増進」が加わる。

◇女性では、「友人とのつきあい」が共通して上位にあげられている。10 代・20 代では、「趣味やスポーツ」、30 代～60 代では、「家族との団らん」や「子どもや孫の育児・成長・教育」があがってくる。70 代では、男性と同様に「健康増進」が加わる。

都市生活者の喜びや生きがいは、プライベート領域でのコトが大きな位置を占めている。「趣味やスポーツ」「健康増進」は、自分なりの楽しみや達成感もあるだろうが、周囲とのバランスを大切にして満足を得ようとしているとも読み取れる。また、「友人」「家族」「子ども・孫」との関係は、人とのつながる喜びである。彼らの喜びや生きがいとは、周囲の人との調和やつながりを追求するいわば“共振型”に向かっているといえる。

これらをより良い状態にしていくことが、幸福感を高めることのひとつになると考えられる。

図表 4-4：喜びや生きがいを感じていること

	1位	2位	3位
全 体	趣味やスポーツ (60.3%)	友人とのつきあい (58.1%)	家族との団らん (50.3%)
男13～19歳	趣味やスポーツ (79.2%)	友人とのつきあい (66.7%)	学業のための勉強･学習 (25.0%)
男20代	趣味やスポーツ (80.6%)	友人とのつきあい (67.7%)	恋愛･結婚 (32.3%)
男30代	趣味やスポーツ (65.1%)	家族との団らん (49.0%)	仕事･商売、友人とのつきあい (40.6%)
男40代	家族との団らん (67.1%)	趣味やスポーツ (59.4%)	子どもや孫の育児･成長･教育 (53.1%)
男50代	家族との団らん (62.0%)	趣味やスポーツ (60.8%)	仕事･商売 (46.8%)
男60代	趣味やスポーツ (57.7%)	家族との団らん (56.9%)	健康増進 (48.9%)
男70～74歳	趣味やスポーツ (59.2%)	健康増進 (57.1%)	家族との団らん／友人とのつきあい (53.1%)
女13～19歳	趣味やスポーツ (82.4%)	友人とのつきあい (80.9%)	家族との団らん (36.8%)
女20代	友人とのつきあい (77.7%)	趣味やスポーツ (56.8%)	家族との団らん (45.9%)
女30代	友人とのつきあい (66.7%)	家族との団らん (57.0%)	子どもや孫の育児･成長･教育 (54.8%)
女40代	子どもや孫の育児･成長･教育 (69.1%)	友人とのつきあい (65.4%)	家族との団らん (64.7%)
女50代	友人とのつきあい (62.8%)	家族との団らん (53.8%)	趣味やスポーツ (47.4%)
女60代	友人とのつきあい (67.6%)	趣味やスポーツ (62.1%)	子どもや孫の育児･成長･教育 (52.4%)
女70～74歳	友人とのつきあい (70.9%)	健康増進 (60.0%)	趣味やスポーツ／子どもや孫の育児･成長･教育 (52.7%)

２． 世界に誇れること

現在の日本で他の国より優れている、他の国に誇れるものを尋ねた。

◇全体では、「能や歌舞伎など日本の伝統芸能」(59.0%)、「茶道や生け花などの日本の伝統文化」(57.7%)、「着物文化」(50.9%)が、世界に誇れることである。
◇男 10 代・20 代は、「アニメなどエンターテイメント産業の集積」が最も高くなる。10 代では、「ハイテク製品・ロボット技術」が 2 番目になっている。
◇男 30 代・40 代は、「能や歌舞伎など日本の伝統芸能」「茶道や生け花などの日本の伝統文化」など、日本の伝統芸能や伝統文化をあげている。
◇男 50 代～70 代は、日本の伝統芸能や伝統文化以上に、「鉄道の運行をはじめとした時間の正確さ」が高くあげられている。また、60 代以上は、「食品の安全性」も上位にあげている。
◇女性は、「能や歌舞伎など日本の伝統芸能」「茶道や生け花などの日本の伝統文化」「着物文化」をあげている。若い女性は、「着物文化」をより上位にあげている。また、「食品の安全性」「食文化の豊かさと多彩さ」など、“日本の食”や「四季の移り変わりを取り入れた暮らし」もあげられている。

日本で優れていることは、世代によって異なるものの、伝統芸能や文化だけにとどまるのではなく、エンターテイメント産業のコンテンツや技術、食品の安全性など、戦後発展してきた産業の産物によるものがあげられている。また、特筆すべきことは、「時間の正確さ」や「食文化の豊かさ」「四季の移り変わりを取り入れた暮らし」など、日本人のライフスタイルも指摘されていることである。彼らは、このような日本型ライフスタイルを誇りに思っているのである。

図表 4-5：世界に誇れること

	1位	2位	3位
全 体	能や歌舞伎など 日本の伝統芸能 (59.0%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (57.7%)	四季の移り変わりを取り入れた暮らし (52.3%)
男13～19歳	アニメなどエンターテイメント産業の集積 (56.9%)	ハイテク製品・ロボット技術 (45.8%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化、食品の安全性 (40.3%)
男20代	アニメなどエンターテイメント産業の集積 (65.8%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (49.7%)	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (48.4%)
男30代	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (55.2%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (54.2%)	四季の移り変わりを取り入れた暮らし (53.1%)
男40代	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (53.1%)	ハイテク製品・ロボット技術 (51.0%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (48.3%)
男50代	鉄道の運行をはじめとした時間の正確さ (62.0%)	四季の移り変わりを取り入れた暮らし (59.5%)	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (57.6%)
男60代	鉄道の運行をはじめとした時間の正確さ (56.9%)	食品の安全性 (56.2%)	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (54.7%)
男70～74歳	鉄道の運行をはじめとした時間の正確さ (73.5%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (67.3%)	食品の安全性 (65.3%)
女13～19歳	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (60.3%)	着物文化 (58.8%)	食品の安全性 (52.9%)
女20代	着物文化 (65.5%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (62.8%)	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (56.8%)
女30代	着物文化 (62.9%)	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (61.3%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (58.1%)
女40代	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (70.6%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (61.0%)	四季の移り変わりを取り入れた暮らし (58.1%)
女50代	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (67.9%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (60.9%)	食品の安全性 (60.3%)
女60代	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (73.8%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (69.7%)	四季の移り変わりを取り入れた暮らし (67.6%)
女70～74歳	能や歌舞伎など日本の伝統芸能 (78.2%)	茶道や生け花などの日本の伝統文化 (76.4%)	食文化の豊かさと多彩さ (63.6%)

３．情報行動

（１）インターネット利用の浸透

図表 4－6 は、情報についてあてはまるものをまとめたものである。テレビ、新聞、インターネットに対する態度について、次のように整理することができる。

◇「わからないことがあるとすぐインターネットで調べる」は、男女 10 代～30 代と男 40 代でテレビよりも高い。

◇「いろいろな情報はテレビで知ることが多い」は、主に女性 40 代以上で上位にある。

◇「朝刊は必ず朝に読む」は、男 50 代～70 代で高い。男 60 代・70 代は、2 番目に「いろいろな情報はテレビで知ることが多い」、3 番目に「いろいろな情報は新聞・雑誌で知ることが多い」があげられており、活字とテレビ世代であることを示している。同年代の女性は、テレビと新聞のスコアが逆転する。

インターネットは、幅広く浸透してきているが、30 代～40 代までの若い世代においては、テレビや新聞よりも身近なメディアとして捉えられている。

図表 4-6：情報についてあてはまるもの

	1位	2位	3位
全 体	いろいろなことを広く知りたい (54.2%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (50.9%)	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (45.2%)
男13～19歳	いろいろなことを広く知りたい (52.8%)	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (44.4%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (36.1%)
男20代	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (55.5%)	いろいろなことを広く知りたい (53.5%)	いろいろな情報はインターネットで知ることが多い (51.6%)
男30代	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (59.9%)	わからないことがあると自分で調べる (56.8%)	いろいろなことを広く知りたい (53.6%)
男40代	いろいろなことを広く知りたい (61.5%)	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (58.7%)	わからないことがあると自分で調べる (50.3%)
男50代	いろいろなことを広く知りたい (58.2%)	わからないことがあると自分で調べる (56.3%)	朝刊は必ず朝に読む (53.8%)
男60代	朝刊は必ず朝に読む (76.6%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (59.1%)	いろいろな情報は新聞･雑誌で知ることが多い (54.7%)
男70～74歳	朝刊は必ず朝に読む (85.7%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (71.4%)	いろいろなことを広く知りたい／いろいろな情報は新聞･雑誌で知ることが多い (63.3%)
女13～19歳	いろいろなことを広く知りたい (61.8%)	わからないことがあるとすぐ人に聞く (48.5%)	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (45.6%)
女20代	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (59.5%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (54.7%)	いろいろなことを広く知りたい (48.6%)
女30代	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (63.4%)	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (55.9%)	わからないことがあると自分で調べる (48.4%)
女40代	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (66.2%)	いろいろなことを広く知りたい (56.6%)	わからないことがあるとすぐインターネットで調べる (47.1%)
女50代	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (63.5%)	いろいろなことを広く知りたい (53.8%)	朝刊は必ず朝に読む (51.3%)
女60代	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (66.9%)	朝刊は必ず朝に読む (53.1%)	いろいろなことを広く知りたい (52.4%)
女70～74歳	いろいろな情報はテレビで知ることが多い (74.5%)	朝刊は必ず朝に読む (65.5%)	いろいろな情報は新聞･雑誌で知ることが多い (61.8%)

実際のパソコン、インターネットの利用率と利用頻度は、図表 4－7 にまとめることができる。要点は、次のようになる。

◇パソコンの利用率は全体で 75.3%、利用頻度は平均 4.36 日／週（利用者ベース）である。男 50 代までと女 40 代までの層での利用率が高く、80%～90%にのぼる。また、男 20 代～50 代の利用頻度は、4.5 日／週以上（利用者ベース）になっている。

◇パソコンでのインターネット利用率は 73.6%で、パソコン利用とほぼ同率になり、パソコン利用者の大半がインターネットを利用している。利用頻度は、利用者ベースで 4.06 日／週で､男 20 代～50 代での利用頻度は 4.5 日／週以上(利用者ベース）になっている。

◇携帯電話でのインターネット利用率は全体で 53.9%であるが、男 10 代～40 代と女 10 代～30 代の利用率は、60%～94%まで高くなり、男女とも 20 代が最も高い。利用頻度は、利用者ベースで 3.94 日／週だが、男女 10 代・20 代の利用頻度は、パソコンでのインターネット利用頻度を上回っている。

◇2010 年から本格普及したスマートフォンでのインターネットの利用率は、全体で 5%に過ぎないが、男 20 代は 14.8%、男 30 代と 40 代はほぼ 10%になっており、現状では若い男性ほど利用率が高い。今年度はスマートフォン元年ともいうべき段階で、今後急速に端末が普及することが予想されており、性年代を問わず利用率は高まるものと思われる。

◇現状のスマートフォンでのインターネット利用頻度も、利用者ベースで 4.82 日／週と、利用者ベースでみる限り、パソコンや携帯電話の利用頻度を上回っており、モバイル・インターネット端末として利用されていることがうかがえる。

図表 4-7：パソコン、インターネット利用

	パソコン利用		インターネット利用 パソコンでの		インターネット利用 携帯電話での		インターネット利用 スマートフォンでの	
	利用率（%）	平均利用頻度（日／週）	利用率（%）	平均利用頻度（日／週）	利用率（%）	平均利用頻度（日／週）	利用率（%）	平均利用頻度（日／週）
全 体	75.3	4.36	73.6	4.06	53.9	3.94	5.0	4.82
男13～19歳	87.5	3.70	86.1	3.60	76.4	4.66	4.2	3.23
男20代	91.6	4.77	89.7	4.60	80.6	5.22	14.8	5.50
男30代	90.6	4.83	89.1	4.55	72.4	4.13	9.4	4.97
男40代	91.6	5.24	90.2	4.91	62.9	3.84	9.8	5.06
男50代	86.1	5.25	85.4	4.80	42.4	2.50	5.7	5.10
男60代	56.2	4.59	54.0	4.37	16.1	1.83	0.0	0.00
男70～74歳	38.8	4.15	30.6	3.19	8.2	3.60	0.0	0.00
女13～19歳	91.2	3.53	86.8	3.36	67.6	4.97	2.9	6.20
女20代	87.2	3.96	87.2	3.70	93.9	4.83	5.4	3.35
女30代	84.9	4.18	83.9	3.92	73.1	3.59	3.8	3.90
女40代	81.6	3.36	80.9	3.02	53.7	2.89	2.2	6.20
女50代	62.8	3.98	60.3	3.45	34.0	2.08	1.3	0.02
女60代	33.1	2.98	31.7	2.47	9.7	2.46	0.0	0.00
女70～74歳	12.7	4.27	9.1	4.42	12.7	3.74	1.8	6.20

注 1：平均利用頻度は、それぞれ利用者をベースとして算出

パソコンやインターネットの利用内容は、図表 4-8 にまとめた。

◇パソコンの利用内容は、10 代が「音楽・映像のダウンロード・編集・鑑賞」が最も多く、10 代以外は、「ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索」が最も多い。10 代以外は、男性が「Ｅメール」、女性が「インターネットショッピング（物の購入）」がこれに次いで高い。

◇携帯電話でのインターネット利用内容は、「ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索」「Ｅメール」「ゲーム」である。男 10 代は、「ゲーム」が最も高いが、20 代以降は男女とも、「ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索」「Ｅメール」を利用している。

◇スマートフォンのインターネット利用内容には、「アプリのダウンロード」が加わる。「アプリのダウンロード」が加わることにより、利用内容が大幅に広がるとみられている。

図表 4-8：プライベートでの利用内容

■ パソコンのプライベートでの利用内容

	1位	2位	3位
全 体	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (71.1%)	Eメール／音楽･映像のダウンロード･編集･鑑賞 (39.9%)	
男13～19歳	音楽･映像のダウンロード･編集･鑑賞 (60.3%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索／ゲーム (49.2%)	
男20代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (71.8%)	音楽･映像のダウンロード･編集･鑑賞 (57.7%)	ゲーム (35.9%)
男30代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (78.7%)	Eメール (44.8%)	インターネットショッピング（物の購入） (42.0%)
男40代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (74.8%)	Eメール (45.0%)	ビデオ･デジタルカメラの画像の取り込み･編集･鑑賞 (44.3%)
男50代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (66.2%)	ワープロ･表計算･家計簿 (50.0%)	Eメール (45.6%)
男60代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (62.3%)	Eメール (50.6%)	ワープロ･表計算･家計簿 (46.8%)
男70～74歳	ワープロ･表計算･家計簿 (52.6%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索／Eメール (47.4%)	
女13～19歳	音楽･映像のダウンロード･編集･鑑賞 (69.4%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (59.7%)	ゲーム (33.9%)
女20代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (77.5%)	音楽･映像のダウンロード･編集･鑑賞 (60.5%)	インターネットショッピング（物の購入） (40.3%)
女30代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (82.9%)	インターネットショッピング（物の購入） (53.2%)	Eメール (49.4%)
女40代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (74.8%)	インターネットショッピング（物の購入） (47.7%)	Eメール (36.0%)
女50代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (65.3%)	インターネットショッピング（物の購入） (33.7%)	Eメール (32.7%)
女60代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (62.5%)	Eメール (45.8%)	ゲーム (31.3%)
女70～74歳	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索／ワープロ･表計算･家計簿 (42.9%)		ホテル･ゴルフ場など施設の予約／Eメール／ゲーム (28.6%)

■ 携帯電話のインターネット利用内容

	1位	2位	3位
全 体	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (60.4%)	Eメール (52.1%)	ゲーム (32.1%)
男13～19歳	ゲーム (61.8%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (54.5%)	音楽･映像のダウンロード･鑑賞 (50.9%)
男20代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (68.8%)	Eメール (49.6%)	ゲーム (48.8%)
男30代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (66.9%)	Eメール (54.7%)	ゲーム (41.0%)
男40代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (58.9%)	Eメール (42.2%)	ゲーム (20.0%)
男50代	Eメール (52.2%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (41.8%)	アプリのダウンロード (20.9%)
男60代	Eメール (50.0%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (36.4%)	金融取引（銀行、証券など） (13.6%)
男70～74歳	Eメール (100.0%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索／インターネットショッピング（物の購入）／航空券、乗車券などのチケット予約／金融取引（銀行、証券など） (25.0%)	
女13～19歳	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (84.8%)	音楽･映像のダウンロード･鑑賞 (52.2%)	Eメール (47.8%)
女20代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (76.3%)	Eメール (56.1%)	携帯クーポンの取得 (45.3%)
女30代	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (57.4%)	Eメール (51.5%)	携帯クーポンの取得 (43.4%)
女40代	Eメール (54.8%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (49.3%)	アプリのダウンロード (37.0%)
女50代	Eメール (54.7%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (37.7%)	携帯クーポンの取得 (34.0%)
女60代	Eメール (64.3%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (50.0%)	ゲーム／音楽･映像のダウンロード･鑑賞(21.4%)
女70～74歳	Eメール (85.7%)	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索／インターネットオークション／ホテル･ゴルフ場など施設の予約／アプリのダウンロード／携帯クーポンの取得／電子書籍の購入･閲覧 (14.3%)	

■ スマートフォンのインターネット利用内容

	1位	2位	3位
全 体	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (77.8%)	アプリのダウンロード (54.4%)	Eメール (53.3%)
男 性	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (79.1%)	アプリのダウンロード (56.7%)	Eメール (55.2%)
女 性	ブログ･ホームページなどの閲覧･情報検索 (73.9%)	Eメール／アプリのダウンロード (47.8%)	

（２）関心のある情報分野

関心のある情報分野は、図表 4－9 のようになっている。性年代別の関心領域は異なっている。

◇男 10 代～40 代は、「スポーツ」や「趣味」情報への関心が高い。
◇男 30 代～70 代は、「経済・景気」「政治」の情報への関心が高い。年齢が上がるにつれて「政治」への関心が高まる傾向にある。
◇男 70 代は、「健康」の情報への関心が高くなる。
◇女 10 代～40 代は、「ファッション」「食べ物・料理」の情報への関心が高い。
◇女 50 代～70 代は、「健康」「食べ物・料理」に加えて、「旅行」に関する情報への関心が高くなる。

図表 4-9：関心のある情報分野

	1位	2位	3位
全 体	経済･景気 (46.7%)	食べ物･料理 (44.8%)	健康 (40.9%)
男13～19歳	スポーツ (56.9%)	ファッション／趣味 (43.1%)	
男20代	趣味 (56.1%)	スポーツ (54.2%)	経済･景気 (41.9%)
男30代	経済･景気 (56.3%)	スポーツ (52.1%)	趣味 (46.9%)
男40代	経済･景気 (67.1%)	スポーツ (56.6%)	政治 (43.4%)
男50代	経済･景気 (70.9%)	政治 (59.5%)	スポーツ (58.9%)
男60代	経済･景気 (71.5%)	政治 (69.3%)	健康 (55.5%)
男70～74歳	政治／経済･景気 (81.6%)		健康 (67.3%)
女13～19歳	ファッション (69.1%)	芸能 (60.3%)	食べ物･料理 (48.5%)
女20代	ファッション (73.0%)	食べ物･料理 (62.2%)	美容 (61.5%)
女30代	食べ物･料理 (66.7%)	ファッション (52.7%)	教育･育児 (51.6%)
女40代	食べ物･料理 (63.2%)	健康 (56.6%)	教育･育児 (51.5%)
女50代	健康 (60.9%)	食べ物･料理 (59.0%)	旅行 (50.0%)
女60代	健康 (67.6%)	旅行 (62.8%)	食べ物･料理 (56.6%)
女70～74歳	健康 (74.5%)	食べ物･料理 (63.6%)	老後 (60.0%)

第５章　まとめ

本章では、「都市生活者意識調査 2010」の結果を総括し、本研究の今後の方向性と課題について述べる。まず、都市生活者のライフスタイルを捉える構図を明らかにする。この構図に従って、調査結果から現状を理解し、今後の方向性と課題を明らかにする。

１．個人の生活と家庭、コミュニティ、社会の関係

（１）都市生活者を捉える構図

「都市生活者のライフスタイルを捉える構図」の枠組みは、図表 5－1 に示すことができる。この枠組みは、次の２つで構成されている。

①「個人と生活フィールド」

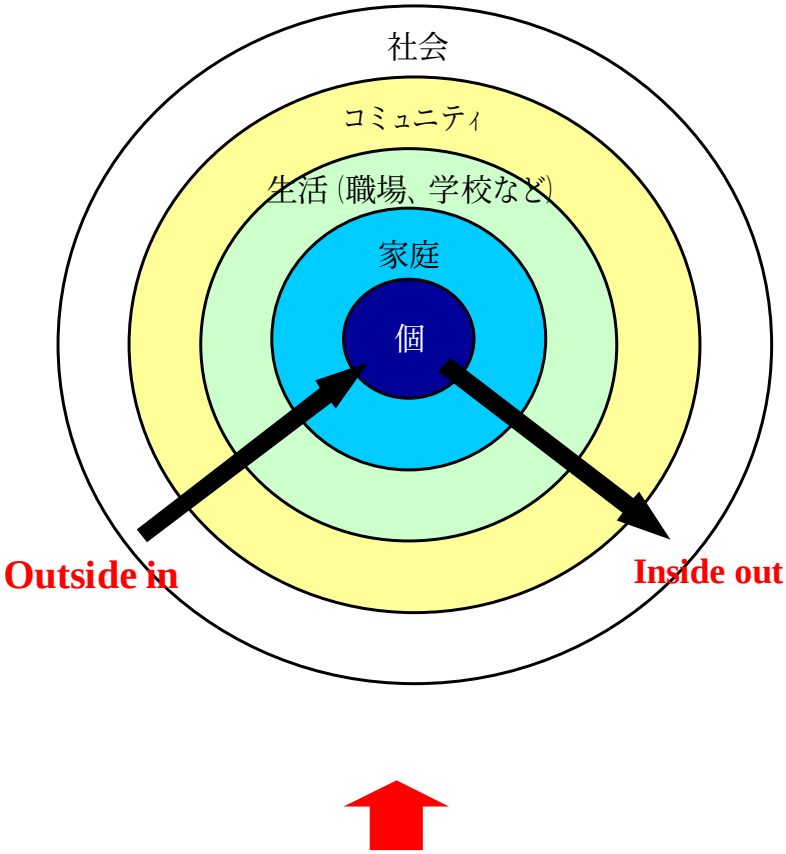
都市生活者を「個」として捉えると、「個」を取り巻く生活フィールドや環境には、「家庭」「職場、学校などの生活領域」「コミュニティ」「社会」がある。そして、「個」を中心にして、中心に近い順にこれらの生活フィールドや環境が位置づけられる。「個」としての生活者は、日々の生活において、それぞれの生活フィールドとのかかわりを持ち、参画したり、影響を受けたりしていると考えられる。

②「性年代やライフステージによる違い」

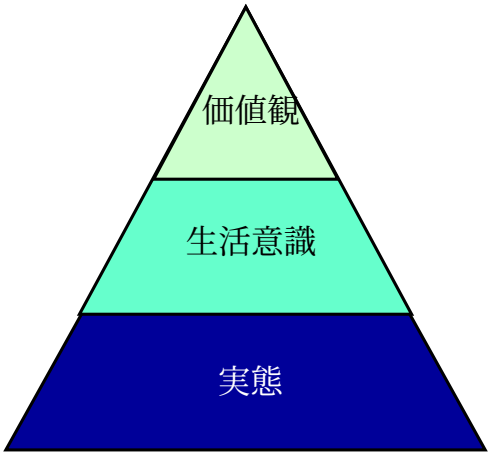
勿論、生活意識や実態は、調査結果でみてきたように、性年代やライフステージによって異なっている。性年代やライフステージによる違いは、価値観と生活意識、実態の 3 つの次元に分けられる。当然のことながら、これらは、密接につながっている。このような価値観、生活意識、実態の違いが、個人の生活と家庭、コミュニティ、社会の関係に影響を与える内的要因になっていると考えられる。

図表 5－1：都市生活者のライフスタイルを捉える構図

《個人と生活フィールド》



《性年代やライフステージによる違い》



（２）現状理解と今後の方向性考察の道筋

「都市生活者のライフスタイルを捉える構図」のもとで、都市生活者の現状理解と今後の方向性について次のように考察することができる。

① 現状を理解する「Outside in」

「個」は、社会やコミュニティ、職場や学校などの生活の場、家庭の影響を受けている。環境の影響を受けている都市生活者の生活の現状は、図表 5－1 の「Outside in」のベクトルで理解することができる。

② 今後の方向性を考える「Inside out」

反対に、環境や生活フィールドに対する「個」のあり方は、「Inside out」の道筋で考えることができるだろう。都市生活者が自らの価値観に基づいて「個」の欲求を実現していくために、「個」を取り巻く生活フィールドにかかわり、働きかけ、行動していくという捉え方である。

2．現状の理解　－調査結果から見えてきたこと

「Outside in」アプローチにしたがって、調査の結果をもとにして現状を理解する。「Outside in」アプローチでまず理解しなければならないことは、経済環境という外的要因が「個」の意識と生活実態に及ぼす影響である。そして、家庭、ワークライフ・バランス、コミュニティ、社会の生活フィールドごとに現状を総括する。

（1）デフレ経済が生活意識と家計に及ぼす影響
（2）家庭生活と子育て意識
（3）ワークライフ・バランス
（4）コミュニティの必要性と現状
（5）社会に対する意識

（1）デフレ経済が生活意識と家計に及ぼす影響

2008 年 9 月のリーマンショック以降のデフレ経済が都市生活者の生活意識と実態に与えた影響は、極めて大きかったといわざるを得ない。今回の調査結果から、1 年前に比べて、収入が減少し、6 割の人が収入に対する不満を持っていることが浮かび上がった。

経済環境は、都市生活者の生活意識や家計、そして消費行動に影響を及ぼし、暮らし向きの悪化、厳しい家計実態、消費意欲の減退を招いている。（図表 5－2 参照）

《暮らし向きの悪化》

◇4 人中 3 人が、現在の生活に満足しているものの、減収により、暮らし向きの悪化がみられる。とりわけ、現役中高年（男 40 代～50 代）への影響が大きい。
◇今後の改善期待はあるものの、先行き不透明な中で、現役中高年では、この期待も希薄なものになっている。現役中高年への賃金・雇用調整圧力の影響が大きいことを示している。

《厳しい家計の実態》

◇調査結果からは、ゆとりのない家計の厳しい実態が浮かび上がった。その実態の厳しさは、対象者の 4 人に 1 人が支出が収入を上回っていることから明白で、

家計が逼迫状態にあることがわかる。特に、40代以上の世帯では、厳しい状況にある。

◇支出超過の補填は、「預貯金・金融資産の取り崩し」「出費の節約」「配偶者が働きに出る」などでしのいでいる。

◇ここ1～2年で増加した支出と減少した支出をみると、「貯蓄」のゆとりもなくなり、「小遣い」を節約して、ファッションの購入を控え、「食料費」や「通信費」、「保健医療費」などの日々の生活費にまわさざるを得なくなっていることがわかる。また、男女30代～50代の子育て世代には、「教育費」への支出増加も加わり、子どもの成長に伴う負担が重くのしかかっている。シワ寄せは「接待交際費支出」の抑制にも向かう。50代からは、「保健医療費」への支出増が顕著になり、60代以上で大きく増加する。

◇重点的に増やしたい支出は、「貯蓄」が最も多く、その理由は「予定外の支出に備えて」「老後に備えて」「子供の教育資金」など将来への備えになっている。「貯蓄」に続く、「趣味・娯楽費」と「小遣い」は、少しでもゆとりを回復したい気持ちの表れであろう。減らしたい支出は、「水道光熱費」「通信費」「食料費」などで、60歳以上は「保健医療費」があげられている。今や、生活の基礎的支出の見直しに向かおうとしている。

《消費意欲の減退》

◇中高年（50代以上）での消費意欲の減退が著しい。

◇消費に及ぼす要因はどの世代でも「収入の増減」が大きく、経済環境や収入の変化が消費意欲に直結している。子育て世代は、「収入の増減」に次いで「子どもの教育費」をあげている。子ども手当は、子育て世代を支援する政府の施策であるが、これも将来の教育資金として貯蓄にまわされている。

◇消費行動の変化は、先行きが見えない中で、高価格品購入や衝動買いを控え、「今あるものを長く使う」「買い物を控える」「できるだけ安く買う」など節約志向が顕著である。

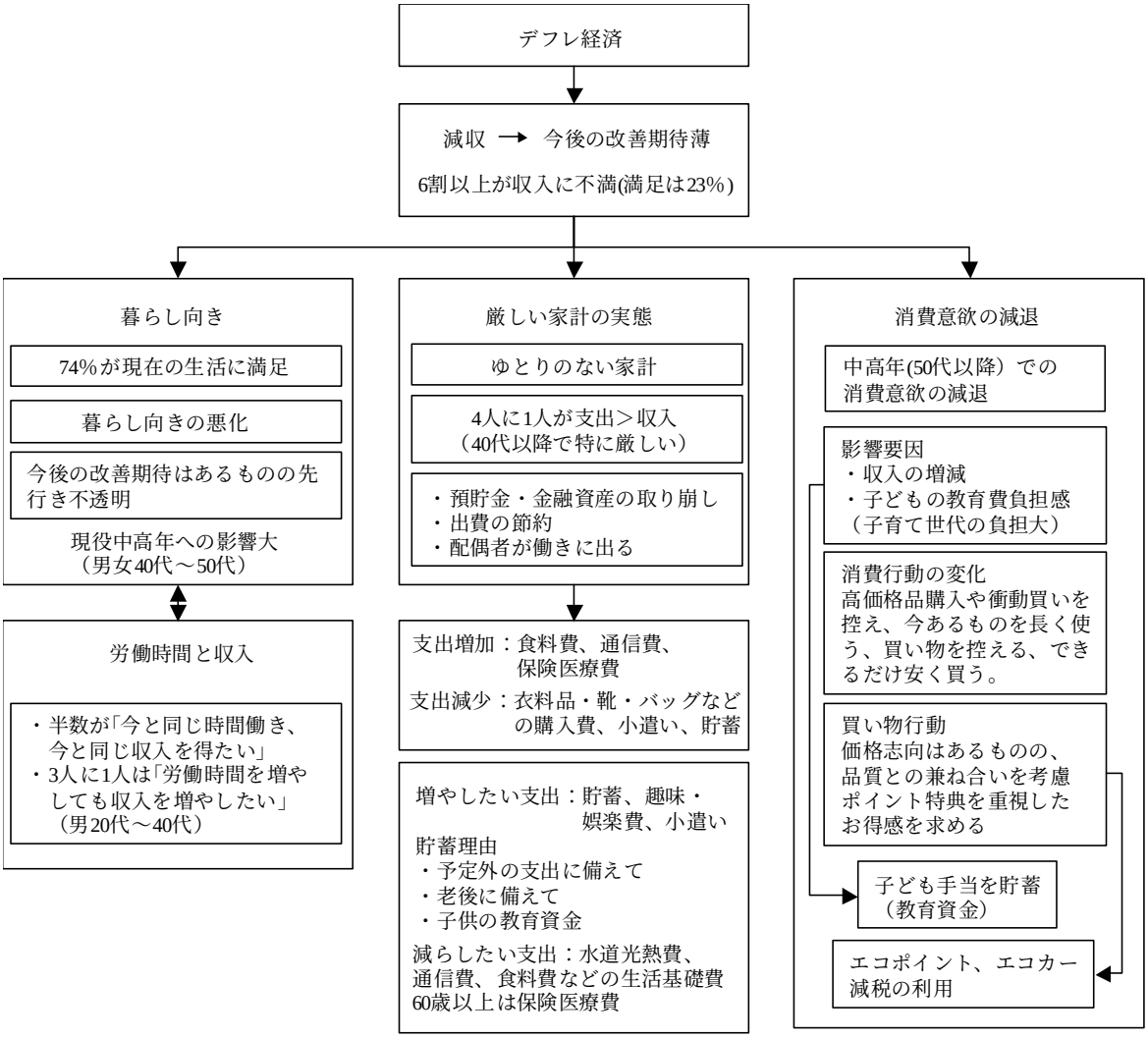
◇買い物行動は、価格志向がありつつ、品質との兼ね合いを考慮して、ポイント特典を重視したお得感を求めるようになっている。家電エコポイントやエコカー減税は、明らかに消費の背中を押す効果が認められた。

《労働時間と収入》

◇暮らし向きが悪化し、家計が厳しい状況にある中でも、労働時間と収入とのバランスについては、「今と同じ時間働き、今と同じ収入を得たい」とする現状維持派が全体の 49.9%であった。

◇次に多いのは、「労働時間を増やしても収入を増やしたい」とする人で全体の 34.8%を占めている。男 20 代・30 代では収入増派が現状維持派を上回った。収入が減っても労働時間を減らしたいという人は全体のわずか 15.3%。今回の調査では、ゆとり増よりも収入増を求める人のほうが多いという結果になった。

図表 5－2：デフレ経済が生活意識と家計に及ぼす影響



（２）家庭生活と子育て意識

都市生活者の家庭とのかかわりは、家庭生活、家庭内コミュニケーションの実態と子育て・親子関係、子育てと教育の考え方から明らかになっている。調査結果から見えてくるのは、都市生活者の家族を大切にしている姿である。

《家庭生活》

◇普段よく会話し、家族イベントや食事を楽しむ、家族を大事にしている姿がある。子育て世代の家庭は、子ども中心の生活になっている。また、高齢者は、家族での旅行を楽しんでいる。

《家庭内コミュニケーション》

◇忙しい都市生活者の家庭内コミュニケーションは増加しているとは言い難いが、子育て世代は意思疎通を維持している。

《子育て、親子関係の考え方》

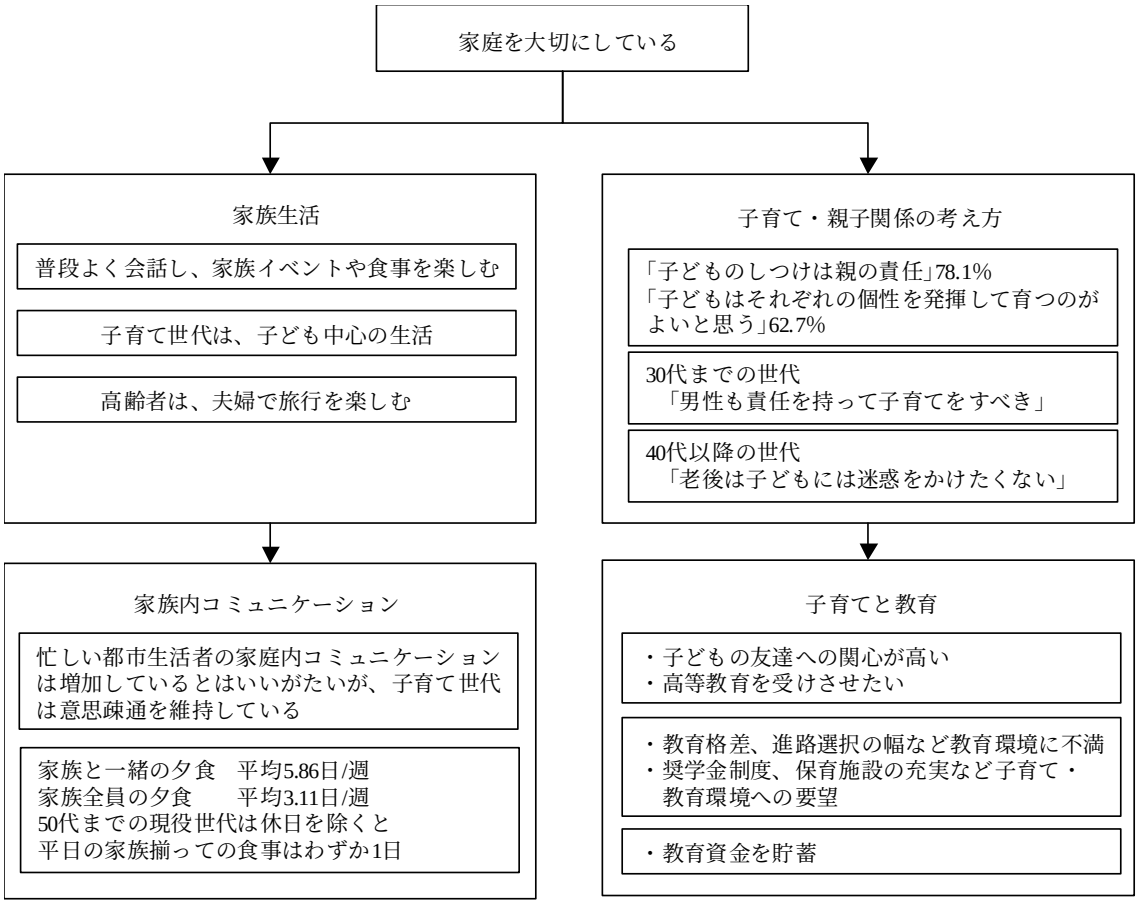
◇ほとんどの人が、子どものしつけを親の責任と考え、「子どもはそれぞれの個性を発揮して育つのがよい」と思っている。
◇30 代までの世代は、「男性も責任を持って子育てをすべき」、40 代以降の世代は、「老後は子どもには迷惑をかけたくない」と思っている。

《子育てと教育》

◇子育て、教育に関する意識をみると、親は、子どもの友達関係に関心を持っており、高等教育を受けさせたいが、教育環境に敏感になっている様子が浮かび上がった。

親としての責任感を持ち、子どもの将来のために高等教育を受けさせたいと考えている。しかし、教育格差、進路選択の幅などへの不安や不満を持ち、保育施設の充実、奨学金制度など子育て・教育環境への要望も持っている。

図表 5－3：家庭に対する意識と実態



（3）ワークライフ・バランス

ワークライフ・バランスと今後充実させたい領域については、次のようになっている。

《ワークライフ・バランスは取れている》

◇実際にワークライフ・バランスについての質問でも、有職者全体で、「バランスが取れている」（46.3%）が「バランスが取れていない」（33.3%）を上回っており、今以上に労働時間を増やしたいとは考えていない。

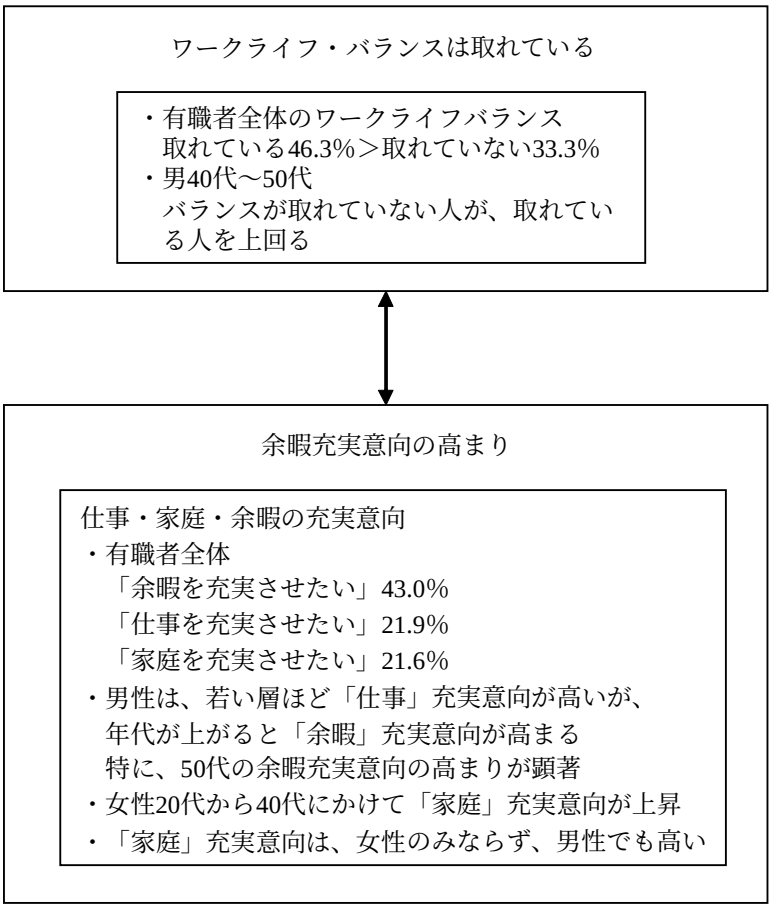
◇ただし、男 40 代～50 代では、バランスが取れていないという人が多く、仕事に追われる毎日の生活に不満を持っているようだ。

《余暇充実意向の高まり》

◇仕事、家庭、余暇で今後重視したい領域では、余暇への欲求の高まりが顕著である。
◇男性は若い層ほど「仕事」、年代が上がると「余暇」充実意向が高くなる。とりわけ 50 代になると余暇充実意向の高まりが顕著である。
◇女性は、20 代から 40 代にかけて「家庭」充実意向が上昇する。

生活を維持していくための収入が大切であることはいうまでもないが、仕事一辺倒ではなく、余暇を充実させたいという意向が高まっている。男 50 代は、収入の拡大期待が剥落し､長いリタイヤメント後の生活へ向けた準備に入る時期にあたる。このことが、余暇へとニーズを向かわせていくものと思われる。

図表 5－4：ワークライフ・バランス



（４）コミュニティの必要性と現状

都市生活者は、地域コミュニティの必要性を強く感じているものの、まだ世代によって参加度合いに差があり、未成熟な状態といわざるを得ない。

《地域コミュニティのニーズは高い》

◇「住んでいる地域」「趣味の仲間やボランティア仲間」「職場」「インターネットを通じて」の 4 つのコミュニティについては、興味関心があるのは、「趣味の仲間やボランティア仲間」だが、かかわりがあり、今後重視したいのは、「住んでいる地域」である。いずれも、女 30 代以上と高齢者で高い。彼らは比較的在宅率が高く、地域との関わりがあるばかりでなく、友人や仲間とのつきあいに対して積極的である。

◇働き盛りの男女は、「職場」コミュニティを重視している。男性は、職場と家庭に時間の大半を割かれることから、つきあう友人の数が減っている。減収による小遣いや交際費の削減も少なからず影響しているのかもしれない。

《地域の人々との交流》

◇地域の人々との交流は、ほとんどの人が必要なものだと感じている。

◇交流が必要だと思う目的は、地域の防犯・安全確保と緊急時の対応（いざという時の助け合い）、および子どもを見守る地域の目と高齢者に対するサポートである。

◇交流によりうまくいっているものは、お祭りなどの参加型の地域イベントが主で、「地域の防犯、治安の向上」「子どもを見守る地域の目」は 3 割程度にとどまる。

◇交流によりもっと機能してほしいものは、緊急時の対応力と地域の安全である。もともと、求めている住環境が「治安のよいところに住みたい」ということからも地域の安全・安心へのニーズは高い。

◇地域の交流要因は近所づきあいが基本で、子どもを通じた交流がある。

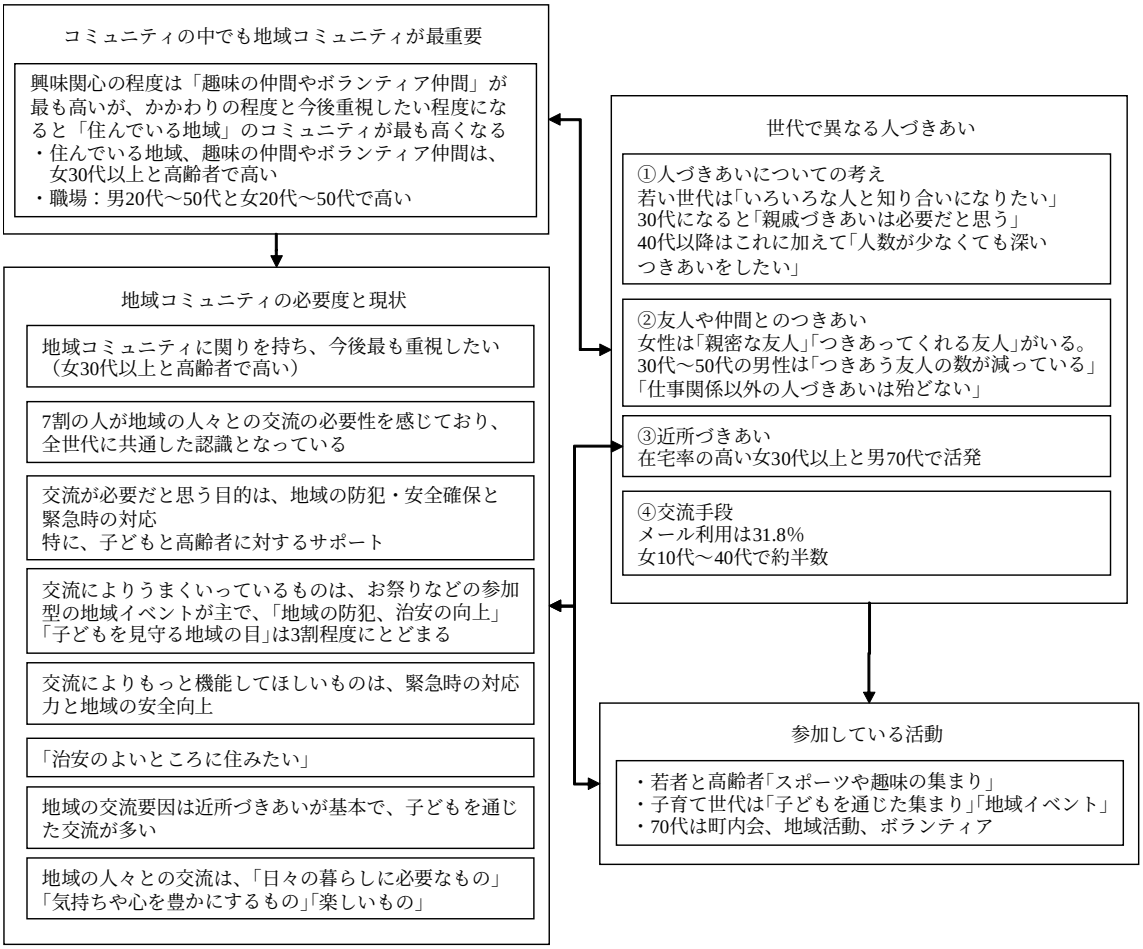
◇地域の人々との交流は、「日々の暮らしに必要なもの」「気持ちや心を豊かにするもの」「楽しいもの」というように前向きに捉えられている点にも注目したい。

《ライフステージで異なる参加活動》

◇若者と高齢者は「スポーツや趣味の集まり」、子育て世代は「子どもを通じた集まり」「地域イベント」、高齢者（70 代）は「町内会、地域活動、ボランティア」に参加している。

地域コミュニティへのニーズは、地域の安全・安心を確保したいという、いわば“生活の基本ニーズ”であり、いざという時の“互助”機能への期待である。また、気持ちや心の豊かさ、楽しさという感情的側面でのベネフィットを与えてくれるものとして捉えられている。地域コミュニティは、現状では女 30 代以上と高齢者の参加にとどまるが、スポーツや趣味、子どもを通じた交流を活性化させることにより、現役世代の交流の場になる可能性がある。

図表 5－5：コミュニティに対するニーズと現状



（５）社会に対する意識

社会に対する意識を現在と近未来の日本社会という 2 つの側面からみていこう。

《社会に対する不満と不公平感、不安》

都市生活者は、現在の社会に対して思いのほか不満や不公平感が強い。

◇7 割以上が社会に対して不満を持っている。とりわけ、子育て世代の不満が大きい。

◇不満の要因は、弱者が報われない格差社会という見方をしており、多忙さと子どもを産み育てることの難しさを感じている。格差社会は、「政治や社会制度の問題」により生じているもので「本人の努力や能力不足」ではないと考えられている。

◇不平等感も不満と同じ程度であるが、若い層ほど高く、将来を担う若者の社会意識に影を落としている。

◇不平等だと思うものは、「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」「雇用や就職」「税負担と受ける行政サービスの質・量」など、日々の生活に関するものが高い。

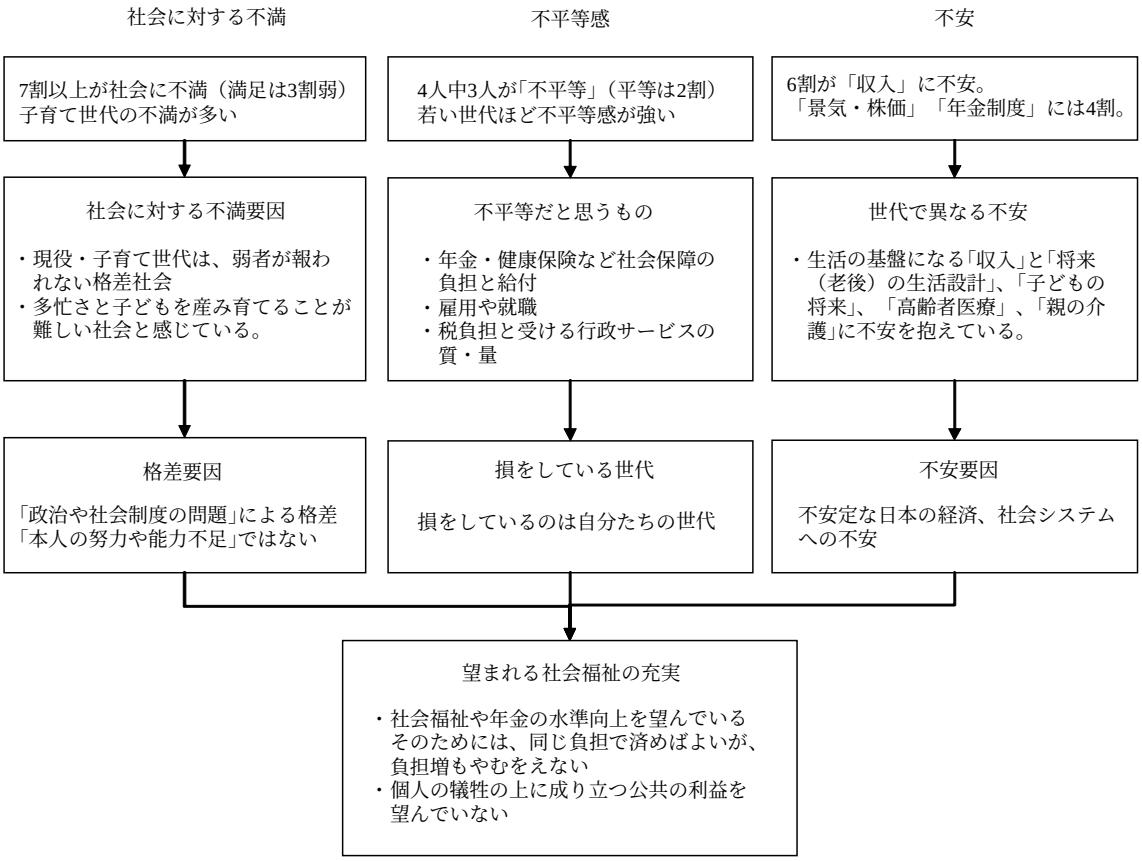
◇どの世代をみても、損をしているのは自分たちの世代だと被害者意識を抱いている。

◇不安なことは「収入」で、「景気・株価」「年金制度」を含めて、先行きに対する不安が大きい。

◇不安なことは世代により異なるが、生活の基盤になる「収入」と「将来（老後）の生活設計」「子どもの将来」「高齢者医療」「親の介護」に不安を抱えている。先行きに対する不安は、不安定な日本の経済、社会システムによるものである。

◇都市生活者は、社会福祉や年金の水準向上を望んでいる。そのためには、同じ負担で済めばよいが、負担増もやむをえないと思っている。しかし、個人の犠牲の上に成り立つ公共の利益を望んではいない。

図表 5－6：社会に対する不満、不公平感

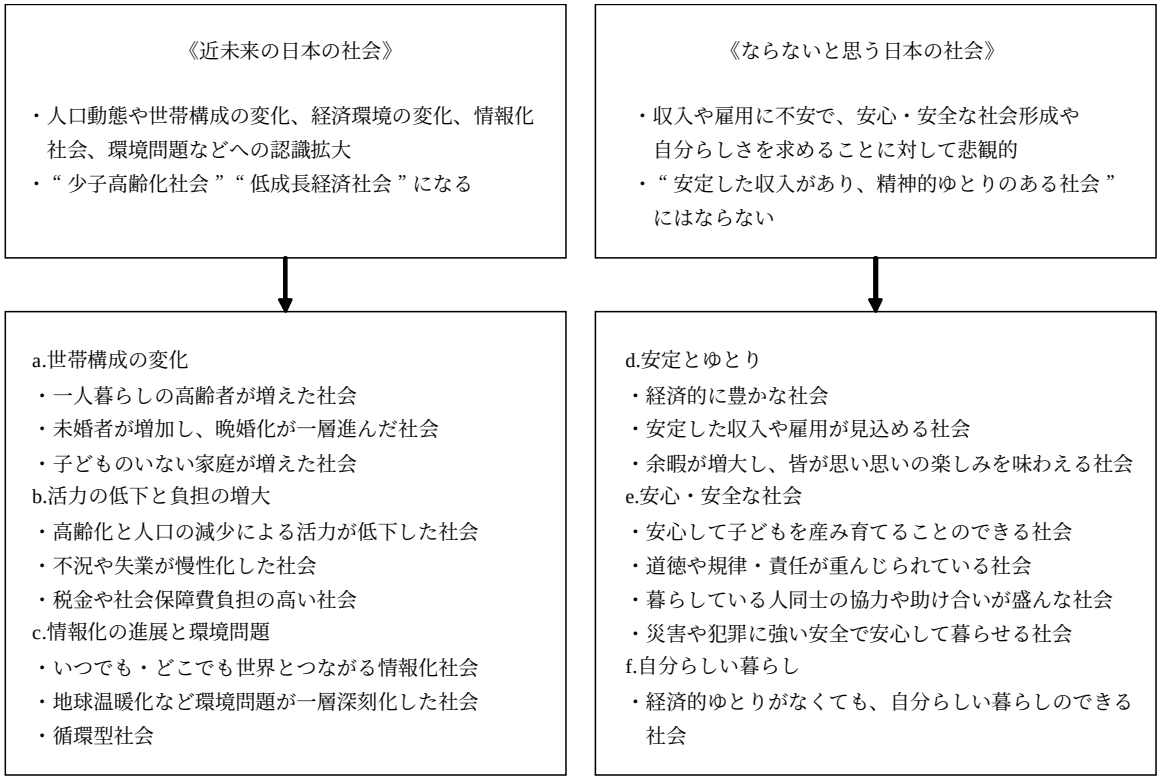


《悲観的な日本社会の近未来》

次に、近未来の日本社会については、人口動態や世帯構成の変化、経済環境の変化、情報化社会、環境問題などへの認識が拡大し、“高齢化低成長経済社会”とみられている。自分とのかかわりのある側面については、“収入が不安定で精神的ゆとりのない社会”という悲観的な見方になっている。都市生活者は、収入や雇用に対して不安感を持っており、経済の不安定さが影響して、安心・安全な社会形成や自分らしい暮らしの実現までもが困難な社会になると思っている。

彼らは、社会福祉や年金の水準向上を望んでいる。このための負担は、同じで済めばよいが、負担増もやむをえないと考えている人も多い。また、彼らは、個人の犠牲の上に成り立つ公共の利益を望んでいない。このような自分の利益を前提とした社会福祉の充実を望む背景には、年金・医療問題に対する不安が大きいと考えられる。

図表 5－7：近未来の日本の社会予想



都市生活者は、現在の社会環境が自らの現実の厳しい生活に多大な影響を与えているものとして捉え、批判的な見方をしている。また、将来の日本社会についても悲観的な見方をしている。彼らにとっては、現実の厳しい生活が社会の問題に起因しているという認識になっているのである。確かに、経済環境の変化による景気の停滞、低成長経済が現実のものになっており、年金・医療問題も不安感に拍車をかけている。また、日本は世界でも類を見ない高齢化社会になり、人口減少も加わって、活力の低下が懸念されている。社会のマクロ的な動きとしての現象は間違いではないが、本来、安心・安全な社会や人の助け合いが盛んな社会、自分らしい暮らしは、自らの取り組みや活動によって実現できるものである。都市生活者は、社会環境の変化が大きいこの時期において、自分の生活に降りかかる社会からの影響のほうに目が向き、生活の現実を社会問題に置き換えているといえる。

3．都市生活者を捉える視座

現在の社会は、環境問題に代表されるように産業社会化の行き詰まりや年金・医療問題などにみられるように日本の社会の問題が表出している。つまり、現在は、ポスト産業化社会の新たな生活パラダイムが形成される以前の時期で、高齢社会を前提とした日本の社会システムの再構築が課題として浮上している時期といえる。言い換えれば、社会の転換期における混乱期から不安定な過渡期にあり、都市生活者のライフスタイルはこの混乱からの“出口探し”の時期にあるといってよい。

このような時期において、これからの都市生活者のライフスタイルの可能性を捉えていくには、図表 5－1 の「都市生活者のライフスタイルを捉える構図」の「Inside out」アプローチに従って、「個」を中心に生活フィールドの広がりとかかわりを見ていく方法が有用であろう。

（1）変化の兆しとしての価値観

「個」の価値観は、生活行動と密接に関係しており、「個」は、価値観や意識に基づいて「個」を取り巻く生活フィールドに対して働きかけ、よりよい生活を目指すことになる。そこで、生活者の価値観に注目し、これからの変化の兆しを読み取る。

《価値観の変化》

◇物の豊かな生活から、人・心の豊かな生活を重視する傾向がみられる。都市生活者のニーズは、物質的なものはかなり満たされた状態にあり、精神的な豊かさへと向かっているのである。物質的な側面において、産業社会化の結果として日本は飽和状態にあるといわれて久しいが、生活者の価値観は、物質的な豊かさから、次のステージへと向かっているのである。

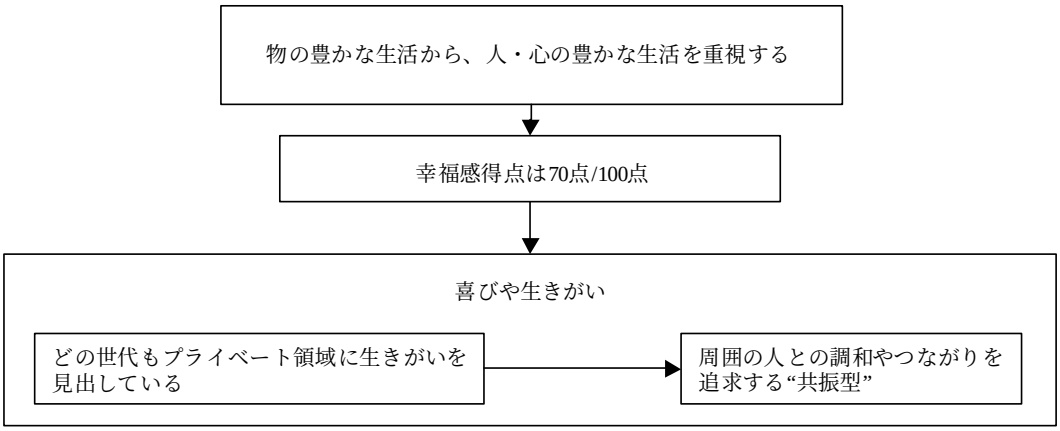
◇幸福度は 100 点満点中 70 点で、まずまずの幸せを感じている。幸福とは、ただ単に物の充足による満足感ではなく、人や心の豊かな状態の中で感じるものである。個人の生活をより豊かなものにしていくことは、幸福度をどれだけ高めていくのかということに他ならない。

◇喜びや生きがいをみても、どの世代も仕事以外のプライベートの領域に生きがいを見出している。現役世代の「趣味やスポーツ」は、自分なりの楽しみや達成感だけでなく、周囲とともに楽しむ行動である。高齢者の「健康増進」は、長生きのためもあるだろうが、周囲との調和のための“自助”行為とみることがで

きる。また、「友人」「家族」「子ども・孫」との関係は、人とつながる喜びである。つまり、彼らの喜びや生きがいとは、周囲の人との調和やつながりを追求するいわば“共振型”に向かっているといえるだろう。そのフィールドは、家族にとどまることなく、友人や趣味の仲間まで広がりを持っている。

生活者の価値観の変化から読み取れることは、家庭回帰の状態を超えて、家族以外の人々とかかわり、つながりを追求する一歩進んだ“人間関係性の復活”に向かっている。家庭回帰は、過去の不況期における行動パターンのひとつである。外食が減り、家庭内で食事するということが典型的な例で、家庭外での支出を抑え、家庭内でつつましい生活に徹するという行動である。しかし、本調査結果によると、生活者の価値観は、個人の生活をよりよい方向に向かわせるために、家族だけでなく、人間関係性を充実させるべく、人との調和やつながりを重視することに向かっている。

図表 5－8：都市生活者の価値観



	趣味やスポーツ	友人とのつきあい	家族との団らん	子どもや孫の育児・成長・教育	健康増進
男性10代～20代	◎	◎			
男性30代～50代	◎		◎	◎	
男性60代～70代	◎		◎		◎
女性10代～20代	◎	◎	○		
女性30代～50代	○	◎	◎	◎	
女性60代～70代		◎		◎	◎

◎＝50%以上、○＝50%未満

（２）社会問題の影響の大きさ

一方、社会環境の影響に目を向けると、本調査では、産業社会化による問題や日本の経済・社会の問題が都市生活者の生活に大きな影響を与えていることが明らかになった。調査結果で見てきたように、生活を取り巻く社会の問題が、都市生活者の生活及び生活意識の不安定化を招いている。

《産業社会化の問題》

産業社会化により世界的に表出している問題は､環境問題である｡都市生活者は、この問題に対して、次のように考え、行動している。

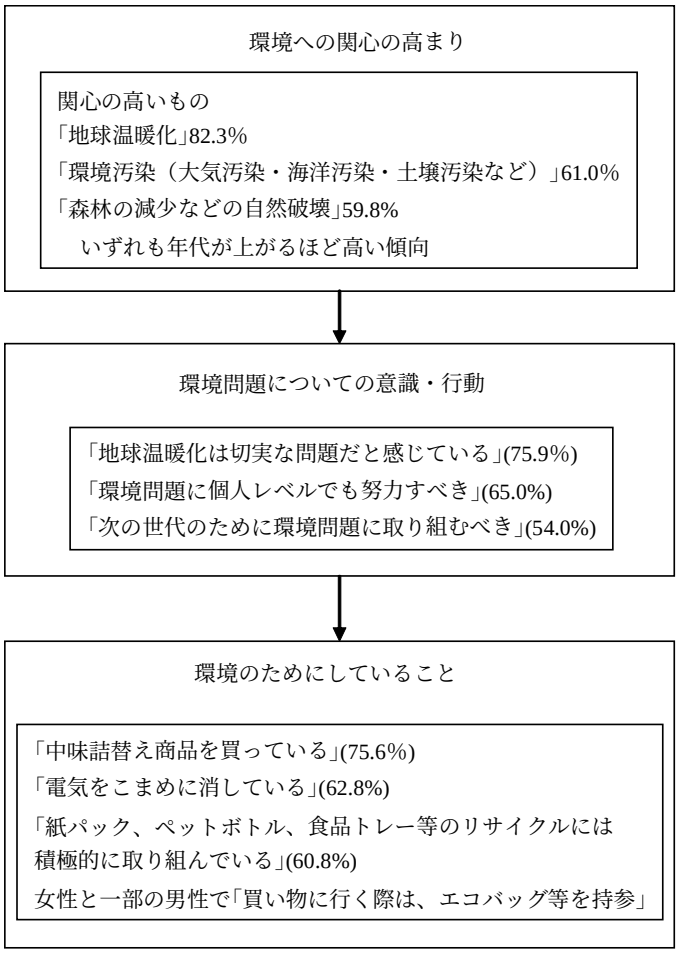
◇関心の高いものは､「地球温暖化」（82.3%)､「環境汚染（大気汚染・海洋汚染・土壌汚染など）」（61.0%)､「森林の減少などの自然破壊」（59.8%）で、年代が上がるほど高い。

◇環境問題に対する意識・行動では､「地球温暖化は切実な問題だと感じている」(75.9%)､「環境問題に個人レベルでも努力すべき」(65.0%)､「次の世代のために環境問題に取り組むべき」(54.0%)と､“地球温暖化”への問題意識が大きい。

◇環境のためにしていることは､「中味詰替え商品を買っている」(75.6%)､「電気をこまめに消している」(62.8%)､「紙パック、ペットボトル、食品トレー等のリサイクルには積極的に取り組んでいる」(60.8%)などである。また、女性と一部の男性で「買い物に行く際は、エコバッグ等を持参」があげられており、省エネやリサイクルの定着ぶりが窺われる。

ここ数年で有限な資源への認識が浸透し、生活者は、身の回りの省エネ、リサイクルに取り組んでいる。自治体のゴミの分別回収や企業のリサイクル活動などにより実現していることもあるが、産業社会化の問題に対応する社会市民としての行動はすでに定着している。

図表 5－9：環境問題に関する意識と行動



《日本の経済・社会問題からの先行き不安》

現在と将来の生活に関わる日本の経済、とりわけデフレ経済は、収入を直撃し、都市生活者は減収を余儀なくされている。また、年金・医療問題は老後の生活に直結する日本の問題として、先行き不安感の要因になっている。

都市生活者が老後を意識する年齢と準備についてまとめると、次のようになる。

◇老後を意識し始めるのは、50代である。50代になると「老後や将来の不安」「老後について考える」が高まる。

◇老後にしたいことは、「旅行を楽しんだり、のんびりと過ごしたい」や「孫の成長を見守りたい」といったことがあげられている。現在の忙しい生活から解放されて時間に束縛されない過ごし方という漠然としたものにとどまっている。日本人の平均寿命が長くなっている今日の老後の生活に対して、より積極的に

かかわっていくことが求められる。

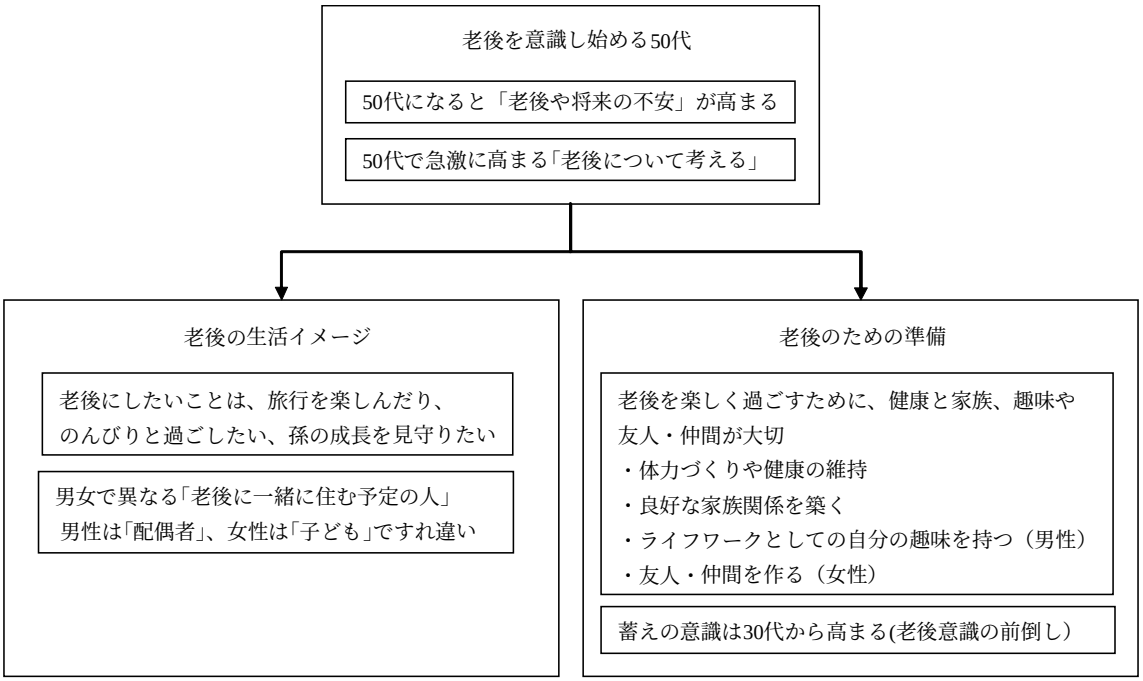
◇老後に一緒に住む予定の人は、男性が「配偶者」、女性が「子ども」になっており、男女ですれ違いがみられる。男性は、職場の人間関係から離れて、毎日の食事のことや家事のこともあり「配偶者」を頼りにするのであろう。

◇老後のための準備は、健康維持と良好な家族関係である。女性は、これらに加えて、友人を作ることをあげている。

◇老後の備えの意識は、30代から芽生える。経済面での老後意識の前倒し傾向がみられる。

日本の社会問題の影響は、老後の年金・医療問題に対する不安の大きさとなって表れている。本調査において、個人の生活意識・実態への影響の大きさが確認されている。

図表5－10：“老後”を意識し始める年代と準備



（3）浮上する“コミュニティ”

価値観の変化を軸にして、「Inside out」アプローチに沿って生活者を捉えると、よりよい生活を構築していくための共通フィールドとして、コミュニティが浮上してくる。

コミュニティに注目すべき理由は、調査結果によると、次のようなものがあげられている。

◇都市生活者は、コミュニティに対して、共通フィールドとしての意識を持っており、とりわけ、地域コミュニティ対するかかわりの意識は高い。地域コミュニティは、安全・安心な生活環境を確保するための“互助”機能として位置づけられており、その必要度は誰もが感じているところである。

◇しかし、実態としての参加は一部の人々にとどまっており、コミットメントは未だ低い状況にある。

◇コミュニティへの意識が高まる背景には、防犯や災害時への備えということが前提になるが、物質的に豊かになり仕事志向が相対的に低下し、余暇に対する都市生活者のニーズが高まっていることや、周囲の人との調和やつながりを追求するいわば“共振型”に向かっていることがある。

◇共通フィールドとしてのコミュニティは、都市生活者の喜びや楽しみといった精神的豊かさの創造につながっていく可能性がある。

さらに、住んでいる地域のコミュニティについて詳しく見ると、図表 5－11 のように、意識と実態のギャップが明らかにされている。

◇地域コミュニティが必要だと思う目的は、「地域の防犯・治安の向上」「いざという時の助け合い」「災害時の対応」「子どもを見守る地域の目」「高齢者のサポート」だが、現状でうまくいっているものは、「伝統文化、お祭りなどの継承や保存」「地域の美化」「住民同士の親睦、交流」にとどまっており、地域コミュニティの必要度と実態にギャップがある。

◇参加しているのは、女 30 代以上と高齢者に限られ、現役世代の男性のかかわりは希薄である。現役男性のかかわりが希薄になっている要因は、これまでの産業社会の中で、生活者のフィールドが家庭と職場に限定され、職場コミュニティに重点を置く生活パターンの名残りであろう。また、都市部における居住地域と職場は地理的に離れたところにあるため、通勤距離・時間が長く、乖離している状態にあることも要因として考えられる。

図表 5－11：住んでいる地域のコミュニティについて

必要だと思う目的	地域の防犯・治安の向上 いざという時の助け合い 災害時の対応 子どもを見守る地域の目 高齢者のサポート
うまくいっているもの	伝統文化、お祭りなどの継承や保存 地域や街の美化 住民同士の親睦、交流
もっと機能してほしいもの	いざという時の助け合い 災害時の対応 高齢者のサポート 子どもを見守る地域の目
参加している人々	女30代以上と高齢者 現役世代男性のかかわりが希薄

迫り来る日本の高齢社会に目を向けると、地域コミュニティは、老後を楽しむ場としての機能や、単身世帯の増加に対するセーフティネットの役割も果たすことになる。地域コミュニティは、家庭生活と直結した“生活圏”であり、都市生活者が安心して生活を楽しむための条件としても、これからの生活の重要なフィールドになっていく可能性がある。

（４）今後の都市生活者研究の方向性

「都市生活者のライフスタイルを捉える構図」（図表 5－1）の「Inside out」アプローチで見えてきたことは、都市生活者が、デフレ経済の影響によって、現状の生活は危機的な状況にある中で､物の豊かな生活よりも人･心の豊かな生活を重視し、周囲の人との調和やつながりを求めていることである。また、生活へのさまざまな社会問題の影響の大きさが浮き彫りになる一方で､“コミュニティ”に対するニーズが見えてきている。

とりわけ、地域コミュニティについては、意識上のニーズは高いものの、参加は一部の人々に限られ、安全・安心機能強化のための地域住民のコミュニティを今後どのように構築していくかという課題として明示されている。地域コミュニティへの参加が低い現役世代の男性は、これまでの産業社会化に伴うさまざまな要因により、現状での参加の向上は望めないものの、引退とともに参加できるよう準備しておくことが必要になるであろうし、地域コミュニティに限らず、家庭、職場以外の第 3 の生活フィールドでの人とのかかわりが、自身の生活に潤いを与え、充実感をもたらすことになる可能性もある。

また、価値観の変化から読み取れる“人間関係性の復活”は、これからの日本の本格的な高齢社会の中で求められる「自助」と「互助」の大切さにもつながっている。「自助」は、自分の生活を維持するための健康の維持や良好な家族関係を築くことなど生活の基盤を中心としたものである。「互助」は、周囲の人との助け合いであり、支えあうことで、地域の人々との交流や助け合い、友人や仲間との交流である。今後、都市生活者が快適で楽しい生活空間を創造していくための一つの視点にもなるであろう。

本調査は、都市生活者の現状を浮き彫りにしたものである。都市生活者のよりよい生活を考察していくためには、これからも都市生活および生活者の意識と実態を基礎的な情報として捉えていくことが必要である。また、今後の調査においても、今回の調査の基本的な枠組みを踏襲し、生活意識と実態、及び生活フィールドとのかかわりを捉えていくことが肝要である。基本的な枠組みを継続し、生活に影響を及ぼす環境要因を加味しながら継続していく方法である。これによって、時系列の変化や環境変化による生活の変化を浮き彫りにしていくことがより可能になっていく。

都市生活者意識調査 2010

分析編

－社会転換期の都市生活者の意識と行動－

2011 年 3 月 31 日　発行

公益財団法人ハイライフ研究所
東京都中央区京橋 3-6-12　正栄ビル 5F
Tel:：03-3563-8686　　Fax：03-3563-7987
http://www.hilife.or.jp

*本書の全部または一部の複写・複製・転記載および光記憶媒体への入力等を禁じます。